

◇劇団からつかぜ
「父と暮せば」
5月21、22、28、29日
井上ひさし／作
平井 新／演出



◇劇団だいこん座
「ワルのポケット」
6月4日
灰谷健次郎／原作
大橋喜一／脚本
石川富志夫／演出



◇劇団名芸
「どんぐりと山猫」
6月11、18日
宮沢賢治／原作
栗木英章／脚本
近藤亜由美／演出



秋田雨雀・土方与志記念青年劇場
『銃口—教師・北森竜太の青春』

原作／三浦綾子 脚本／布勢博一 演出／堀口始

10月13日～11月18日 韓国
12月 5日～15日 北海道
12月18日～20日 東京再演（東京芸術劇場中ホール）

表紙のごほう

『銃口—教師・北森竜太の青春』公演チラシ
現在、40日間にわたる韓国14都市巡回公演の真つ最中。三浦綾子の大作「銃口」から、特に主人公・北森竜太が新任教師として赴任してから戦中・戦後の時代に翻弄され苦悩する様に焦点を当てて、2002年、舞台化しました。そして戦後60年の今年、真に日韓の友好の掛け橋になりたいと韓国公演を計画。続いて作品の舞台でもあり三浦綾子の出身地でもある北海道公演、さらに東京再演も行ないます。

おりしも首相の靖国神社参拝や歴史教科書問題でアジアとの関係が大きく揺らいでいる昨今。先の戦争を反省し、過去の歴史にきちんと向き合いながら未来に向かおうという人が日本にもたくさんいることを、韓国の人たちに伝えていきたいと思っています。

なお、今回の韓国・北海道・東京連続公演は、外務省の「日韓友情年2005」記念事業として認定されています。

舞 台

◇劇団はぐるま

「カモメに飛ぶことを教えた猫」
7月16、17日
ルイス・セプルベダ／原作
河野万里子／訳
いずみ凜／脚本
汲田正子／演出



◇劇団四紀会

「江島屋騒動」
7月29、31日
三遊亭円朝／作
岸本敏朗／演出



◇神戸ドラマ館ボレロ

「夏の砂の上」
8月6、9日
松田正隆／作
三村省三／演出



公 演



◇劇団銅鑼

「エイジアン・パラダイス」
8月19、28日
杉本美鈴／作
鈴木真理子／演出

◇関西芸術座

「反応工程」
8月31日、9月4日
宮本 研／作
門田 裕／演出



◇青年劇場

「谷間の女たち」
9月22日、10月3日
アリエル・ドーフマン／作
水谷八世／訳
鶴山 仁／演出



舞 台

公 演

◆ もくじ ◆

グラビア (舞台).....	1
2005年11月中旬以降の公演	6
巻頭言 今こそ、ふんばるとき	8 城谷 護
シリーズ「作家・作品・舞台」①	
「井上ひさしドラマ」の受けとめ・とりくみ・想い.....	10
「貧乏物語」——「言行一致」の思想	11 関 きよし
「闇に咲く花」の演出に想う	13 布施佑一郎
井上ひさし戯曲の喜劇性.....	15 東川 宗彦
「井上ドラマ」とわたし	17 石塚 幹雄
「井上ひさし」役者談義	19
佐藤栄子 19 / 北 宗吉 19 / 竹橋 円20	
劇団を訪ねて (劇団やませ)「八戸」から発信する芝居づくり.....	21 よしだはじめ
アイルランド公演旅行メモ	28 加藤 武夫
北から南から (劇団通信)	32
観劇記 神奈川県演劇連盟合同公演『元禄・馬の物言い』.....	45 境野 修次
劇評 北海道での【父と暮せば】の上演について	46 尾田 浩
3つの「父と暮せば」雑感	48 杉浦 啓介
劇団道化「長崎 んグラフィティ」	49 星野 明彦
劇団上野市民劇場「彦市ばなし」	51 栗木 英章
京芸「きらめく星座」	52 土屋 安見
演劇集団和歌山「風吹にひびく唄」	54 森本 景文
大阪府職員演劇研究会「朝のチャイムがあなたの家に」	56
劇団息吹【冬の提灯】	58 神澤 和明
劇団きづがわ【武器よ、さらば】	59
劇団大阪【スピリット・プレイ〜霊戯〜】	60
劇団未来【夫婦レコード】	61
劇団大阪【闇に咲く花〜愛敬稲荷神社物語〜】	63 今泉おさむ
劇団コーロ【青い風の街かどで】	65
関西芸術座【反応工程】	67
劇団潮流【ボクサー魂】	69
演劇時評 「六十年目の夏」——舞台に描かれた世界をみる	71 鈴木 太郎
戯曲 乱気流	76 芳地 隆介
情報BOX	86
憲法9条改悪を許すな「戦後60年」 86 / (東会議総会報告) 89	
(西会議総会報告) 90 / 新会員紹介 91 / 劇団山形創立40周年 93	
奥羽ブロックゼミ 92 / 関東ブロックゼミ 93 / 中部ブロックゼミ 94	
西会議ゼミ 95	
全日本リアリズム演劇会議 住所録	96

2005年11月中旬以降の公演

●劇団通信の中から11月中旬以降の公演をまとめましたので、都合のつく方はぜひ観劇しあってください。
●今後、公演予定については、劇団通信とは別に、公演日・会場・タイトル・作・演出をはっきりと書いてお送りください。

岡崎演劇集団	11/12・13	せきれいホール	三角帽子	テラルコン / 作 浅井克彦 / 清水秀樹 / 演出 井上ひさし / 作 いとうエリコ / 構成演出 辺見じゅん / 原作 ふたぐちつよし / 脚色 森本景文 / 演出
劇団石るつ	11/16・17	深川江戸資料館小劇場	笑劇的演劇!!	永井愛 / 作 佐野秀明 / 演出 栗木英章 / 作 坂下和代 / 演出
劇団未来	11/18～27	未来フォーラムスタジオ	タメイ	永井愛 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
劇団名芸	11/19～27	名芸平針小劇場	見よ、飛行機の高く飛べるを	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
劇団すがお	11/20	いんべ市さくらホール	北勢線物語	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
劇団名古屋	11/25・26	桑名市コミュニティプラザ	美ら海	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
劇団きづがわ	11/26・27	熱田文化小劇場	こんにちは、母さん	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
関西芸術座	11/30～12/4	クレオ大阪東 関芸スタジオ	ごんた	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
劇団やませ	11/4	八戸市公会堂文化ホール	葉菜の海	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
劇団ひの	12/4	八王子いちようホール	二十四の瞳	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
劇団コーロ	12/18	日野市七王公会堂 一心寺ソラター頂祭	聖の青春	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
劇団弘演	12/10～11	弘前市アネガ	お気に入り	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
劇団蒼生樹	12/16～18	神奈川県青少年センター	お気に入り	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
青年劇場	12/18～20	東京芸術劇場中ホール	統一教師・北森童太の青春	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
劇団はぐるま	2/11・12	岐阜市文化センター	遊行僧 円空	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
劇団綺芸	2/18・19・25・26	劇団稽古場	夏の盛りのお祭りのように	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出
劇団四紀会	2/5～3/12	県民小劇場ほか	仙女の錦 彦市ばなし	栗木英章 / 作 久保田明 / 演出 永井愛 / 作 林田時夫 / 演出 フライング / 作 亀井賢二 / 作 吉原豊司 / 訳 亀井賢二 / 作 阿部幹 / 原作 北野茨 / 脚本 栗谷川洋 / 演出 壺井栄 / 作 佐原利勝 / 脚色・演出

巻頭言 今こそ、ふんばるとき

全日本リアリズム演劇会議・事務局長 城谷 護

今年8月、全リ演の東と西のそれぞれの総会に出席することができた。ここ6、7年、東と西の総会が同じ日に開かれたため、東の事務局長でもある私は西の総会にはずっと出席できないでいたのだった。

われわれ全リ演の集団が抱えている悩みは深刻である。

主なものをひろいだしてみると、

- (1) 劇団員が減っていく。
- (2) 観客数が伸びない。
- (3) 稽古への集中が悪い。特に若い人たちは仕事との関係で深刻。

(4) 職業劇団では上演回数激減で、まさにピンチ。

などである。

では、どうすれば打開できるのか。それを求めて総会に結集したのだが、もちろんそんな簡単に答えが出せる

はずがない。しかし、よく耳を澄ませて聞いていると、総会の実践報告や「演劇会議」誌の中にも答えが潜んでいるように思えてならない。

地域に結びついた企画を

地域と結びついた題材を探りあげることで話題を呼び、劇団員や観客を増やした例、市民参加型の企画で今まで劇団が及ばなかったところまで観客層を広げた例、今問題になっていることを採りあげて上演して成功した例などがあげられる。

こうした経験は「演劇会議」誌にも載っている。劇団の中で「演劇会議」から学ぶという話し合いの場を設けたりすると、今まで見過ごしていた「宝物」がみつかるかもしれない。

地域の人々や自治体との連携

劇団員が減っていくと、発想も貧相になりがちで、どうしても自分たちの甲羅に合わせた作品に甘んじてしまおうという傾向がある。そこを思い切つて突き破ることもたまには必要ではないか。

創作劇が団内でできなければ書き手を探して依頼するとか、プロデューサーも企画段階から入つてもらつて一緒に企画を練るとか、演出者も呼んできて創造的力量を高めるとか、考えられないか。従来のパターンに固執しないで、発想は大胆にそして柔軟にである。

地域の人々や市町村などの自治体とも組んでやる企画があつてもいい。とくに県や市町村の文化部署の職員とは顔見知りになるところまで通つて情報交換や意見交換をすることが重要である。すでに全リ演の中でも自治体と協同作業をやつて地域の市民から信頼を勝ち得ているところも少なくない。

創造力の向上とリーダーの気概

創造の質を高めることは決定的に重要である。なかでも創造的リーダーの使命は大きい。プロ野球のある監督が「結局、球団はその監督以上にはなれないんですよ」

と語っていたのを覚えているが、集団のリーダーの役割を言いあてていると思う。創造責任者の勉強が求められているのだ。よその集団や演出から学ぶ謙虚さと、よりいい舞台を創り出す気概というものをもちたい。

閉塞的な社会状況に、創造者としてどう向き合うかが問われている。劇団とか集団としてより、まず創造リーダーとしての、個的な自覚が求められているのではないか。

定年退職者の力を活かす

よく劇団の高齢化が嘆き節として語られるが、私はそうは思わない。職場を定年退職すると、現役労働者のときはできなかったことが今は山ほどできるようになる。役所との折衝はもとより、劇団事務所への詰め、諸団体、市民運動との連帯、講師活動、創造的なことでのお手伝いや出演などあげればキリがない。それは本当に老舗劇団だからこそできる、いわば財産である。ペテラン劇団員の力を劇団内にしまいこむのではなく地域のためにも發揮してもらう必要がある。

仲間劇団に学ぶことはまだまだ多い。恐いのは学ぶこととなんかないと思ひ込む傲慢さと、新しいものに挑戦していく若さの喪失である。

「井上ひさしドラマ」の 受け止め・とりくみ・想い

新しい「シリーズ」をはじめるところにした。タイトルにあるように「作家(論)」「作品(研究)」「舞台(評)」を少しだけ視点を抜け、深めてみようとのねらいがある。いきなり成果をあげたり、いい論文が生まれるわけにはいかないのは確か。でも、回数を重ねるなかで小さな(また、有効な)実りを得たいと願う。

対象は、「全り演」の作家、創られた作品・舞台が中心になるのは当然だが、必ずしもそれだけに限定されなくともいいかと思う。文章表現も時々にくふうして、対談や討論会の形をとったり、一人のひとに長文の論を展開してもらおう、当事者の参加を求めるなどの変化をとりたい。問題は、対象となった作品や舞台をどれだけのひとが読める(接し得る)かということであろうか。

第1回として、多くの劇団で上演

の機会をもっている「井上ドラマ」をとりあげてみた。これだけで井上ドラマをおさえこむなどとうていできはしないが、スタートとして糸口になればということでの設定。

執筆者は、関きよしさん——戦後すぐ「新協劇団」に参加、「中芸」「仲間」でも演出。65年から「舞台芸術学院」で若い人の指導をずっと担当、71年「池袋小劇場」を創立主宰している。東川宗彦さん——最近「桑名の演劇祭で『日本の牛』、古い人には『はたらき蜂』などの作品で知られている。石塚幹雄さん——『きらめく星座』の演技は出色のできといつてよい。最近「演出中心の仕事。布施佑一郎さん——『闇に咲く花』について、劇団は『父と暮せば』を上演。そして、演技のとりくみについては、関西3劇団の役者が話し合ってくれた。(編集部)

『貧乏物語』

——「言行一致」の思想

池袋小劇場 関 きよし

(演出)

日本のマルクス主義経済学者として、人道主義的立場から貧困問題の解決に関心を寄せ、「世の中から貧乏をなくすにはどうしたらいい?」と問いかけた河上肇博士(1879—1948年)が『貧乏物語』を書いたのは1916年のことである。以後、研究・啓蒙に専心、政治活動にも関わり、治安維持法により逮捕投獄され33年から37年まで服役した。

井上ひさしの戯曲『貧乏物語』は1998年10月に書かれ上演された。舞台での時・所は1934年の3月、河上が「貧乏物語」を書いてから20年近くの歳月が経つ。河上肇服役中の留守宅を守る妻ひと娘ヨシ、そこに集う4人の女

性は、孤児院出身の田中美代、商家の養女の竹内早苗、カフェの女給をする新劇女優の金沢クニ、芸者をきらって女中になった加藤初江。この20年は6人の登場人物の生いたちと重なって、みんなが背負わねばならなかった過去の時代の不幸と貧しさが春の数日間の出来事に集約され語られる。劇の構造の基本は、河上肇の問いかけ「貧乏をなくすにはどうしたらいい?」が、世間からはまったく回答を与えられぬまま放置されていたことを物語る。

本誌の読者には劇のあらすじや時代の状況を述べる必要はないだろう。女性たちの真摯で深思、率直なせりふにふれてもらうのがいい。最初に登場する田中美代は「これもと京都帝国大学教授の留守宅でございませう……ああ、情けない」。隣のカフェ女給寄宿舎から越境した金沢クニ「この20年間、何百万も

のひとたちが奪い合うようにして先生のご本を買いたいもどめたというのに留守宅がこんなにも粗末だったとは……」と。

そこから劇は展開して、京都から来た竹内早苗をふくめた女3人の価値観の反転が始まる。美代「先生の口ぐせは『質素節約』なんですよ」。早苗「質素節約だらけですよ」。クニ「質素だからこそすばらしい」。美代「粗末はりっぱかね」。早苗「りっぱは粗末ですか」。クニ「それこそが河上肇の利他主義……『貧乏物語』に、たえず流れている考え方で……書斎から世の中へお出になり……なによりわたしたちのこころを打つのは、先生の言行一致のお覚悟。……ご自分のお考えに誠実に行動なさいました。これはすごいことですわ……お国はその態度がけしからんといいいま、罰をうけていらっしやる——」と。「言行一致」つま

り矛盾をもたずに生きること、これが河上肇とひでの「思想」つまり生き方であった。

次女ヨシは、前衛党に入りこんだスパイが仕組んだギャンブル事件に関わって逮捕され、拷問によって良心を曲げたことでの「自己分裂」を告白する。思ったとおりの自分を生きること、捨てることは希望を失い精神的な貧しさの中に生きることになるのだ。それが6人の女たちみんなの共通の認識となつて、劇のハイライトの場面。

ヨシ「わたしの考えはまちがっていました」という一行を。……その一行のせいで、あの地獄から出てくるのができたのです。言い切つてなにか悪き物が落ちたよう。「でも、じつをいうと、警察署の外にはもっとおそろしいものが待っていた」。ひで「なにが待っていたの」。ヨシ「自分」。ひで「自分?」、4人

「闇に咲く花」の演出に想う

劇団からつかぜ 布施佑一郎
(演出)

やりたい作品として、ずいぶん前から上演候補作品としてとりあげられていた。が、いつも上演時間の長さや登場人物が多いため、弱小。からつかぜにはたいへんな作品ということで実現しなかった。

1999年、時代が時代なので、今上演したいと決定されたが、そのときは上演許可がおりなかった。こまつ座が昭和庶民伝三部作として公演していたためである。

この作品が、からつかぜ50周年記念公演として、日本の軍隊が海外派兵された今、上演できることになったのだ。

この作品は、庶民を主人公に据え、人間を大切に、私たちの生きてい

もつぶやく「自分?」——ヨシ「わたしは、自分がこわいし……自分わたしは憎い」「わたしが20年かけてつくつてきたその考えを一口でいうと」「世の中には貧乏という厄介なものがある」「なくすには、世の中の仕組みを変えなくてはならない。そのときに大切なのは、人間みんな同じだという真理と、それでもやはり努力したものは報われるという真理と、この二つの真理をどう結びつけるか……」。ひで「お答えは?」。ヨシ「この先で考える、大難問だもの」と。

竹内早苗の夫は、内務省警察保安局の官吏、当時の特高警察を直接指揮監督していた元締のような存在で、河上肇や彼女たちを苦しめていたのはお国が仕掛けた大がかりで卑劣な謀略だったのだ。人々はそれに気づく。最後に早苗は「こつちからきっぱり離縁状を叩きつけてまいり

ます」と去る。

自己分裂の危機をのりこえ、社会の大勢に流されず、希望をもって生きる、その大本は、河上肇が示した「言行一致」の思想、かけがえのなさは人間の命とひとしい。

くりかえすが、この劇の「時」は1934年。そのリアリティを証するものは河上ひでの著作『留守日記』であるが、作者はもう一つの仕掛けを企んでいる。戦中、当局の検閲・統制・弾圧でいけばんひどい被害をうけたのはほかならぬ新劇であった。新劇への大弾圧はこの年だったのだ。その俳優たちの多くは河上著『貧乏物語』『第二貧乏物語』を読んでいた。統制下に舞台上に立てずひと言も台詞を言ったことがない女優志願者金沢クニに『どん底』の歌を唄わせアンナの台詞を喋らせるのは、作者の限らない新劇へのオマージュにちがいない。

く苦しみ喜びを生き生きと描いている数少ない作品の一つだ。今を生きている私たちの心に時代を超えて響いてくる。そんな作品を、私たちなりの劇場にする難しさと、感慨を感じた。今、多くの人たちに観てもらいたい芝居で自分も含めて感じたい舞台だと思っている。

五味川純平の「人間の条件」のまえがきにこんな文章があった。「歴史がもしなんらかの程度に繰り返されるものならば、われわれ戦中派が味わった苦汁は、戦後派の人びととも無縁ではないかもしれない。なぜと云って、われわれが前の世代の遺産としてあの戦争を苦痛と絶望の中で背負った事実があるにもかかわらず、いままた恐ろしい遺産相続の遺言がなされようとしているかに見受けられるからである」。

今はずっと深刻だ。イラク戦争に日本の軍隊を派兵したのだから。芝

居の中に流れるテーマに、作者が健太郎に言わせている言葉がある「過去の失敗を記憶していない人間の未来は暗いよ。なぜって同じ失敗を繰り返すに決まっているからね」と。だが作品のテーマを舞台上から声だかにしゃべることはしたくない。観た後、お客様の中でなにかを心の中に結実できたらしいなと思つて創つた。私は観客のみなさんにはお芝居をおもしろく見てもらいたいし、楽しんでもらいたいと思つている。

舞台上に登場する人物たちはどこにでもいそうな、心優しい気のいい人たち、周りの人のことを自分のことのように心配する人たち。食べていくためなりふりかまわず懸命になるそんな人たち。バイタリティーあふれる女性たち。かつて、自分の父や母が置かれていた時代。舞台いつぱいの明るい笑い。時代の暗さなど吹き飛ばしてしまうエネルギー。公

磨などは健太郎の戦死広報が届いて以来、神主でありながら神様がお留守としか思えなくなっている。

ところが生きて帰ってきた健太郎の「神社は道端の小さな花だ」「人びとがほんの小さな幸せを願うところ」「そんな神社にしたいといった言葉を受けた公麿は、C級戦犯で死刑になった健太郎の意志を継ぎ神社を「闇に咲く花」にしようとする。人間くささそのものだ。

庶民の代表たちが繰り広げるドラマに大いに笑ってほしいと思った。だが、現実には力がない私には、荷が重く甘くはなかった。

私たちは舞台の世界を少しでも広げようと現地調査「猿楽町ツアー」と称し、愛敬稲荷神社の舞台となった大田姫神社をはじめ、靖国神社・金華小学校・日活映画館跡・ニコライ堂・神田明神では太鼓も聞いた。昭和館では当時の闇米の買出しの映

像などを見てきた。

課題として、当時のニュース（山口判事の抗議の餓死など）調べや、みんなで分担して語句調べをピースごとに拾い出し。1. 神社関係、2. 軍関係、3. 野球関係、4. 生活関係、5. 昔の字句など9つに分けて調べた。1947年カレンダーの作成などもおこなった。ところが資料の活用はたいへんで、全劇団員が作品の世界を共有することは困難だった。

私としては、振り演技では懸命に生きる庶民をお客さんと共有できない。演技に実感がほしい。役者自身が実感できるような小道具の準備。女たち一人ひとりにお面をつくれるようにしてもらった。神主の所作と祝詞を実際にできるようにしてもらった。夏の暑さを感じてもらうことも要求した。生活の場としてのお面工場と神楽堂を望んだ。

あと心がけたのは、台本のおもしろさを役者に知ってもらうことと、舞台上で役者自身が関係の発見に努力してもらうことだ。

自分が感じる井上作品は、セリフの文字数が多くて説明芝居になりたがる。笑いをとりたがる。対策として登場人物の要求で行動をハッキリさせる。第2場のおみくじの場というとき、繁子がおみくじを見つめているなかでこれに賭けてみたい。これに賭けるしかない。おみくじに頼る。自分の中に湧き起こる想いが、体の中に満ちてから、おみくじを引く。

創ってくるなかで多くの発見があり、世界を膨らませようとしたが、演出として力のなさを再認識せざるをえなかった。でもこうして芝居を創ることができることに感謝をした。戦争でもなければ芝居を創る自由もなくなってしまう。これから先もともに芝居を楽しんでいきたい。

井上ひさし戯曲の喜劇性

東川 宗彦
(作家)

井上戯曲は関西でも多く上演されている。

とりわけ、

「父と暮せば」

「頭痛肩こり樋口一葉」

「泣き虫なまいき石川啄木」などは繰り返し上演されている。

「父と暮せば」は別として、樋口一葉や石川啄木は普通に作品を読んで感じる作品感とは少し違っていて文章や詩はあまりだささないで、作者の生活を、それも、泣き虫や頭痛という観点からとらえるおもしろさには敬服の限りである。

これでは、当の作者に少し失礼にあたりはしないかと思うくらいおもしろく書かれている。

なるほど、樋口一葉や石川啄木はこういう具合にも観られるものかと、一種の開放感も観客に与えてくれる。

「吾輩は漱石である」

猫が漱石を観るのではなくて、漱石が猫をどう観るのかと想っていたら、少し、はぐらかされた。

話は修善寺の大患の大吐血、

20分前からその瞬間まで、

1910年8月24日水曜日の

午後8時10分から同30分までが

プロローグ。

大吐血の直後から30分間の、世に言う「三十分の死」のあいだに、漱石の意識下に見え隠れしていたと思われる「特別詠えの時間」の切れ端1234の4つの場面

大患のほぼ1年後のとある朝、
明治44（1911）年8月10日

木曜日の午前8時からの20分間
がエピローグ。

夏目漱石 44/45歳

鏡子 34/35歳

夫婦のおもしろいやりの背景になっっているのだが、この話が喜劇性の背景になるのかと感心をしたり疑問をもったり。

「日本人のへそ」

第一幕―吃音矯正発声練習―

鶏はコ、コ、コ、コケッコッコと鳴きますが、別に吃っているわけではありません、とききます。

吹き出してしまいました。

言葉の遊び、才気、頓知、随所に、どの作品にも共通してでています。

ただ、それが勇み足のように、多すぎてでることたしかです。

まア、お芝居なんだからいいじゃないかとおもいますが。

「表裏源内蛙合戦」

表の源内 そういうときは手掻きをします

頼恭 手掻き？

表の源内 さっぱりします 腰が

羽毛の如 軽う 極楽浄土で遊ぶ

ような えもいわれぬよい気分になり

ます。冗談ではありません

頼恭 そんなよいものか

表の源内 気が遠うなります

頼恭 だんだんたまらなくなつて

頼恭 手掻くは何を手掻くのか

表の源内 テチ棒

……引つ張り出して

手をこう掛けて 柔らかく揉みながら

前や後ろに しこいて……

頼恭（無邪気に）うん いい！

長松 いいなア

「井上下ドラマ」とわたし

演劇集団土くれ

石塚 幹雄

（演技・演出）

「土くれ」で上演した「井上作品」は、「十一匹のネコ」「闇に咲く花」「人間合格」「きらめく星座」「紙屋町さくらホテル」の5作品だけである。しかし、土くれの上演活動の中で、右の作品はそのいずれもが群を抜いて印象に残っている。

「井上戯曲」の特徴は、俗にいわれる「下手な舞台を見るより本を読んだほうがおもしろい」という言葉が、そのほとんどを語っている。大きなテーマに挑みながら緻密な構成、複雑困難な事象や人間関係についていねいで巧みな解説を加え、それがための長文の台詞まわしにもスキがなく、そしてなによりも「井上下ドラマ」の命ともいえる「笑い」と「涙」

頼恭 四方吉 こんないいこと 何処で 知ったん？

表の源内 自分で発明したん 四つ

のとき

二人（ひどく感嘆して）偉いなア

ここまで書ける井上ひさしに感服

できないわけがない。

いわゆる少年Aやその後の各地の

BやCに犯罪を犯す前に、こういう

芝居をぜひみてもらいたかったと

小生もかねがね考えていたから。

「天保十二年のシエイクスピア」

これは「天保水滸伝」にシエイクスピアの全作品をピックアップして適用したもので、歌の多い芝居である。

小タイトルに、赤ん坊と陰謀は女の陰部から生まれるとある、そういうえげそだが、そう言い切つていいのかなアと、思いながら読み進んだ。たしかに女人悪人的に話は進む

女人を悪人にしたのは男ではないか……

男の中にある悪と善とその中間

女の中にある悪と善とその中間

そんなものを人の世のものあわ

れとして生きてきたのではないか。

現在の人間のさまざま醜い姿、

戦争テロ

テロとの戦い

ドストエフスキーでも

書ききれない

人間の犯す邪悪

空しい 空しい 空しい事象

だから井上ひさしは、ここまで

女人悪人を書いているのか。

とはいえ、その喜劇性において着

想、構成、言葉、セリフ等々、種々、

勉強になつたし、触発されることが

多くあった。

を随所にちりばめている。舞台化するうえでこの困難さにはここにあるといえる。最近はこの傾向がいつそう強烈になつたクライがあり、テーマ性が前面に出、説明が長く硬直化している感じは否めないが、「反戦」の思想は一貫しており、多くの観客によって支持されている。

そのなかの2作品「きらめく星座」「紙屋町さくらホテル」（前者では傷痍軍人・源次郎を演じ、後者では演出を担当した）について、わたしの記憶をたどってみた。

「きらめく星座（オデオン堂物語）」

その副題のとおり浅草のレコード店が舞台。戦争のきな臭さが漂いはじめ音楽にも統制、家族の中から脱走兵が出て「非国民の家」になつたかと思うと、娘が傷痍軍人と結婚したからと今度は一転「美談の家」に。源次郎は何のとりえもない一市民

だったのだが、傷痍軍人となり率先して「軍国」を語らされているうちに、いつのまにかカチカチの軍国主義者に。必死にそれを装う源次郎から戦争のもつきびしさをやつらさ、罪が表現される。こうした間接的表現からテーマに迫るのが井上戯曲の特徴でもあり、近年上映されたイタリヤ映画の名作『蝶の舌』とも共通している。

やがて、子どもを身ごもつた源次郎の妻・みさをは生まれてくる子の将来を憂んで流産をしようとする。そのとき、「人間は数限りない奇跡の産物」と説き聞かせ思いとどまらせる竹田先生。ここで竹田先生が語つた「この宇宙にある惑星の数は」で始まり「それが人間に至つたのも奇跡の連続です」で終わる一文は、井上ひさしの「人間宣言」だと、わたしは位置づけている。それが庶民のレベルから発せられることも「井

上戯曲」の大きな特徴だ。

「きらめく星座」とはこのオデオン堂に集ったそれぞれの人間一人ひとりが「星」なのだ。その意味から今思うと、わが「土くれ」の舞台のフィナーレが舞台を埋め尽くすほどの満天の星だったことが悔やまれてならない。

「紙屋町さくらホテル」

天皇の戦争責任という大きなテーマを「劇中劇」で楽しませるといって告発している。

長谷川海軍大將は天皇の密命を帯びて国情が戦争継続の状態にあるかを見てまわる。陸軍中佐針生はそれを監視する役目。広島紙屋町のホテルで丸山定夫率いる「桜隊」と同宿、役者不足から2人とも駆り出されて團井恵子らとともに「無法松の一生」の舞台へ。2人が旅立った次の日、広島は2人が関わった人々とともに

きのこ雲の下にあった。

戦後、長谷川は、自分の決断の遅れが天皇の決断を遅らせ、広島・長崎の惨禍をひき起こしたとしてA級戦犯として裁くよう名乗り出る。その心の中には忘れることのできない広島で過ごした桜隊との1週間があった。

『無法松の一生』に夢中になる2人の軍人。それを取り巻く桜隊やホテルの女主人をはじめとする人々。その「芝居」を喜んでくれた市民や兵士。戦争中のつかの間の「平和」が実は国民にとってごく当り前の生活。「平常の中の異常が実は異常の中の平常」この簡単な方程式に気づいたときすでに遅く、演じていた真剣な瞳も、それを覗いていた歓喜の瞳も一瞬のうちに光を失ったのだ。その責任は私イコール天皇にありと迫る長谷川大將。「私は、丸山定夫さん、團井恵子さん、……そして指導者た

ちの決断力のなさによって命を絶たれたすべての日本人の名代」と。

この作品をひっぱるのは、『無法松の一生』——「演劇」を創造する楽しさ、人間同士の交流の楽しさを表現することだ。楽しければ楽しいほど長谷川大將の苦悩と懺悔は深まる。残念ながら、わが集団の舞台がその点に充分食らいつきえたかといえはいささかの心残りがあつたことは否めない。

* * *

「井上ドラマ」はそのテーマ性の強烈さがゆえにスローガン芝居ともとられ、そう演じた舞台もないわけではない。しかし、前述したように、さまざまなエピソードを緻密な構成によって大きなテーマに迫っていく点で、集団や演出の創造的計算が大きく舞台表現の豊かさにかかわっていくと奥深さをもっていることは、たしかなようだ。

「井上ひさし」 役者談義

芸がないとできない

劇団息吹 佐藤 栄子

うちは1989年の『イーハトーボの劇列車』をきっかけに研究生公演も含めて井上作品をたくさん上演してきました。大阪ではうちがいちばん多いんじゃないかな。劇団のみんな、井上作品が好きです。作品のもつヒーローマンな側面が魅力だし、一人ひとりが生き生きと書かれてますよね。それに歌や踊りがふんだんにあるのも魅力です。うちは演出はあまり細かい注文はつけなくて、役者がほとんどん役を工夫して、提案するといった劇団なんです。

でも、読んでおもしろいと思っただけで、読んでみると、戯曲にいろんな仕掛けがあつて手強い。「てにをは」やテンやマルをいかげんにやっていると作品の意図がお客さんに伝わらない。それにこのころの井上作品は楽器ができないとやれないです。よね。それと芸がないとできない。やりたくてもやれない作品も多い。今、息吹は「紙屋町さくらホテル」の稽古の真っ最中です。私の役は日系二世の神宮淳子。ようやくパート練習が終わって通し稽古に入るところです。この作品は二重構造、三重構造になってますよね。

次は「シャンハイムーン」をやりたいですね。

「虚」の部分で本音

劇団四紀会 北 宗吉

1986年に四紀会ではじめて『き

僕は初演の『雪やこんこん』に番頭の役でました。このときは演出の岸本はあまり細かい注文はつけずに役者に比較的自由にやらせてくれた。このことが成功した理由だと思

います。「雪やこんこん」は虚と実
でなりたっているけど、虚の部分で
本音をいつてる。そこが芝居の芯に
なっていますよね。

役者がのびのびとふるまえる、オ
ーバーに演技できる、井上作品には
そういうことを許してくれる演出が
ほしいですよ。

楽しかった

『シェイクスピア』

劇団京芸 竹橋 円

京芸は25年前に『十一匹のネコ』
を上演したのがはじめての井上作
品です。このときは最初はものすこ
く不評で、新聞に「リアリズム作品
をやってきた京芸が何という作品を
やるんだ」と書かれましたが、しだ
いに売れはじめました。僕の役はニ
ヤン11です。十一匹のネコに自分た
ちの鬱積をぶつけたところが共感を

えて、荒れていた中学校や高校でも
うけ入れられたんです。エビロー
グはカットしました。「エビローグ
とつたらあかんで」という意見も劇
団にあったけど、井上さん自身がや
らなくてもいいといってるんですよ
ね。

『国語元年』はセリフの勉強にな
るという理由で選んだんだけど、も
のすこくおもしろかった。お客も稽
古場に800人が集まった。僕はこ
の作品で虎三郎と清之輔をやって
るんです。虎三郎は会津弁です。井上
作品の家族はどれも楽しいよね。

この夏『きらめく星座』を上演し
ました。僕は小笠原信吉役。僕は最
初、上演に反対だったんです。今の
うちの力量ではできないと。初回の
上演が終わったとき、演出の藤沢さ
んが「これは作り方まちがえたな…」
って言うてましたが、2回目から客
席がわきた。この作品は、最初

劇団を訪ねて

劇団やませ

「八戸」から発信する芝居づくり

よしだはじめ

『十三夜』のとりくみをバネにして
去年11月上演の好評を受け、今年
4月に再演した『十三夜』。

「演劇会議」の前身に戯曲と劇評
が掲載され、劇団通信で報告もある
ので、内容を私が述べる必要はない。
創造の質、劇団のありかたともども、
「やませ」のとりくみのたかまりが
示されたといえよう。

その要因について、劇団の人たち
の声、アンケートのなかみもあわせ
て、私は、つぎのことを考える。

(1) なによりも、八戸という地に根
をすえた創作劇であること。いまま
でも「やませ」の活動の基本にその
視点があつたのは確かだが、その延

長線上にはつきり位置づく仕事であ
る。地元新聞の募集に入選した短篇
小説をとりあげ、原作者・劇団・演
出者が協力して完成台本を練りあげ
た作品だ。徹底して八戸弁を駆使し
ていることに大きな特徴がある。自
分たちの芝居だという受けとめが上
演者・観客に強くわきおこつたにち
がいない。

(2) 老女が語る一代記なのだが、孤
児としての惨めな少女時代、集団
就職での上京、女工からストリップ
ショーの踊り子への変身、男たちと
の交渉そして親方との不倫の愛、見
捨ててしまった子どもとのかかわ
り、酒びたりの老境の暮らしと、ふ
つうであれば被害者的に暗く描かれ

上演許可がでるか心配したんですけ
ど、案外簡単に許可がおりた。(憲
法や平和など) 現代の危機に対し
て日本全国でこの作品を数多く上演
し、お客さんに見てもらいたいとい
う気持ちで井上さんにはあるんじや
ないかな。

京芸ではないけど、合同公演で『天
保十二年のシェイクスピア』に九
郎治の役でました。このときは自
分が役を楽しもうとしか考えなかつ
た。稽古で、キングコングみたい
に自分の胸をボコボコ叩いたり、し
ょもないことをつきつぎとやったん
ですが、演出が席からずり落ちて大
笑い。「もつとやってくれ、もつと
やってくれ」って言われてどんどん
役をふくらませていきました。いや
あ、楽しかったなあ。

今度は『父と暮せば』をやりたい
ですね。

ることが多い状況だ。が、自分の意
志でそれらを選択し、後悔せずにむ
しる奔放で明るい彼女のありかたか
ら、そのことが逆に、時代の流れ、
ひとの生きざまを、観ている客それ
ぞれが自分の人生を照らしあわせる
ドラマになっている。

アンケートには、若い人よりも年
配者の数が多く、舞台の印象とかか
わって自分の人生を具体的に書きこ
んでいる文が目立つ。劇団の人にた
ずねてみた反応も、

「人生そのものをみた感じがした」
「主人公の悲しみがいつのまにか
伝わってきてジーンとした」

「ずっと主人公が気に入らなかつ
たが、観客の声から、ああそうなの
か、そういう芝居なのだ、わか
かってきた」

「時代背景のもつ重さに興味があ
つた」
などの発言があつた。当然のこと

ながら、劇団員も、人(自分)の生き方・ありかたを自分の心につきさして考える仕事になったのだと感じる。

(3)上演そのものを私は観ることができず、ビデオによって接したが、不十分かなと思える部分がいくらあっても、舞台の質の高さを感じとれる。作品の力も大きかったと思うが、演出栗谷川氏の力量、それらに拮抗する、老女を演じた大館登美子さんの役創りを高く評価しなくてはならない。観客の満足度は高かったようだ。

(4)さらにつけ加えれば、このとりくみは、外部に向かって上演を聞いていく志向につながっていることだ。12月、秋田県小坂町・康楽館での「北の演劇祭」への参加がすでに決まっている。

かつての仕事のなかで、「やませ」の活動を代表するといつてよいであ



稽古場にて

それに入手した資料を重ね、「やませ」について理解がかなりできたように思う。

劇団創立は71年5月、八戸労演の事務局長松尾健二氏の引き合わせで、新堂耕二、榎谷伸夫さんが「劇団東風」を結成したことにはじまる。新堂さんは「青年劇場」の養成所出身、榎谷さんは弘前の劇団「雪国」に属して芝居にかかわっていた。土

ろう、榎谷伸夫／作のモノドラマ『海村』は、82年から97年まで27回の上演を行っている。上演記録によれば、県内処々だけでなく、岐阜・御浪町ホール(全リ演演劇祭)、兵庫・氷上郡民会館(国民演劇祭)、宮城・まほろばホールなどでの上演もある。すべてがそうだとはいえないが、劇団活動が高まるといえる外部の地域・観客とも交流しようとする気運が生まれ、その逆も成り立つことは、私の経験上からもいえる気がする。「十三夜」がはたしてそのコースをたどるのはわからないが、劇団はその意識をもとうとしているようだ。

重なりあうこれらの特徴は、「やませ」のこれからの活動にとつて大きな力となると思える。そしてその方向はやくもつぎのとりくみとして具体化されている。11月4日に設定される次回公演は、地元八戸の

屋弘光／作『芽生え』、真船豊／作『鈍』を経て、第一回本公演は翌72年10月の『若者たち』である。「劇団やませ」と改名したのはその7年後、79年のことだ。

上演作品は、30余年を通して多様だが、南部・八戸に根ざす創作劇が貫流しているのが特徴だ。初期には下斗米謹一、小寺隆詔という、外から劇団を支えてくれた作家の戯曲があるが、その中から榎谷伸夫作品が主軸を占めてくる。上演記録をたどってみると、榎谷創作劇14本・脚色作品6本(不正確かも?)が数えられる。『海村』を代表とし、『赤い海』『美濃屋乙因』『霧笛哭く街にて』『我が内なるラピュータ』『九戸政実』など、南部・八戸の歴史・現実を描いた力作が生まれる。

演出にあたったのは、はじめの時期は新堂耕二さんが担当し、その後、佐々木洋二、加藤健太郎、佐々木功、

学校の先生であり作家でもある阿部幹さんの作品を、北野茨さんが脚本に仕上げる『葉茨の海』である。演出は栗谷川さんがあたる。「十三夜」の成功を受け継いで、より豊かにする仕事となろう。台本を読ませてもらったが、太平洋戦争最末期八戸港で米空軍の攻撃により撃沈された海軍海防艦の史実を現在につなげて、人びとの生きる思いを交錯させ織りなした佳作である。

『劇団やませ』の歴史をふりかえる

8月1日の夜、劇団稽古場に6人のメンバーが集まってくれた。佐々木功・平山太草・佐々木綾乃・岡山奈津江・高橋理恵子・大館登美子という人たち、若い新人・中堅の支え手・ベテランの指導者それぞれ2人というところだろうか。そして翌2日には、佐々木・大館夫妻と会食しながらの話し合いのときをもった。

栗谷川洋の各氏がつとめた上演が多いようだ。榎谷さんは、書き手であるとともに役者——『海村』はその代表作か——であり、演出も担当するときもある、劇団代表であった。

劇団活動の全分野で重い立場にあった、その榎谷さんが02年に退団したことは、「やませ」にとつて深刻な状況をひきおこしたようである。実は、この年9月に、私は、「劇団を訪ねて」の稿をつくる第一歩として八戸をおとすれたのだが、その事件が生じたすぐあとのことだった。榎谷作品の改稿をめぐる意見の対立があったときだったが、原因についてはさだかではない。

佐々木・大館さん、関通さん、高橋・岡山さんたちの苦闘が続いたようである。劇団を維持するだけでなく、レバ探しと上演にもとりくまなくてはいけない。かつての上演作品をとりあげての活動を重ね、03年11

月、小池倫代/作「恋歌がきこえる」の公演を経て、04年11月「十三夜」の上演成功にいたっている。それは、前述したように、「八戸」の「やませ」が育ててきた基本路線にたつて歩みだした成果といえるかもしれない。

「やませ」の舞台を観ていないといったが、ビデオでは3本観ている。「十三夜」のほかに、「茜色のとき」と「九戸政実」だ。そして、それらを観たかぎり、「やませ」の舞台表現の質はかなり高い。役者間のアンバランス、場面展開の粗さを感じる。ところが時にあつても、内容がしっかりと観客に伝わる創造になっていると思つた。そしてスタッフの力、とくに栗谷川洋さんが専門的な力を發揮して装置・美術を担当する上演が多いようで、舞台装置が丹念に効果的につくられているのに感心した。

今回の訪問で、佐々木・大館さんと話しあつたとき、「やませ」の歴



稽古場にて

史をふりかえつて、いちばん強く感じていたのは何かかと質問を發したのだが、佐々木さんがそれに応えて、「栗谷川さんの存在と力、「いま」の立場でいえば」と発言したことは、ここ何年かの苦闘に力点をおいた、組織者としての実感だろう。栗谷川さんは、かつて「文化座」に属し、現在はフリーで活動しているが、舞台美術部門で、国費のフランス留学

街やいわゆる名所を案内してもらつた。八戸は予想以上の大きな都市だ、24万の人口、工場、そして自然と歴史的な遺跡。広大な天然芝生のある「種差海岸」、ウミネコの繁殖地「蕪島」、縄文遺跡の「是川」、発掘復元された中世の城跡「根城の広場」などにあわせ、いちばん印象にのこつたのは巨大な漁港だった。倉庫群、魚市場、ちやうどその日は霧雨、長い3つの波止場は静まりかえつて暗く続き、かもめだけがここかしこに羽を休めている。八戸が水産の大根拠地であることを感得させられた。

そして今年、8月1日から八戸に3泊した。わざわざこの時期に訪れたのは、「三社大祭」を体験するためだった。劇団を訪問するときに、その街を知りたい、暮らしを代表する行事に接したいとの願いから実現させたのだ。

「三社大祭」は市の中心部にあ

る3つの神社の合同夏祭だが、300年近く続く伝統の御興行列にはじまり、明治初期からは町々で毎年くふうして造られる飾り山車が加わつて、華やかな大祭となつてきたようだ。8月2日の午後は「お通り」で馬にのつた各神社の宮司、氏子、御興の行列、数々の虎踊りや神楽舞、そして27台の山車がつぎつぎと通る。3日目は夕方か



「三社大祭」の山車

生となった経験をもつ人。昭和57年ごろから「やませ」本公演の装置プランのほとんどを受けもち、その数はこれまで16本にのぼるといふ。いずれも高く評価されたそうだ。演出としては5作品、台本づくりにも積極的に参加している。「やませ」に上り、大切な役割を荷っている。

また、大館さんは、へどれともいえませんが、いまとりくんでいた仕事のことをはげしく思つてしまいます」といい、彼女が、役者としていつも全力投球し、表現を生みだす営みそのものを体現していることを感じた。3つのビデオでの彼女の演技をみても、そうかもしれないと思わせるものがある。

「三社大祭」

——その熱気と街の暮らし

3年前に訪問したとき、八戸の

ら夜にかけて山車の合同運行、明りに照らされながら通りを練っていく。笛の集団、太鼓の連打、それぞれ何十人ものひき手の子どものかげ声が祭りの空気を盛り上げるが、なんといつても山車そのものの威容。上に電線のない大通りに出ると、ただでさえ大きい山車は左右に大きく拡がり、上に高くどこまでものびあがる。はじめて観る私はその壮大さに圧倒されたのだが、次々の山車を見てみると、飾りと仕掛けの豪華さに凝りすぎの印象を受けないこともない。同時期に行われる青森各地の祭に対抗する、観光のねらいも感じられる。

だが、こうした東北処々の祭りは、短く過ぎていく北国の夏における人びとのエネルギーを集中的に発散する行事なのであろうか。港、工場地帯を別にした八戸の街からは、地味な生活の家々や店がずうっと拡がっ

ている感を受けた。中心街も、地方都市によくあるような、大都会をイメージさせる建物群はない。「やませ」劇団員の高橋さんが語っていたのだが、八戸ではショッピングに地元でなく盛岡に出かけていくひとがけっこう多いんですよ」という傾向もあるらしい。新幹線の現終点である八戸駅が、街のセンターからかなり離れている珍しい状況もそうした条件を示しているといえるのだろうか。町ごとに莫大なエネルギーを注いで造りあげる大祭の山車は、そうした暮らしと表裏ともにきり結んでいるかもと、旅人の私は勝手に想像する。

そして「劇団やませ」の芝居づくりは、こうした八戸の歴史と伝統と現実と未来とにかかわって具体的に果たされているのだし、そこからの地道な創造が活動を保障するのだと、の思いを抱く。

「やませ」の「いま・これから」の「課題」

劇団は、いま、「十三夜」を財産にして、それを生かす上演を具体的に続けながら、八戸に根ざす創作劇づくりの路線を『葉莢の海』でより確かにしようとしている。もちろん自分たちや観客の欲求によって既成の戯曲作品の上演企画ももつだろうが、「やませ」を発展させ、支えてきた、「自分たちの芝居」を活動の主軸にどの志向をはっきりさせているように感じる。

そして、劇団のメンバー、とくに佐々木・大館さんといろいろ話しようなかで、かつての活動からの教訓、いまかかえている問題点を意識して、それらをのりこえる道筋を見出そうとしているようにも思える。私の憶測をもふくめて述べよう。

舞台美術そして演出としての栗谷川さん、照明をずっと担当している市川博之さんという専門者の力を武器にしながら、創作戯曲（台本）づくりで地元（出身）の作家の協力を得るとりくみ（『十三夜』は原作者の森田啓子さん、『葉莢の海』では原作の阿部幹さん、脚本には北野茨さん）。

めには、なんといつても、多くの舞台に立つ経験、きびしい稽古を過ごす月日が物をいうだろう。『十三夜』と間をおかず、つぎの創作劇しかもキャスト9人のアンサンブルが要求される作品の上演を具体化するのはそのために有効なとりくみだ。そしてさらに、地元素材を求めた、豊かな創作劇づくりの取り組みは、新しい劇団メンバーの参加を可能にするのではないか。「全上演」の多くの集団と同じく、「やませ」もメンバー不足である。劇団員が自分（たち）の創造に自信と誇りをもちつつこと、それは観客にも、芝居をやってみようという人にもまちがいはなく伝播する。

それは、演技者の力量を育てることにもつながっていく。『十三夜』の成功が、演技の面では大館登美子さんのそれによって支えられたことはまちがいないが、他のメンバー、とくに若い人の創造力、表現力をどう高めていくかは、「やませ」にとつて大きな課題なのだと思う。そのた

そうした諸点が意図されていると思うのだが、どうであろうか。ぜひそうであってほしい、と私は念じる。顔を合わせ、ことばを交わした「や

ませ」のメンバー（今回は会えなかった関さんたちも含め）が、これからの活動に、いきいきととりくんでいる姿をイメージしている。

〈追記〉

8月3日、とんぼがえりで弘前に出かけ、「劇団弘演」の秋本博子さんと5時間ほどの時を共有させてもらった。弘前城公園、禅林街などの案内を受け、長勝寺で夫君作間雄二さんの墓にも詣でることができた。「弘演」の歴史、作間さんの作品のこと、10月4日に上演する『朔日山晴れだが』（篠崎淳之介／作・中野健／演出）——娘さん作間しのぶさんと「劇団雪国」の古くからの福井千江子さん、そして秋本さんの三女優で、昭和6年に起きた弘前中学ストライキ事件を演じるドラマ。この作品のせりふは津軽弁である。——の話もきく。貴重な体験であった。

アイルランド公演旅行メモ

劇団すがお 加藤 武夫

私たち劇団すがおは、1992年からアイルランドの劇団ドラムリン・プレーヤーと交流をもっている。出会いのきっかけは韓国・馬山での国際演劇祭だった。一度日本に招待して、その2年後の2000年に私たちがアイルランドを初訪問した。

日本の劇団がアイルランドを訪問すること自体例がなく、まして北アイルランドと国境を接する人口1万人のモナハン市を訪問することは、現地の人にとっても大きな出来事で町を挙げての歓迎を受けた。

そのときのレパトリーは木下順二ノ作「夕鶴」だった。観客は150人程度で、小さなホールは満席で現地の人々の感動を呼んだ（今

回の訪問で、5年前の印象が語られインパクトが強かったことを改めて教えられた）。

今回の訪問は、前回と同様に劇団だけでなく、桑名国際文化交流委員会という組織で、合唱団と日本舞踊団の合同チームで18人の参加だった（小生はこの委員会の幹事長）。8月2日名古屋を出発、アイルランドでは劇団員とその関係者の家で3泊4日のホームステイ、往復ともシンガポール経由の旅で8月11日帰国、そんな旅行メモです。

★★★★★

どたばたで飛び立ったアイルランド。2日がかりで到着したダブリン空港ではラリー（劇団代表）、バット、

ビユーなど懐かしい顔が出迎えてくれた。車で5分も走ればもうそこは牧歌的な景色になるというアイルランドだが、5年前と異なるのは沿道の町々で工事が展開されていたことだった。経済発展の結果だと思われるが、モナハンの町では大きなブールの工事や住宅の新築などが目についた。

到着の歓迎レセプションでは市長に加えて知事まで来てくれ、縮小していたのに驚く。簡単なパーティーの後、それぞれのホストファミリーのもとに、私は劇団員の佐竹と一緒に劇団員のPJの家。なんと中心部から車でたった5分の静かな新興住宅街。しかも少し歩けば森があり牧場があるというすばらしいロケーションだった。

最初の夕食はPJの家族（奥さんと2人つきり）とラリーの5人でワ

インを飲みながらだった。このPJ家は前回二瓶さんたちがお世話になったそうで、そのころはまだ娘さんがいたという。彼らの口から名前がでなかったが、彼女が贈ったと思われるお茶の道具が飾られていたのでわかった。私たち2人は、2階の娘さんの使っていたベッドを借りることに早々とベッドへ。白夜でまだ空は明るかったが、長旅の疲れをとりたかった。

翌朝、朝食の準備は旦那が主としてやってくれた。奥さんは仕事ということで自分のことに忙しかったようだ。普通2人は朝食はとらず、紅茶ですますようだが、私たちのために食事をセットしてもらったようだ。この日は北アイルランドへの観光で、なんと昼食の弁当まで準備してくれた。

あいにくの天気だったが、観光する頃はちゃんと雨もやみ観光に支障

はなかった。私たちのような者はただ町中走るだけでも十分観光気分だが、さすがジヤイアンツコースウェーの断崖はすばらしかった。帰路立ち寄った北アイルランドの文化センターも（場所は周りには畑しかない田舎である）、年寄りから若者までが一緒になってアイリッシュ音楽を楽しんでいた。アイリッシュチュー、ワイン、ギネスビール



文化センターでの交流会

をご馳走になった。また、正装した子どものアイリッシュダンスも披露してくれた。大変に楽しい交流の時間があった。帰宅が11時をまわっていたと思う。

翌日は、市内観光と仕込み、そしてリハーサルだった。演劇はこれらが勝負で、現地でのどんな舞台セットが準備できるのか、心配だった。ま、それでも我慢さえすればなんとかなる、「芝居は役者でみせなきやあ」と割り切りセットアップ。用意された二重舞台は学校の教壇だった。あまり高いので階段も用意してもらった。持参した大木のドロップはちゃんと飾れたし、ま、いいか。午後はリハーサル。準備してもらった音響に問題があったが無事にクリア。照明も問題なし。エンディングの波布の処理も完璧にできてひと安心。

夜は、浴衣に着替えてパブとレス

トランへ。コミュニケーションは大変だったが、陽気なアイルランド人に助けられ大いにもりあがった。しかし、それにしてもアイルランド人はよく食べる！そしてよく飲む。アイスクリームのおいしそうだつたこと。血糖値に心配がいらなければ私もほしかったが……。

3日目、公演日を迎えた。劇団員の体調は良好。平均60歳を越えると思われるメンバーも、みんなハードスケジュールに耐えているようだ。楽しいからなんとか体がもっている



「彦市ばなし」の舞台

のだと思う。

この日、5年前の「夕鶴」の子役で出演してくれたトミー・コステルが来てくれた。15歳・高校生になったという。そして「かごめ、かごめ」などを覚えていと言い口ずさんでくれた。うれしいことだ。

午後2時からの歓迎会、それに続く日本ミニ文化祭、そして夜の公演と長い一日。

ミニ文化祭は、多くの市民が来てくれて、狭い会場は押すな押すなの盛況ぶりだった。日本に好意をもっている人たちがばかりで、いい雰囲気だった。会場がもう少し広いところだったら、なお良かった感じ。

さて、公演「彦市ばなし」だが、バットが事前に幕前で解説をしてくれるという予定だったが、彼はここに来て「必要ない」と判断したらしく省略、すぐに芝居にはいった（バットは、毎年桑名を訪問し、ホーム

ステイをしており、今年も劇団の稽古や試演会を見ており、事前解説を約束していた。

この芝居は、遊びを大いに取り入れ「楽しい芝居にして、お客に楽しんでもらおう」を合言葉にして練習してきただけに、客席はのつてくれた。一景ごとに拍手がくる。計算通りどつと笑いはくる、最後のクライマックスは「オー」というため息と大きな笑いと拍手で幕となりホットした。やり終えた後の充実感にひたる時間もなく、ただちにセットの解体。そして第2部・西川流日本舞踊、続けてシャンテ・クレールの合唱に移る。全員浴衣姿。華やいでもいいものだ。

この間、劇団員も慌ただしく浴衣に着替え、合唱団のカーテンコールに合流して、一緒に炭坑節の盆踊りで、観客と一緒に終演となる。公演後の観客や関係者からグレー

ト、ナイス、ベリーグッドとか声をかけられみんな興奮状態が続く。その後は、ホールのレストランで打ち上げだ。ギネスビールのおいしいこと。あつという間に時間が経つ。ホストファミリーの迎えを受けて各々が家路に向かう。なんと私たちの帰宅は午前1時をまわっていた（公営の施設でこんなこと日本では考えられない）。



フィナーレ

翌朝、それぞれのホストファミリーの見送りを受け、涙々の別れをしながら一路バスはダブリンへ。たった3泊4日間のモナハンだったが、人と人の交流のすばらしさをいっそうつよめる4日間だったと思う。また、ロケーションもよかった。毎日慌ただしく生活に追われている私たちにとつてホットする、そんな4日間であった。ダブリン空港までラリーとバットの2人のエスコートを受けて、シンガポール経由で一路日本に向けて……。帰国した日本の暑いこと暑いこと。名実共に夢のアイルランドであったと思う。

2年後には、ぜひ来日したいと劇団ドラムリン・プレーヤー。私たちも一緒だが20万円以上の経費を必要として、かつ、芝居をするからには7〜8人のメンバーを揃えるということは大変らしい。日本での再会の日を楽しみにしたい。



日本ミニ文化祭 習字体験



同 お茶の体験

北から南から

劇団通信

〔劇団さつぽろ〕

「はやてに走れあまんじやく」と「むかし話の世界」が道内巡演中です。両班とも、外部からの助っ人たちの力を借りての公演です。劇団経営をめぐっては名案も浮かんでこないのが現状です。

4月にはじまった「児童部」は、いよいよ卒業公演にむけて、稽古がはじまりました。金田一仁志／作・演出で「ヒューマンノイド05」に取り組みます。

ども・新劇場・さつぽろの3劇団共同企画で取り組んだ「父と暮せば」は2チーム、4ステージ(7月23、24日)とも、ほぼ満席で、当初の目標通り成功をおさめました。ただ、今回初演の「山根チーム」(竹造・新劇場・山根義

昭、美津江―新劇場・栗原聡美)は、演出の飯田をはじめスタッフ一同、胃の痛くなるような場面もあって、再演での雪辱を誓い合いました。

秋から冬へ、小さな公演を続けながら、さて、どうやって春を待たたらよいのでしょうか。

(長谷川京子)

〔劇団海鳴り〕

昨年の定演の演目「父と暮せば」を6月に斜里町(世界遺産となった知床のある街)と7月に佐呂間町で再演しました。「戦争のもつ大変な後遺症、今もこういう方が多くおられるのでしよう」「わしの分まで生きてくれ」本当に生きなければと思いましたが」といった感想が寄せられました。佐呂間町のはお年寄りの

ことぶき大学での公演で、戦中、戦後を思い出しながら鑑賞された方も多かったようです。

今年の定演は10月22日です。人気コメディ「煙が目にしみる」堤泰之／作・我孫子正好／演出を上演します。3年ぶりの紋別市民会館大ホールでの公演。初舞台の若いメンバー4人もはりきっています。

道内でもいくつかの劇団がこの作品を手がけていますが、海鳴りらしい味(ちよつと泥臭い?)をだしきりたいと考えています。実年齢とかなり違う役を演じる者が何人かいます。役の幅を広げる試みで、この経験は劇団の財産になるのではないでしょう。

(松浦伸二)

別の地で、今度はどんな人との出会いがあるのか楽しみで

す。

25年の時を刻んできた「ども」が今後どうなっていくのか…。先は見えませんが、楽しい夢をみながらすすんでいきたいと思えます。

(杉浦啓介)

〔釧路演劇集団〕

6月25日(2ステージ)に、井上ひさし／作・尾田浩／演出「キネマの天地」を5年ぶりで再演しました。以前はレング倉庫での公演でしたが、今回は市民文化会館小ホール(374席)で400人の観客でした。

秋の公演は、団内での議論の末、ジェームス三木／作・清水秀紀／演出による「巨人の帽子」に決まり、10月29日(2ステージ)同じく小ホールで、釧路市芸術祭参加(会場使用料の一部補助がでる)

として稽古の真っ最中です。

役者16人(現在団員14人)で客演も交え、稽古日の調整をはかりながらですが、清水演出は、昨年の秋公演でもジェームス三木氏の「結婚という冒険」を演出しており、2年続けての演出になります。

(尾田浩)

〔劇団弘演〕

秋の本公演にむけて稽古の真っ最中です。今年の演目は故森田有氏／作の「ちらい」。

この作品に決まった途端、カンボジアで例の学校人質事件が起きてびっくり。今日もなお大量の対人地雷が大地を覆っているという。一昔前の作品というイメージがあったのですが、カンボジアについてみながら調べていくうちに、紛争が現在も続いていることを認識させられました。

公演日は12月10、11日、弘前市テネガです。(伊藤剛)

〔劇団やませ〕

ある日の稽古場。愛煙家たちのために今日も回る換気扇。やつとできあがった「葉英の海」のポスターが壁に貼られている。近頃増えたもの、入り口に並ぶ靴の数とそこに現れる虫の数(なんていうんだらうビヨンビヨン跳ねる虫)。今日の稽古は第四場。セットにあわせて並べた机や椅子で一気にその場は港の酒場へと変化する。

終戦の直前、八戸沖に沈んだ海防艦稲木。11月の本公演「葉英の海」はその稲木の生き残りの男と、海で愛する人を亡くした男がそれぞれの背負う罪に向き合う姿を描いている。阿部幹／原作・北野茨／脚本。キャストが集まらず予定よりかなり遅れてのスタートとなった今回、稽古の進み具合を気にしつつ、入り口の虫に怯える稽古の帰りなのです。(佐々木綾乃)

〔劇団ドラマシアターども〕

いろんな意味で熱く、濃い夏でした。まず7月末にさつぽろ・新劇場・どもの合同企画「父と暮せば」、8月にはどもプロデュースとして再演、いずれも好評のうちに終えることができました。その後8月20日には安念夫婦と杉浦が東り演の総会に参加。それぞれが刺激をうけて帰道のち、30日、ついに新しい本拠地「どもIV」の建物を購入。今はまだ改装中で、オープン

は12月を目標にしています。9月には17、19日に、落語、歌、演奏、芝居なんでもありの「ども秋祭り興行」を開催。参加者は総勢51組。3日間合計25時間の大会イベント。こちらも無事に終了し、ども復活の狼煙があがりました。江

〔劇団支木〕

●9月3、4日、岩手県湯田町の銀河ホールで行われた地域演劇祭に劇団員11人で参加しました。

観劇では、この地域演劇祭のために創られた劇団はぐるまの「夜空の下に降る花は」に感動してきました。さすがという他ありません。岐阜大空襲を劇化した芝居で、私たちが住む青森市でも、終戦直前に青森大空襲がありました。居のような悲劇がありました。●劇団では6月18、19日に青森市民文化ホールで堤康之／作「見果てぬ夢」を中野健／演出で行いました。客演のチケット売りにあおられた面はありますが、久々に前売券で600枚を突破し、創造面でも、お客様を楽ませた芝居となりました。

●劇団は新稽古場に移転しました。存在が、地域の人々に歓迎されるように11月5、6

日、12日に子どもむけのお芝居を2本、アトリエ公演と銘うって行うことになりました。劇団員/作の芝居で「桃太郎」木村幸生/演出と「ももいろのきりん」羽沢俊雄/演出です。(羽沢)

〔黒石演劇研究会〕

11月13日に上演する、ふたくちつよし/作・中辻鉄男/演出「山茶花さいた」にむけて稽古の真つ最中です。創立60周年記念第1弾で、大ホールでの上演です。ここ4年くらい多目的ホールの小さめの舞台で上演していて、慣れのため、大ホールを想像すると緊張してきます(笑)。まあ、その緊張と根気で稽古にはげみ、13日の公演を大成功させるようがんばりたいと思います。(三浦)

〔劇団だいこん座〕

春の公演は6月4日、灰

ニが作品を引き立てます。

9月2〜4日には、劇団で小豆島へのバスツアーを行い、実地調査をしました。さびしい時代の到来を感じさせる今日この頃、「子どもたちを再び戦争に巻き込むことがあってはならない」、そんな決意もこめながら、ひとつひとつのせりふからおおいに学び、現代に訴えかける作品をつくりたいと稽古にはげんでいます。出演者60人の大所帯となり、稽古場は熱気であふれています。

最近、ある建築家と出会うことができました。「ここに劇団「ひの」あり!」と思える、地域文化の拠点にふさわしい新稽古場を創りあげたいと燃えてきています。さらに夢がひらきそうです。(佐藤伸枝)

〔劇団石ころ〕

11月16、17日、江東区・深

谷健次郎/原作・大橋喜一/脚本・石川富志夫/演出「ワルのポケット」(一幕)を鶴岡市中央公民館で公演しました。この芝居はワルガキ6人組が主役で、中・高生が演じたのですが、歌も踊りもいきいきと表現して大変に好評でした。この子どもたちがいつまでも芝居を続けてくれればよいのですが、学年が進むにつれて、受験という壁が立ちあがりむずかしくなっています。

砂本量/作・高橋寛/演出「レンタルファミリ」(一幕)を10月8日に鶴岡市中央公民館ホールで上演します。「家族とはなにか?」と問う作品で、現代社会のゆがみが家族という単位にゆがみをもたらしている様子をいかに表わすか苦心しています。

蔵王温泉での総会にも参加しました。各劇団が困難な中で懸命に活動していることがわかりました。希望を失わず

に「演劇とはすばらしい」ということを信じ、伝えていくことだと思っています。(高橋寛)

〔演劇集団 土くれ〕

10月13〜15日、第54回目の公演、堤泰之/作、石塚幹雄/演出による「煙が目にしみる」を予定。会場は麻布区民センターで、恒例により「麻布演劇市」参加です。

「麻布演劇市」は今年は18回目。ご多分にもれず地方自治体の財政問題で「管理者指定制度」がもたらがってきています。市実行委員会では2年後の20周年記念事業の計画をたてはじめていますが、この問題ともリンクして複雑な位置にあります。現時点では財団はOKのサインを出しています。2年後まではOKでもその先は不透明というのが参加団体全体の空気です。

集団も高齢化問題は深刻です。現在20歳代は3人です。

私どもは装置も100%自前ですから、大工仕事や車の運転や上乗りも大変です。公演日やケネプロを優先して休暇を確保すると、仕込み日が休めないということもあります。夢もてる話はありませんが、来年は創立40周年記念の年でもあり、がんばります。(石塚)

〔劇団ひの〕

12月4日、八王子市(いちよ)うホール、18日、日野市(七生公会堂)で「二十四の瞳」(壺井栄/作・佐藤利勝/脚色・演出)を上演します。本作品は、1975年と1983年にも公演し、新たな脚色で20年ぶりの再演となります。

今回は、同じ日野市にある「浅川少年少女合唱団」に子役として参加してもらいます。すばらしい唱歌がたくさん折り込まれ、合唱団で磨いた子どもたちの美しいハーモ

データにより祖国を追われたドーファン。国は民主化されてもその過去の精算はいまだになされず、その事実すら消されようとしています。ものを言わぬ谷間の村に女たちの静かな深い叫びが広がります。9月22日〜10月3日紀伊国屋サザンシアター他。

☆戦後60周年記念企画
韓国・北海道・東京連続公演
「銃口」教師・北森竜太の青春
三浦綾子/原作・布勢施博一/脚本・堀口始/演出
10月13日唐津からスタートする韓国公演は14カ所、28ステージ。

ひきつづく北海道公演は三浦綾子記念文学館の共催。そして、しめくりは12月18日〜20日の東京芸術劇場での公演となります。
☆「3150万秒と、少し」
藤井清美/作・演出
今年3月、東京公演で若い観客から熱い支持を得た新作

浦綾子記念文学館の共催。そして、しめくりは12月18日〜20日の東京芸術劇場での公演となります。

☆「3150万秒と、少し」
藤井清美/作・演出
今年3月、東京公演で若い観客から熱い支持を得た新作

観客から熱い支持を得た新作

がはやくも学校公演をスタートさせます。

○青年劇場「50年への挑戦」
応援5000万円募金

昨年、劇団は創立40周年を迎えました。劇団は創立50周年をめざす「50年への挑戦」をスタートさせました。しかし財政的危機の克服はまだ困難な状況です。そこで、全国の皆様に「50年への挑戦」応援5000万円募金へのご協力をお願いさせていただきます。詳細は劇団事務局(TEL03-3352-17054)までお問い合わせください。(中谷源)

〔劇団銅鑼〕

ようやく、月光は牙え、虫の音の心地よい季節の訪れとなりましたが、アトリエ公演「エイジアン・パラダイス」の稽古、上演の8月のあの暑さときたら、もう。

「エイジアン・パラダイス」と称する下宿屋に集った東南アジアの若者たち、さまざまの事情をかかえた彼らの切実かつ素頓狂な展開に、ある観客は「これから街ですれちがう外国人に親愛の気持をおほえそうだと」と。

昨年リトアニアの演劇人12人を迎え合同公演を行った「サクライン・ザ・ウインド」。今年はリトアニアでの再演が決まり、関係者一同は9月初旬に出発。ただちに稽古再開、ピリユニス、カウナス、パネヴェジス三都市で計6回公演を行いました。

シベリアにも抑留されていた日リ両国人、強制労働と屈辱というきびしい状況下での回を超えたロマンスを描いたこの作品は、大好評のうちに初日を迎えたとのうれしい報告が届きました。9月下旬帰国予定。
[Big brother]

は1学期につづいて10月からまた学校巡演にでかけます。各地の高校生諸氏との出会いがはじまります。

(菊地佐玖子)

〔京浜協同劇団〕

川崎宿や多摩川の復興などをやりとげ、「民間省要」という本を著し、改革を世に問うた江戸時代の郷土の偉人、田中兵庫の評伝劇を創る準備をしてきましたが、依頼した劇作家、小川信夫氏の手で「多摩川に虹をかけた男」があがり稽古に入りました。

青少年や市民から出演者を公募し、私たち京浜はもとより、川崎演劇塾、民藝など市内の劇団も参加し、総勢60、70人の大舞台となります。川崎市も300万円をだし、来年1、2月に3会場で上演、数千人の観客をめざします。

昨年、川崎の民主医療の歴史を「いのちの碧」として

上演しましたが、また地域の歴史を題材に創作劇が生まれました。劇団員和田庸子が、「ミスター・チムニー！ 天空百三十尺の男」を書いたのです。これは、昭和5年、富士紡川崎工場の労働争議中起こった「煙突男」を題材にしたもので、来年夏に上演することになりました。

地域の問題をとりあげながら、地域劇団としての存在価値を探っていきたいと思います。

地域の問題をとりあげながら、地域劇団としての存在価値を探っていきたいと思います。

〔劇団埼玉〕

稽古場公演の方針を出して足かけ4年目を迎えました。今年上演3本目の演目選定に時間がかかりました。来年2月に公演となりました。

◆第80回公演 吉永仁郎／作・川村武夫／演出「夏の盛りの蟬のように」2月18、19、25、26日、劇団稽古場。浮世絵師葛飾北斎の57歳か

ら90歳までの42年間の生き方です。芸術家の目指すもの、江戸幕府の悪政や世の中の流れに迎合しないつよい意志が快い作品です。あと10年ほどで明治になるそんな時代です。ちょっと不便ですが、ぜひいらしてください。

(森本拓治郎)

〔劇団蒼生樹〕

7月16、18日、横浜市教育文化ホールで「マンザナ、わが町」(井上ひさし／作)を上演しました。

本作に取り組むことで、学校教育で扱われることのない日系人強制収容所に私たち自身が触れることができたのは、大きな収穫でした。また本作では、演出経験のほとんどない三瓶俊一と福原毅が共同で演出を行いました。

さて、今回の第48回公演ではオリジナル時代劇を上演予定です。本作では、シエー

クスピアをベースに座員全員で集団創作に挑んでいます。また会場は、今年7月にリニューアルオープンしたばかりの神奈川県立青少年センター多目的ホールを利用します。この多目的ホールで演劇を上演するのは、私たちが初めてです。新しい会場で、オリジナル作品が上演できることを、今から楽しみにしています。

(福原)

〔劇団静芸〕

◇山形蔵王での東会議の総会、平成元年来のひさしぶりの山形、劇団山形の方々のいきいきとした活躍ぶりと総会準備、また総会の議案づくりを各劇団のリーダーの上に詳細にまとめあげた中野健さんのご苦勞に感激しました。資料をファイルして団内で回覧、大好評でした。ご苦勞さまでした。

◇総会と同じ日に、静岡市で

は、第5回の「平和と文化のつどい」が開催され、静銀ホールいっばいの観客とともに平和への熱い想いが、歌や詩、短歌、太鼓などの発表のなかで、会場にあふれ、大成功。

◇秋の公演は、11月6日、市文化会館で第1回市芸術祭(静岡市政令指定都市移行記念)参加。永井愛／作「見よ、飛行機の高く飛べるを」(伊藤幸夫／演出)を公演する。

女性出演者が多い作品であるが、新人や協力者の参加をえて懸命に稽古にとりくんでいる。言いだしたらたくさん困難もあるが、それら乗り越えて、より高く、さらに前に、一歩ふみ出していこうと思っている。(山崎三郎)

〔岡崎演劇集団〕

次回公演(11月12、13日)の「三角帽子」アラルコン／作・浅井克彦・清水秀樹／演出の稽古にいそしんでいる毎

日です。岡崎としては3度目の上演となりますが、時代も変わり、劇団員もずいぶん変わったなかでどんなお芝居にできるか楽しみです。

また、12月17、18日には近隣の子供会を対象とした子供劇場として、「おこんじょうるり」、さねとうあきら／作・織田義夫／演出を上演する予定です。劇団員が減ったので、2本を並行制作するのはけっこうきついです。がんばりたいと思います。

(神谷浩)

〔劇団名芸〕

「見よ、飛行機の高く飛べるを」の稽古や装置作りで追われています(11月19、27日、名芸平針小劇場)。

全り演の総会資料をみると、名芸は劇団員も客数も上位なので、実体がともなううががんばりたいと思います。また、他の友好団体に朗読

や司会などで参加したり、8月末の中部ブロックゼミでは小品「遺骨箱」(栗木／作・演出)を試演したりしました。地元とのつながりから「平針一丁目9条の会」も立ちあげ、平和を守る声、を少しでもあげていく決意です。

6月の子ども劇場「どんぐりと山ねこ」が全員制作の努力で客数低下に歯止めをかけ、1200人と挽回したので、秋の公演後は12月の南文化フェスティバル、来年3月の研究公演、そして6月の子ども劇場とスケジュールを決めて、レバと演出決定を急いで検討しているところです。これらの活動のなかで運営体制も引続き次世代へとつないでいきたいと思えます。

(栗木)

〔劇団名古屋〕

2月、新稽古場完成。いまにも崩れ落ちそうな旧稽古場

をなかば強引に建て直してしまつたので、どう有効活用していくか、手探りの毎日です。

新稽古場から創り出した最初の作品は、6月17・19日もやしの唄（小川未玲／作・久保田明／演出）6ステージ796人。定員110人の会場で、棧敷席を設けるなどの対策をしたが、入場できない観客をだしてしまつた。猛省。

また、4年ぶりに研究所に申し込みがあり、5人の研究生を迎え、9月16、17日に稽古場で無事卒業公演を終えました。外部からの協力をえて稽古場が雰囲気のある空間に生まれかわり、いろんな可能性が見えてきました。

秋は、約10年ぶりの創作劇「美ら海」（栗木英章／作・久保田明／演出）11月25、26日、熱田文化小劇場。沖繩辺野古沖海上基地阻止の闘いをテーマにした作品です。少しずつ入団・復団者があり、一喜一

憂の日々です。

〔劇団はぐるま〕

いずみ凜／脚本・汲田正子／演出の「カモメに飛ぶことを教えた猫」は、岐阜市民会館で4ステージ。舞台は好評で、猫とカモメの種を超えた心の交流に、多くの方に涙していたできました。

秋の公演は、10月7・10日、いずみ凜／作・汲田正子／演出「夜空の下に降る花は」を上演します。戦場に行った父を思いながら身をよせあつて暮らす家族に、突然ふりかかる戦火。岐阜空襲60周年の今年、今なお戦火の絶えない現実をみつめて、懸命に生きている人々の「健気さ」と「切なさ」を感じていただければ、と思います。

この作品は、9月4日に、岩手県湯田町の「地域演劇祭」で上演してきました。

春の公演は、2月11日、12

シアター 8月6日午後8時150人（本文中28・31頁参照）。

●次回公演 栗木英章／作・坂下和代／演出「北勢線物語」

廃線の危機を乗り越えて今日も元気に乗客をのせて走る郷土の足―北勢線の四季を描いたオムニバスです。市民運動をしている団体の支援の申し入れをうけて隣のいなべ市でも1ステージ上演することになりました。今までになりに取り組みをしようと、劇団員一同はりきっています。

*余談ですが、中部のプロックゼミで試演した一行詩「息子よ、娘よ／父よ・母よ」ですが、おおむね好評につき、肩の凝らないレパートリーとして今後上演していきたいと考えています。

*公募の市民と劇団で創る桑名演劇塾次回公演 栗木英章／作「幕末親子絆」作品も仕上がり出演者公募中。06年2

日に岐阜市文化センターで、こばやしひろし／作・演出の「遊行僧 田空」。（内田薫）

〔劇団たけぶえ〕

2年あまりにわたつて準備が進められてきた国民文化祭・演劇祭も、「演劇会議」が刊行されるころには終了しています。県内20あまりの劇団と演劇愛好者、ボランティアが結集して合同公演、県外劇団の招聘、子どものワークショップその他、街角での屋台・物産販売等々、小さな町での大きな事業がこうした人たちの力で実施することができました。

単なるイベントの開催にとどまらず、県内の演劇に携わる人たちの絆と米倉齊加年、内田三喜男、雁坂彰先生のご指導による演劇への熱い想いをさらに強固なものにすることができました。今後の県内の演劇活動に、はかりしれな

月桑名市民会館・3月新潟県柏崎市で公演の予定です。両公演ともに柏崎演劇サークル（NADA会員）が「おとし文」を上演して交流します。

〔劇団夜明け〕

創立50周年記念公演No.1として取り組んだ「煙が眼にしみる」堤泰之／作・鈴木弘文／演出を、3回目となる歌舞伎ホールで無事終えることができた。過去2回の公演に比べMAXの観客数（9月17、18日614人）だったが、900人という希望数には届かなかった。

終演後、多くのお客さんから「よかった」と声をかけられた舞台ができただけに、制作面に悔いが残ったが、新たな課題が見えた公演になったことは成果だったと思う。

課題は客席数約600席の7割ぐらいの観客で3回程の公演ができる。魅力ある

いものを残す体験でした。

残念なことには、この事業が、私たちが愛し、誇りに思ってきた「武生市」が市町村合併で「越前市」になってしまつたということ。創立以来唱えてきた地域の文化とは、武生市（という名称も文化と位置づけられました）の文化ということでした。

9月25日の閉市式で劇団代表の柴野が武生市最後の市政功労者として表彰されます。

〔劇団すがお〕

今年の夏は大変忙しかつた。アイルランド公演、全リ演総会、プロックゼミ等々。そういえば、昨年の夏も全日本演劇フェスティバルの受け入れで多忙でした。

●アイルランド公演

木下順二／作・加藤武夫／演出「彦市ぼなし」アイルランド・モナハン市 ガレージ

加した3人は同時に考えたのはいうまでもありません。

さて、その「ふくきたわかつの一人語り「芭蕉翁桃青」ですが、移動公演が順次決定しておりますので、お知らせします。

9月17日県民文化祭（四日市）、10月11日連句会（伊賀市）、10月22日二見町（鳥羽市）、10月29日国民文化祭（福井県武生市）、11月20日吉野山東南院（奈良県吉野町）。この夏には三重テレビで初ドラマ出演を果たされた福北さんですが今回もいぶし銀のよくな味わい深い演技でもって観る人を感動へと誘っていただきたいと思います。（大東）

〔劇団からつかぜ〕

春公演「父と暮せば」は（平井新／演出）4ステージ観客数342人で惜しまれながら終了することができました。今年初めに静岡県演劇協議

会主催の講師養成講座が行われ、団内から布施と平井が参加しました。その経過があり、昨年まではすべて団内の講師で行ってきた7月10日の公開講座を、今回は「役者の基本」のところで静岡県演劇協議会講師(3人)の皆様に「協力をお願いいただき他劇団との交流も広がりました。高校生から地域劇団、一般の方など40人の参加者があり、密度の濃い内容となりました。」

現在は秋公演「ピアニヤン」(布施佑一郎/演出)にむけて奮闘中です。アトリエ公演10月22、23、29、30日。浜松市芸術祭参加公演、11月12日の6ステージです。仕事の都合で、稽古にでられない人が増え、あいかわらずの人手不足の状態ですが、まわりの人たちに支えられての芝居創りになりました。「ピアニヤン」で元気をもらっています。

(坂田真生)

〔劇団京芸〕

8月の創立55周年記念公演「きらめく星座」はほぼ満席という盛況のなかで、無事幕を降ろすことができました。この作品は来年度から全国の高校演劇鑑賞の作品として巡演が予定されています。平和と命の大切さを伝えたいという気持ちからスタートしたこの芝居を、これからおとなになる高校生たちに、たくさん観てほしいなあと思っています。

秋は学校公演のシーズンです。今年度も文化庁の「本物の舞台芸術体験事業」に参加することになり、この10月には兵庫県と四国4県の小学校で「アスモテウス」を上演します。児童を交えての舞台は、事前のワークシヨップなどもありなかなか大変なのですが、がんばっている子どもたちと一緒に舞台上立つのは楽しいことでもあります。

〔劇団大阪〕

今年度は戦後60年企画として3本のお芝居に取り組むこととなりました。

6月本公演「闇に咲く花」では、狭くて空調の調整がむずかしいなかでしたが、盛況に終えることができました。

8月の特別公演「スピリッツプレイ」では女優の山内佳子が初演出をつとめました。制作的には観客動員がままならず問題も残りましたが、斬新な演出と今までは違った視点からの意義のある取り組みとなり、今後の劇団活動をどうしていくのかということを考えさせられる公演であったと思います。

そして11月本公演、斎藤麟/作、堀江ひろゆき/演出「世紀末のカニバル」の稽古がすすんでいます。このお芝居では東北弁・群馬弁・沖縄弁

学校公演というのは、初めて芝居を観るかもしれない

この子どもにとつて、これが人生最初で最後の演劇鑑賞になるかもしれない。だったらいちばんいいものを観せなくちゃ! という思いでやっています。その気持ちをいつも忘れずにいい舞台をつくってきたいです。(赤土綾子)

〔劇団きづがわ〕

この夏、劇団はいろんな取り組みで大忙しでした。

その①「西淀川公害裁判の取り組み」を教材化した、小学生向けの「環境学習ビデオ」に出演。10月中旬完成予定でその後、全国の小学校に配布されるとのこと。―仕上がり

が気になります。その②「教研全国集会」での「構成劇」上演、「原爆構成詩」の朗読、「落語」等々。大阪のアッチャコッチャで、大汗・冷や汗をかいてい

ます。

その③若手公演「ハルシオン・テイズ」(8月20、21日)―冷や汗続きの取り組みでしたが、なんとか終了。途中、中止か、延期か。とゆれうごき今後に大きな「教訓」を残しました。

そして④秋の公演は、永井愛/作 林田時夫/演出の「こんには、母さん」(11月26、27日。クレオ大阪東)です。笑いと涙。満載の、大人の。ホームコメディ。なので、ケイコしながらもつい吹きだしてしまいます。どんな仕上がりになるか―今から、ワクワク、ドキドキしています。(山田)

〔関西芸術座〕

毎年、夏休みとクリスマス時期に地域向けの公演または催しを行っています。今年の夏は公演はできませんでしたが、人形劇や紙芝居などを行い、ご近所の皆さんに喜んで

〔劇団大坂〕

今年度は戦後60年企画として3本のお芝居に取り組むこととなりました。

6月本公演「闇に咲く花」では、狭くて空調の調整がむずかしいなかでしたが、盛況に終えることができました。

8月の特別公演「スピリッツプレイ」では女優の山内佳子が初演出をつとめました。制作的には観客動員がままならず問題も残りましたが、斬新な演出と今までは違った視点からの意義のある取り組みとなり、今後の劇団活動をどうしていくのかということ

を考えさせられる公演であったと思います。そして11月本公演、斎藤麟/作、堀江ひろゆき/演出「世紀末のカニバル」の稽古がすすんでいます。このお芝居では東北弁・群馬弁・沖縄弁

とたくさんの方言がでてるうえ、日系ブラジル人によるポルトガル語が随所にとびかい、「ことば」のむずかしさに役者も苦労しています。

今年度は新人募集にも力を入れるということで、ワークシヨップを開催し、8月に無事終了しました。女性が中心ですが、これから研究生公演を来年1月に行うので、何人かの新しい仲間が増えることを期待しています。男性の若手役者が少ないため、今年の3本の公演ではすべて客演に頼ることになってしまいました。

が、これからの劇団を元気にしていくためにも、新人募集に力をいれていくことがますます必要になりそうです。

(伊藤節子)

〔劇団未来〕

第63回公演・大阪春の演劇まつり参加・中島淳彦/作「夫婦レコード」は6月24日

26日、森ノ宮プラネットホールで上演しました。演出は劇団の中堅、牧達郎が装置も兼ねて担当。

舞台は、5人姉妹を演じた女優陣のアンサンブルのよさ、1970年代の衣装・舞台装置が好評。また、この公演で前田都貴子が新人女優賞、チラシを担当した中面慶子がチラシ部門の優秀賞を受賞しました。

今、稽古場は3つの活動を行っています。

①第64回公演、2005年大阪新劇フェスティバル参加・大阪市助成公演「辺見じゅん」(収容所から来た遺書)(文春文庫)からふたくちつよし/脚色「ダモイ」の読み合わせの段階です。演出はふたくち作品3本目の森本景文が担当します。登場人物は波田久夫、平尾光秋、牧達郎の3人。久しぶりの「重い」芝居で、京都府舞鶴市にあ

いただきました。

今年3月にスタジオで上演した「戦争童話集」が8月から巡演をスタートしました。中学校、子ども劇場などを中心に巡演しています。

同じく巡演作品の「少年H」が8月11、17日新宿・紀伊国屋ホールで催された「六十年目の夏」での公演を無事終えました。劇団青年座の「明日」、劇団東演の朗読劇「月光の夏」、そして関西芸術座の「少年H」と3作品を上演しました。お盆にもかかわらずたくさんのお客さんに来ていただきました。「少年H」はこれから全国を巡演していきます。

スタジオ公演の「反応工程」が好評のうちに千秋楽を迎えることができました。さらに今年度はブライアン・クラーク/作・吉原豊司/訳・亀井賢二/演出の「請願」を11月30日、12月4日関西スタジオで

る「舞鶴引揚記念館」に行き、捕虜生活の実態・衣装・小道具など事前調査を行い内容を深めています。

②昨年にひきつづき7月から毎週土曜日に演劇塾を開講しています。講師波田久夫による朗読（島崎藤村の「千曲川のスケッチ・小諸なる古城のほとり」、牧達郎指導のインプロ、特別講座として2日間身体表現「鈴木メソッド」の指導を大久保氏からうけました。この塾の成果の集約として10月1日、木下順二ノ作の「夕鶴」を題材としての発表会を上演します。

③今年度からの新しい取り組みとして、おはなしの語り部養成講座をOBを含め9人が参加し、全員意気揚々として大阪の民話中心に語っています。（F&O）

【大阪府職員演劇研究会】
春の演劇まつりで「朝の

チャイムがあなたの家に」田坪文一ノ作・演出）を終えました。観客のアンケートではなかなか好評だったのですが、専門家の批評はいつもながらきびしいものでした（ガツクリ）。

今は、府職労（組合）主催の文化祭（11月13日）を成功させるために実行委員会への参加、仕込みの段取りなどをしていくところです。また、劇団のげん・だっばには来年の春の演劇まつりにむけて脚本の創作に集中するよう、ハッパをかけているところ。（樋口）

【劇団コーロ】
早いものです。公演が終わって1週間たちました。終えてほっとする間もなく公演にはいりました。

冬の公演は、「聖の青春」大崎善生ノ原作ノ（講談社文庫刊）・いずみ凛ノ脚色・菊

地准ノ演出。12月6、7日。一心寺シアター倶楽。

【劇団息吹】
桑名でお目にかかって、もう1年、紅葉の秋がすぐそこまで。10月末の公演にむけて、なりふりかまわず稽古にはげんでいます。

井上ひさしさんの「紙屋町さくらホテル」に挑戦していますが、これがなかなか一筋縄ではいかなかったよりも難物です。劇団員一同なんとかいいものに仕上げようと思えばっています。

春公演の「冬の提灯」、形はどうあれ、新人公演的なものになりましたが、一定の評価ももらい、成功裏に終えることができました。（柳辺）

【劇団すがい】
新稽古場で迎えた初めての夏はやはり暑かった。連日の内装作業。汗が目にしみる。

そんななか、やっと「芝居」

にありつけたのが、8月27、28日の全日演・ゼミでした。劇団すがい代表以下9人が参加、ワークショップに10分間芝居、親睦会と、大いに楽しみ、お世話になりました。

私は初めての参加。「ワークショップ」で即興劇を行い、劇とはなにか、観客に伝えるとはなにか教えていただき、大変有意義で参加してよかったと思っています。また、観客に伝わる演技をするには、発声や体操など、基礎的訓練が大切なことを痛感しました。

稽古場内装作業も佳境に入り、日に日に、舞台が舞台らしく、客席が客席らしくなっていくのを見ると、はやく公演したい気持ちでいっぱいです。その柿落とし公演が、2006年1月に決定しました。残りの内装作業と合わせて公演の準備、公演前の

稽古場お披露目会開催の準備もあり、とにかく大忙しです。

（トト）

【劇団四紀会】

総会・ゼミお疲れ様でした！ 私たちにとっては、3年ぶりの地元開催ということでしたが、事務局の熊本さん・清原さんをはじめ、幹部の皆さんにまかせつきりで当日を迎えてしまい心苦しいかぎりです。参加の少なかつたのが残念だったのと、回を重ねてきた「熱闘」が、曲がり角にきているといった感想をもちました。参加された皆さん、本当にご苦労さまでした！

さて、私どもの公演活動ですが、現在第6回新開地小劇場公演「道」の真最中で、スタッフ・キャスト一同、修羅場の様相を呈しています。これが終わると、下半期の移動公演シーズン到来。そうこうしているうちに、来年2

3月にかけて上演する家族劇場公演の稽古に入っていくわけですが、まだレバがようやく決まりつつあるという段階で、急ピッチでの体制づくりが求められています。

創立50周年を迎える2007年まで1年あまり。企画については、記念すべき年を実のあるものとするためにも、じっくり練りあげていきたいと考えています。でも、あつという間でしょうね。

（里中）

【神戸職連連】

昨年2月の第54回公演以来、休業状態でしたが、この11月5日、岡山市で第46回国鉄演劇祭が開催されるのを機に、神戸から出張公演をするべく準備しています。9月15日、東京地裁で「国労差別あつた。慰謝料14億円支払え」の判決がだされました。昨年2月の公演台本は、国

鉄鷹取工場演劇部所属の本多弘志ノ作の「雄さん」でした。前記判決と同時期の「国鉄分割・民営化」のさいのJR採用差別をうけ、人材活用センターへ配属された国労組合員「雄さん」のドラマでした。その作者が今回書こうとしているのは、JR福知山線の脱線・転覆事故をモチーフとしたものです。

これが第46回国鉄演劇祭のメイン作品で、私たちは、賛助出演として、野上弥生子ノ作「藤戸」を上演します。結集できるサークル員の減少から、両作品ともキャストが3、4人のスケールですが、いかがになりますやら……。

兵劇協に所属し、「神劇まわり舞台」への参加を要請されているのですが、2002年8月以降参加できていませんので、なんとかできないものかと思案しているところ。（洲崎雅晴）

【シアター生駒】

奈良県からただ一つ全日演への報告です。いずれ、奈良の演劇状況もお知らせします。

この間の動きとしましては、7月「帽子屋さんのお茶の会」ノ作ノ別役実、演出ノ森田千秋。子どもさん向けの児童劇に挑戦、250人観劇。できれば再演したい。

5月、8月、市のホール主催・生涯学習講座として「らくらく演劇講座」を実施。10人参加（15人応募）。主婦・高齢者の皆さんの演劇への要求は大きいです。研究発表会を終え好評でしたので、勉強会として続いています。

12月3日（予定）「マコイの善人」原作ノベルトルト・プレヒト、上演台本演出ノ菊川徳之助（セチュアンの善人より）

この秋、関西では、プレヒトを研究しておられる3人の

方の「セチユアンの善人」が同時上演されます（人形劇団クラルテ、劇団どろ、シアター生駒）。少し楽しみます。（杉本 進）

〔演劇集団和歌山〕

9月23、24日、楠本幸男／作・演出「風吹にひびく唄」を和歌浦アートキユープで3ステージ上演。連日盛況で約400人のお客様に見ていただきました。2時間の大作でしたが、元劇団員や多くの方の協力をえて、35周年記念にふさわしい公演となりました。

作品は、戦国時代の根来寺が舞台、郷土の歴史を題材としたもので、お客さんは身近に感じ、休憩なしの2時間を集中してみていただきました。西会議からも藤沢議長をはじめ、多くの方が見に来てくれました。この場をかりてお礼申しあげます。

さて、次はなにをするか？今のところまったくめどは立っていません。当面、あとかたづけと、他劇団の芝居をしつかり見て充電します。（楠本幸男）

〔劇団あしぶえ〕

夏公演の「彦市ばなし」も大盛況のうちに楽日を迎え、今は秋公演にむけて「彦市ばなし」のさらなる進化を目指し稽古にはげんでいます。1本の作品を長く上演していますが、それはその作品を深く追究することで、稽古と上演のたびに新たな発見をし、作品を進化させるとともに、関わるすべてのスタッフ、キャストが、より向上していき、観客の皆さんにも、より楽しんでもらうためなのです。「あしぶえの芝居は進化する演劇」と銘打ってPRしています、それが着実に観客に浸透していることに我々

自身も驚いています。

さて夏公演では、後援会の事務局メンバーさんたちが表方全般をすべてうけもってくださいました。実はこのメンバーの方は、「八雲国際演劇祭」の委員会のリーダーでもあり、「演劇祭」を続けていくことで、劇団員だけでなくボランティアスタッフも育ち、「演劇祭」と「あしぶえ」の良好な関係も育ちつつあります。皆さん、ぜひ秋公演においでください。

10月16、30日、11月13日の3日間です。「彦市ばなし」の完成版をどうぞお楽しみに！（原敬彦）

〔福岡現代劇場〕

6月24、25日の「彦市ばなし」狼渡公一／演出。8月21日、大濠公園能楽堂での筑前琵琶（演奏中村旭園）の弾き語りによる「信太妻」狼渡公一／演出の公演を終えてはっ

と一息しているところです。8月27、28日の全リ演西会議2005年度定期総会、ゼミとワークショップにはそれぞれ狼渡公一、今泉亜希子、小名田依子が参加。今泉・小名田両人はワークショップのなかのひとつであるインプロのノウハウを2日間にわたってしつかり勉強、吸収してきて、さっそく団員のみんなに強制レッスンをしています。秋からは、地区の公民館の演劇ワークショップや上演のお手伝いなどの協力を通して、地域に根ざす活動も行っています。

かわったところでは、「イッシー尾形とフツウの人々」のワークショップに参加して、一緒に舞台にも立ち「お芝居は観客が創造するもの」というイッシーさんの話にふむふむとなにかしら感動、実感している団員もいます。（新平）

神奈川県演劇連盟合同公演 10月9日

『元禄・馬の物言い』

篠原久美子／作 中村俊夫／補作・演出 濱田重行／総合監督

劇団石るつ 境野 修次

神奈川県演劇連盟は京浜協同劇団、劇団蒼生樹、劇団川崎演劇塾など15劇団が参加している。今回の合同公演は、来年2月開幕の「横濱世界演劇祭」を前にした支援公演であり、また、改修工事を終え、7月にリニューアルオープンした県立青少年センターとの共催事業でもある。

この作品は「マクベスの妻と呼ばれた女」「ケプラー・あこがれの星海航路」などの篠原久美子が1990年に劇団（当時蒼生樹在籍）へ書き下ろした処女作品である。

女だてらに春画を描く、女の仕事はまるでできない喧嘩っ早い絵師、お市（藤田るみ・川崎演劇塾）。女

だてらに春本を書く、ぶっ飛び戯作者、お春（吉武寿美子・京浜協同）。女の仕事は何でもできる、ミス・出戻り、お千代（野口由美子・蒼生樹）。そして、井戸端会議で花を咲かす長屋の女たち。さらに、瓦版の長吉、小咄戯作者の鹿野武左衛門、お市の絵を求める侍・藤田三左右衛門、医者

者の順庵、その弟子の新一（権力のスパイで順庵と長吉を殺害するが、同時に長吉の短刀で殺される）武左衛門の弟子貞介に、長屋の男たち。同心に捕り方。長屋の子どもたち。と合同公演らしく多数の登場人物。

元禄時代に実際にあった「馬の物言い事件」を元に、社会的事件とは

無関係に生きてきたはずの人々が事件にまき込まれていく、社会派コメディ時代劇。歌と踊り入りの喜劇である。エピソードで歌われる歌が、この作品のテーマであろう。

聞いたか 聞いた／今日も今日とて、井戸端の／まわりに噂花が咲く 見ざる 言わざる 聞かざると／お偉い人は 言うけれど／お医者さまでも 草津の湯でも／井戸端会議は 止められない 長屋の啖可は 世間の本音 井戸端怒鳴りや 世間が動く 華やかで、笑いがあり、皮肉もある。

貝原益軒の『女大学』（儒教道徳規範）をパロディ化した『女大楽宝開』という好色本を思わせるところもおもしろい（お春のセリフ）。

装置は良かった。

一つ難点は、科白のコトバの不鮮明さが目立った。大きい会場のためか。

北海道での『父と暮せば』の上演について

尾田 浩 (北海道演劇集団理事長・釧路演劇集団)

北海道演劇集団に加盟する劇団で『父と暮せば』の上演が続いている。紋別の劇団海鳴りは、昨年11月初演し、6月・7月に斜里町・佐呂間町で巡回公演をおこなった。／神山昭／演出、竹造／我孫子正好、美津江／前田雅子(いずれも海鳴り)である。

札幌では、7月に同じ脚本で2組が2ステージずつ上演するという今までにない取り組みがあった。この企画のために、「札幌の各地で『父と暮せば』を上演する会」を立ち上げた。一組は、演出／安念智康(ドラマシアターども)、竹造／斉藤誠治(劇団新劇場)、美津江／西村知津子(劇団にれ)。この組は

2003年に初演し今回が再演である。また、この組は、8月6日、7日に江別市でも公演した。

もう一組は、演出／飯田信之(劇団さつぽろ)、竹造／山根義昭(劇団新劇場)、栗原聡美(劇団新劇場)で、この組は初演である。

札幌公演のパンフレットに演出の安念氏の一文に『父と暮せば』の科白は自分で作ったものはありません。原爆資料館の地下におさめられている、被爆者の手記・体験記・文集等の証言集の一行一行を取捨選択して紡ぎ合わせた脚本です」という井上ひさし氏がNHKの原爆特集番組での発言を紹介していた。

この夏、私はこの3作品を観るこ



山根チーム (演出 飯田信之)

とができた。5・6年前に釧路での演劇鑑賞会準備会で、こまつ座のすまけい、梅沢昌代コンビの作品を観て、感動し翌日に次の公演地まで見に行ったことがある。そして、昨年は同じこまつ座の辻萬長、西尾まり

コンビの作品を見ている。この5作品を観て感じることは、それぞれに完成した『父と暮せば』であるという点である。そして、観ている自分分は感動し、その舞台上に存在する人間に涙するのです。普段、自分と同じ作品を観るとどうしても比べてしまうのですが、この作品はどうしても、そういう感覚では図れないものがあった。その点がどうも不思議な作品だと思っていたが、前述の井上ひさし氏の言葉に触れて、「あー、そうか」と合点がいったのです。

竹造と美津江親子は、この戦争、この被爆の現実には思いをさせる人間すべてに存在するのだと。美津江の心の中から生まれてくる父親竹造。その父親への悔恨の情に悩む美津江の姿。それは、まさしく戦争の怖さと愚かさを知り、戦争の悲劇を真摯に受け止め、忘れない日本人の思いであり、美津江の思いであり、苦悩

である。だから、この作品は自分と同化し感ずることができるのでないだろうか。美津江が3人いれば3人の竹造がいるという作品であると思う。

北海道の中核をなしている演出家とベテラン俳優陣の果敢な取り組み、美津江を演じきった3人の女優に拍手を送りたい。この北海道での『父と暮せば』公演は、上演した各地に熱い思いを残してくれ、同時に「演劇の持つ力」を充分に再認識された上演であったと思う。

最後に、同じくパンフレットに掲載された演出の飯田氏の「今、日本は戦争をしている国なのです。それを防ぐ憲法も改悪されそうなのが現実です。(後略)」という一文があった。自民党の歴史的な圧勝と民主党の党首交代に、ますます、この言葉が重くのしかかる現実になった。



どもチーム (演出 ども)

3つの「父と暮せば」雑感

劇団ドラマシアターども

杉浦 啓介

この夏、北海道で3つの「父と暮せば」公演がありました。1つは紋別の劇団海鳴り（我孫子正好・前田雅子）、あとの2つは劇団さっぽろ・新劇場・どもの共同企画の、山根チーム（山根義昭・栗原聡美）どもチーム（斉藤誠治・西村知津子）です。私はそれぞれ観客・スタッフとして別の立場で関わることになりました。集団が違えば、同じ脚本でも全然印象が違ふとよく聞きますが、この3組もまさにそうでした。感想を少し述べたいと思います。

まずは海鳴り（演出・神山昭）舞台は斜里町ゆめホール、とても立派な装置、でもリアルさが災いしてか、少々狭く見えました。登場人物2

人、家の中のみ、というこの芝居には、大ホールは大きすぎるような感じがしました（こう感じるのは自分が小劇場に慣れているからでしょうか？）その中で、飄々とした感じの我孫子さんと、逆に力みすぎている前田さん。なんとなく菌車がかみ合っていないのか、装置と我孫子さんと前田さんがそれぞれ別の世界を作ってしまった、横のつながりに欠けるといえばよいのか「会話」の難しさを感じました。ただ、細かい小道具や動作にはとても気を使っている、いちばん現実味のある舞台でもありました。

つづいて山根チーム（演出・飯田信之）こちらは小劇場。ちよつと気

弱だけど娘想いの頑固親父山根さんと若々しい栗原さん。栗原さんの明るい美津江は、新鮮な印象があり、盛り上げ役の竹造と相まって、全体的に明るい雰囲気。一番「親子」に見えたかもしれません。ただ、残念なのは途中でプロンプの声が入ったこと。客は一気に冷めてしまいます。最後はどもチーム（演出・ども）陽気でお茶目な斉藤さん、落ち着いてて昭和初期の香り漂う西村さん。印象といえは子どものような竹造に落ち着いた美津江が振り回されている感じ。ときには親子ではなく夫婦に見えるようなときもありました。しかしきちんと決めるときには「父親」として登場。西村さんもしつか

り者で恋もする素敵な女性を演じていました。一番道具類はシンプルでした。でも逆に自由なのかもしれない

3組とも台本は変わらないのにこれだけ印象が違う舞台になる。演劇というものの奥深さ、魅力という

のはここにあるのかもしれませんが。演出の意図、役者スタッフの力量、ほんの少しずれるだけで、全然別物になる。何が正しいという答えはないのでしょう。どう感じるかは演じ手、客、みんな自由です。しかし、どう「感動させるか」を送り手はしつ

かり考えていかないと客からは認められません。今回は3組とも違う部分で感動がありました。作り手として考えなければならぬことはなんだろうか。今回見比べて、そんなことを考えるようになりました。

「心地よい思い出」でよいのか

演劇評論家

星野 明彦

劇団道化『長崎ぐんグラフィティ』

いずみ凜／作 鈴木龍男／演出

今年1月に稽古場と事務所を不審火で失った劇団道化が、在韓被爆者に光を当てたこの作品の韓国公演を、敗戦記念日に合わせて行った。

その報告を兼ねての公開舞台稽古である。上演前の挨拶からは、韓国での成功が伝わって来た。この舞台を観るのは初めてだが、

既に本誌113号に、鈴木太郎氏による劇評が載せられている（2003年7月、横須賀公演）。1971年の長崎、1人の少年が中学のサッカー部の練習をじつと見守っていた。彼は韓国人のヨンギル（笹川義昭）、サッカーを教えてくれた叔父が被爆したこの街を初めて訪れたのだ。

上野といつてもすぐピンとこない人もいるだろう。合併で伊賀市上野となったが、忍者の里として知られ、芭蕉生誕の地という縁で、昨年のフェスティバルin桑名にて、中心メンバーの福北弁氏が『芭蕉翁桃青—その内なる枯野から』を好演したことは記憶に新しい。さて同じ中部ブロックといえど、名古屋から2時間強かかることもあって、なかなか観劇できないでいたが、今回久しぶりに「丸之内芝居小屋」と銘打った稽古場で、木下順二の民話劇『彦市ばなし』を観た。

演出は、スタッフ(照明)ではプロの西出實、キャストはほとんど新人に近い面々であった。

全り演内でも数少ない50年以上の歴史を有す劇団だが、女性劇団員がほとんどいない、若手劇団員が定着しないなどの苦悩の末の舞台といえるだろう。

健闘、上野のふれあい小劇場

劇団上野市民劇場『彦市ばなし』を観て

栗木 英章 (劇団名芸)

サッカーのゴールとボールをイメージした装置、そしてよく見ると平台左右の勾配は石段になっており、中央には十字架らしき模様があって「長崎」を象徴している(美術・小南由紀)。そして長崎という街を知っていればニヤリとさせられる台詞や、主要な対象である子供達の親に受けそうな当時の流行が、たつぷりと盛り込まれている。

卓抜なのはマネージャーのサヤカ(川口佐代子)の存在。サッカーが好きで実際得意なのに、中学の部活ではマネージャーしか出来ない。「健全な縁の下力持ち」を演じていた彼女は、二言目には「だから女は」を連発していた森ビーを突然怒鳴りつける。ピートルズに憧れる一方で朝鮮人を蔑視する言葉を聞いて、川口は凄まじい迫力。身近な「女性差別」を通し大きな差別を見据えようという姿勢を評価したい。

があり、彼の独白のみ日本語になるリアルなはずの作り方が、ぶつかり合いというコミュニケーションを回避させてしまった。少年少女達は創氏改名や不公平な併合について聞くこと「ひどい」と口にするが、自分達の親の世代がしたという当事者意識を持つことはない。唯一、戦時中を知る教師アバッチ(二橋康浩)も、「周りの差別に反発していた善良な日本人」という、一昔前の「反戦物」にありがちな人物に留まっている。

(9月4日 筑紫野市文化会館)

だがその一方で物足りなさを感じた。サヤカ以外の少年少女達から、心の葛藤が殆ど感じられないのだ。今とは比べようもないほど日韓が遠かった時代なのに、ヨングルは日本人とあつさり仲良くなる。言葉の壁



オン堂」の一家とその周辺の人々の生活を描いている。劇団の重鎮、藤沢薫／演出。

全体としては、端正な舞台という印象をうけた。長男正一が軍隊から脱走、非国民の家と非難され、憲兵に見張られながらも、音楽大好きで伸びやかな一家と下宿人たち。時折優しさを垣間見せ、どこか愛嬌すら

ある憲兵伍長権藤。逃亡途中に我が家を駆け抜けていく「超」明るい脱走兵正一。国家の建前と現実の狭間で、銃弾で失った腕の幻痛に苦しむ実直な傷病兵、長女みさをの夫の源次郎。それらの人々の姿を、藤沢演出は自然体で、ていねいに、誠実に描きだしていた。この作品は、歌あり笑いありの明るくはじけた筆致で、戦争へと向かう閉塞した時代の中でも、さらなる人間への信頼と命のすばらしさを描いているが、京芸の舞台からは、その真摯さゆえに、背後に迫る「戦争」という時代の重さが、より強く感じられたように思う。

出だしはやや緊張ぎみ。とくに、妻ふじ（加藤小夜子）と長女みさを（赤土綾子・黒木てるみとダブルキャスト）に固さが見られたが、店の主人信吉（竹橋団）は手堅く自在な演技で、大らかなお父さんを好演。源次郎（新谷智史）もまじめで一筋な人柄

をよくだしていた。権藤（京俣聖一）（粟科治）はともに客演だが、個性豊かに笑いを誘う。下宿人で広告文案家の竹田（小池貴史）は、時代に絶望して子どもを生むことを拒絶するみさをを、「人間は宇宙の中の奇蹟そのもの」と説くが、その淡々とおしさが心に響いた。ラスト、その竹田は教師として満洲に、信吉夫婦は長崎へと旅立つことになる。家族で歌う、明るい「青空」の歌声にかぶさる爆音に、彼らの「その後」が暗示され、静かに舞台から去っていく後ろ姿が、いつまでも胸に残った。

『きらめく星座』は井上ひさし氏が、今、この時代だからこそ、ぜひ若い人たちに見せてほしいと学校公演での上演を許可されたと聞く。さらに練りあげて、再演を重ねてほしい舞台だった。そのときにはもう一度、私も観たいと思う。

う。その点では、セリフの緩急なり、間などにもよほどの習練が不可欠といえる。稽古場の空間はそれを鍛えていくには格好の場なので、これからも練習を積みかさねて、舞台の質でもって観客の暖かい声援に応えて

いってほしい。そこから上野市民劇場の新しい歴史も拓けていくのだろうと思う。

（5月14日観劇、写真は先号グラビア写真参照）

井上ひさし／作 藤沢薫／演出

京芸創立55周年記念公演『きらめく星座』を観て

京都労演事務局長 土屋 安見

この夏、劇団京芸が創立55周年記念公演として、井上ひさし／作『きらめく星座』を上演した。京都府立文化芸術会館で、8月19日から21日の3日間4ステージ。観客数約1450人と、430余席のホールは連日いっぱい埋まり、地方において、職業劇団としての活動を営々と持続してきた京芸の、55周年を飾るにふさわしい公演となった。

京都労演では創立40周年の1997年、京芸の『國語元年』と人形劇団京芸の『モモ』を記念例会に取り上げている。鑑賞会の例会は東京の劇団中心のため、地元京都の劇団としては30年ぶり5回目のこと。『國語元年』も井上ひさし作品だが、作品のおもしろさ、出演者の熱演、好演で大好評、会員に「京芸」の存在をあらためて印象づけた

のだった。この前回の成功が土台となり、今回再び出会いの機会をつくることができた。今年の定例会はすべて決定していたため、特別例会として取り組み、1ステージ421人の会員が観劇。「よかった！」の声がつぎつぎ寄せられ、次回への期待をまた大きくつないだ。

『きらめく星座』は太平洋戦争前夜の浅草が舞台。レコード店「オデ



戦国末期・紀州の大事件

地元のあついで
観客に支えられて
見ごとな形象

劇団未来 森本景文

演劇集団和歌山創立35周年記念公演

『風吹にひびく唄』

楠本幸男／作・演出

和歌の浦に汐満ち来れば濁を無み葦辺を指して田鶴鳴き渡る……と山部赤人が詠った名勝の地に「和歌の浦アートキユーブ」はある。

ここで行われた「演劇集団和歌山」創立35周年記念公演『風吹にひびく唄』の満員の客席は、今につながる切ない生きざまと郷土の先達が織りなした歴史に想いを馳せ、深い感動に包まれていた。

また時あたかも、今秋の1カ月間、大阪泉北地域と和泉山脈をはさんで隣接する和歌山県の北部・岩出町の

山すそに位置する「根来寺」では、開祖であり、真言宗の中興の祖と呼ばれる秘仏・覚鑿上人座像などを特別公開するという。

この根来寺は、1585（天正13）年3月22日、秀吉の「根来攻め」にあつて焼失し、1600（慶長5）年に再建されたものである。

『風吹にひびく唄』は、この焼失にいたるまでの5年間を切りとつた歴史ドラマである。

楠本幸男と演劇和歌山は、近年、「ジントラ懐かしシネマの夜」「海王」

「リバーサイド」と連続して、和歌山に材をとり、和歌山弁で生きいきとした生活感とエンターテイメント性をもつた秀れた舞台を創り、和歌山の人びとの中に確実に支持を広げてきている。

しかし今回は、今を去る400年以上前の紀州における戦国末期の大事件の中であつて、僧侶・僧兵・商人・尼・娘を扱つたものである。

歴史劇を舞台化するためには、こゝとば・生活感・衣裳・風俗習慣など、研究し、自分のものにしていかねばならない課題が山積する。

楠本と演劇和歌山は、これらを見ごとに克服し、感動の舞台を創りあげたことをまず評価したのである。



ものがたりは、だれとも組せず信仰に生きようとする清有と、信長方に忠誠を誓う頼空という2人の能化（僧侶の最高位者）と、僧兵頭の杉の坊という三つの勢力が牽制しあい対立しているところからはじまる。

そんなある日、根来寺の池で、吉乃という娘が入水狂言自殺を図り、根来の僧・玄正（清有の秘書）に助けられ、白蓮の尼寺で面倒をみてもらうことになる。日がたつにつれて吉乃は、堺の商人・嘉助から勢力情報を入手したり、杉の坊と肉體關係をもつたりの行動をはじめ。吉乃は、信長によって皆殺しにされた荒木村重の使用人で、信長の首を狙っていたのであつた。ところが1582（天正10）年、信長は明智光秀に襲われ自殺し、秀吉が天下統一の事業を引きつぐことになり、吉乃は目標を失つてしまうのである。

一方、根来衆は、秀吉が小牧長久手合戦をしているすきをねらい、泉州の岸和田方面に攻撃を仕かける。これに憤慨した秀吉が10万人の兵で根来を攻め、2日間で根来寺を灰にしてしまう。根来寺の最後の存亡の中で身を粉にして働く若き学僧・玄正の姿を見直した吉乃は、玄正を守ろうとするのだが、「女人は根来寺に入れぬ。逃げて生きよ。生きて人の世の宝を探せ」とつきはなされる。けもの道を辿つて風吹峠をかけていく吉乃の子守唄でこの劇は終わりを迎える。

登場人物は男性7人・女性4人で、そのうち6人が客演者である。

清有役の植西一義、白蓮役の城向博子、玄正役の山入桂吾、嘉助役の水口広平、吉乃役の山下悠生の劇団員が要所を担当し、役の生きざまに近づこうと一大決心をして取りくんでいる姿が胸を打つ。頼空役の城野



てくれたり、老人の戦争に巻き込まれた話を聞いたりして心が通じ、風邪で発熱した孝三郎の看病を娘がするというような情愛もでてきた。

4日目の早朝、妻の泰子は夜勤で不在、夫の耕平と娘の高子がまだ就寝中に、「十分楽しませてもらった」「元の鞘におさまらねば」と、老夫婦は息子のところへ帰っていく。帰られてみると、古野家にとつては、混乱の3日間であったが、なんだか寂しい。お年寄りが、玄閔のチャイムを鳴らしてまた、入ってくるような気がしてくる——という13場のお芝居なのである。

泰子が自分の家庭への侵入者に寛大すぎることをはじめ、夫や娘までが、ふりまわされることを受け入れている不自然さや、ドラマ性の希薄さを指摘することはたやすい。しかしながら、泰子や古野家の家族は、作・演出者の生きざまそのものであ

るし、それに甘える老夫婦は、日常、田坪文一にSOSを發し甘えている私たちと考えると、妙にリアリティが生じてくる。

この舞台は、実生活そのものの役を演じた樋口三千代の主任看護師、その夫の地方公務員の秋田高志の實在感が舞台をひき締めたし、押しかけお年寄りの杉田満と井上清美のベテランらしいほのぼのとしたとほけぶりが客席をなごませた。MAKE UP GELLから客演の鼓美佳と築山好映も、若々しく役どころを押えてよかった。

そしてなによりも、永年の大阪府職員勤務を終えて、新しい還歴に挑戦していく田坪文一らしい舞台創造を、府職劇研あげて取り組んだことを評価したのである。

(7月1・2・3日 大阪府立青少年会館プラネットホール)

周三、雄山役の華嶋風月、栄哲役の川崎暖、梅役の谷口桂子、小咲役の岡紀久子の客演組も誠実で一所懸命ですがすがしい。杉の坊役の得津一也は飲み屋でスカウトされたという初舞台であるが、セリフのすべてに力が入る無骨さが見ごとく僧兵頭にはまっている。

そして何よりも、劇団代表の植田幸男が舞台監督を、ベテランの樫尾裕美がメイクを、鎌田昌信と下崎浩が制作をと、中心俳優が裏にまわって舞台を支えていることも頼もしい事柄として評価したのである。

(9月23日・24日
和歌浦アートキューブ)

集団をあげて新しい還歴に挑戦する作・演出を支える……

大阪府職員演劇研究会

『朝のチャイムがあなたの家に』

田坪文一／作・演出

14年前に上演された作品のリメイク版である。

作・演出の田坪文一は、この人がいなければ今この集団はありえないと思える存在だし、周りの劇団サークル・組合の文化祭などが裏の仕

事でどうしようもなく困りはてたと、彼に要請すれば必ず笑顔で引き受けてくれる人物でもある。この人が去る3月で府職員を停年退職したので、これを契機として、劇研の仲間が仕掛けた公演なのであった。

第二次世界大戦、レイテ島玉砕時の生き残り元海軍少尉で、今も腰に砲弾の破片が残る老人・西小路孝三郎が入院している。その看護を担当している主任看護師・古野泰子は、亡くなった自身の父親と同じ年恰好の孝三郎を他人とは思えず「親が生きてれば同居して思いきり親孝行するのにな」ともらしてしまふ。同居している息子とうまくいってない孝三郎は「君の期待に応えたい」と、退院した足で老妻とともに、泰子宅にやってきた。

泰子宅には、大学7年生の娘・古野高子しかいなかったで面くらっているうちに、老夫婦は強引に居座ってしまう。帰宅してきた地方公務員の夫・耕平と妻の泰子はとまどうが、悪気のない2人の態度に不法侵入で訴えることもできず、優柔不断な3日間を過ごしてしまふ。

その間に老妻が家庭料理をつくっ

来る人、去る人、残る思い

演出・評論 神澤 和明

人生のある時期を過ぎた場所には、それぞれのこだわりがある。それは出て行く者より残される者に、より強いかもしれない。

劇団息吹『冬の提灯』

渋谷健一／作 柳辺首子／演出

かつて多くの人々が集った町が、時代の流れで衰退してゆく。人は滅びゆくものから離れてゆく、沈没船から逃げ去るネズミのように。だが小さな共同体だからこそある、人のつながり、思いやりの暖かさが外に向かう足をとめさせることもある。

廃鉱になって久しい、北海道の炭坑町・三笠。暮らしがたちゆかなくなつた人々は、次第に町を離れてゆく。

く。見知つた顔がいつの間にか消えている、そんな寂しさを慰めるようにともっている居酒屋の提灯。そのあかりに誘われて、毎晩訪れては大将（大坊晴彦）を相手にクダを巻く老人（寺氏菊夫）がいる。その頭ごなしの説教口調に辟易させられる、なじみ客のフーちゃん（岩崎徹）やがて、この牧田という老人が、かつてこの町で教師をしていたこと、町を出て行った教え子たちが「希望

の顔」として戻ってきてくれることを待ち望んでいることがわかつてくる。

牧田先生は看護婦の伊藤さん（有明有）の息子の健太くん（三宅昂太）から書道の指導をたのまれた。東京での生活に嫌気がさした教え子の小川君（青堅充裕）も帰ってくる。先生に元気が出てきた。だが伊藤さんは別の町の大病院に移ろうとする。

居酒屋がていねいに作られている。頑固だが暖かい大将、愚痴は多いが陽気なフーちゃん、気難しい牧田先生。それぞれの個性が表れてくる会話が、楽しい。寺氏はシルバード世代に近づいてから演劇の道にデビューした。出だしの酔態を見せる

演技に生硬な感じを受けたが、次第に反骨心とセンチメンタルに満ちた元教師という人物に一体化して見えてきた。しみみりと暖かい、甘いともいえる展開であるけれど、ノスタルジックな気分が快い。

経験の浅い有明、青堅の演技も芝

居にとけ込んでいる。子役の三宅はハキハキしているだけでなく、気持ちの表現もしっかりでき、よいタイミングの演技を見せて芝居のキーンとなっている。大人のおとぎ話を暖かく語つた初演出もほめておきたい。

（6月18日昼 プラネットホール）

平和国日本が還暦を迎え、昔へ逆行し始めている。タカ派首相の独裁的な政治手法が多数の国民の人気・支持を得、保身をはかる人々は考えることをやめイエスマン集団を形成する。この流れは変えられるだろうか。

劇団きづがわ『武器よ、さらば』

濱嶋隆昌／作 山田二己／演出

20××年、憲法9条の改定により「日本国防軍」と改変された「自衛隊」は、アメリカ軍の後方支援のため、パラケスタン共和国に派兵される。襲撃を受けて部隊はバラバラになり、リーダー・矢野（寺島由浩）、

人道支援を志した衛生兵・萩原（河塚俊哉）、バイト感覚で来た学生通訳・西（白坂友哉）の3人は、洞窟に避難する。水も食料もほとんどない。このまま飢え死にするか、戦つて殺されるか。選択肢は二つ。

作者は争議団の闘いや冤罪事件の支援活動のために、コントや構成劇を執筆してきた人と聞いた。主張をかなり直接的に伝えてゆく率直さを台詞や展開から感じた。

パラケスタン人に襲われた萩原が、争いあつて相手を殺してしまう場面で始まる。相手は民兵で軍装をしていない。そのため、日本軍が相手国の民間人を殺してしまった気分がする。初めて人を殺した萩原は、強いショックを受けた。敵の銃弾は相手を選ばず飛んでくる。戦争に参加すれば人を殺すことが義務づけられるのだと、はつきり示された。

萩原はこれ以後、殺した男の幻影にとりつかれ、瀕死の重病に陥る。戦場にでるつもりがなかった西は、迫り来る死の恐怖に怯えるが、矢野にひっぱられ、萩原を気遣い、独り立ちできる強さを持ち始める。軍人であることを誇りにしている矢野

であるが、自分たちの行為が正しいのかどうか、次第に疑い始める。女を捕虜にしてからはとくに。戦争によって家族を失い、苦しみに耐えている現地の人たちに、自分たち日本人はどう見えているのか。

3人の兵士の苦しみや悩みが抑り下げ不足であり、反省の仕方や戦うことをやめて投降しようという結論への到達も、ひねりが無い。だが、そうした直線的な作り方は、作者の意図にそったものであろう。パラケスタンの言葉が、日本の市販薬名や馬鹿馬鹿しい意味の日本語に似ているという笑いが繰り返され、適度な息抜きになっている。

河塚が心の葛藤に悩まされる複雑な演技を巧みに表す。白坂も薄っぺらな若者が人間的に成長する様を示した。寺島は誇り高き軍人という感じではないが、意志の強い人物という表現はできていた。彼がもつと分

からず屋に見えていたら、最後の変心が際だつたらう。

日本で書かれる戦争をテーマにした劇の大半が被害者の視点から書かれたもので、加害者としての日本というものが見えてこない。攻められた側から日本の行為をとらえたら、どうなるのか。なにが語られるのか。

大阪『スピリッツ・プレイ』霊戯』

郭 宝昆／作 桐谷夏子／訳 山内佳子／演出

南の島ということだけが示される。人の気配もない夜の荒野に、亡霊が集まってくる。名乗りはしないが、彼らがかつて將軍(清原正次)、兵士(佐藤敏弘)、母(梁礼子)、女(伊藤節子)と呼ばれる存在であったことが、その話からわかる。將軍と兵士はこの島を占領するためにやって来た。母は夫の遺骨を探しに、女は看護婦として従軍して。詩人(阿部達雄)と呼ばれる従軍記者の霊が口

ずさむ故郷の歌に刺激され、彼らは生きていたころに担った戦争の記憶を語りだす。

作者はシンガポールで活躍した演劇人(3年前に死去)だが、この作品が本国で上演されたとき、日本に対して寛大でありすぎると物議をかもしたそう。確かに作者は日本を一方的に糾弾するという姿勢をとっていない。それは日本の戦争責任について、さまざま理由から熱烈

に告発を続けているアジアの国々にとつて腹立たしく思われるだろう。だが作者はそこに一線をひき、人間の普遍的な問題として描いている。この島にやって来て、死に、殺され、霊となった彼らは、残忍な加害者としてだけでなく、ある意味、被害者として描かれる。それは彼らの行為が国家のためという大義名分によるものであり、それゆえに平和なときでは考えられない狂気的な行動に駆り立てられた哀しい存在であるからだ。

ほとんど動きがない、5人の一人語りによる詩劇である。白い長衣をまとい、細長く垂れた紗布の前にそれぞれが坐って、舞台の両側に設けられた客席に向かって語りかける。いや、語りかけるといふよりも、空間に言葉が流れ出されるような感じだった。

母も、強姦され慰安婦にさせられ

た女も、撤退する軍の足手まといとして殺される。彼女たちの語りに告発はない。戦う真の理由も知らず死んでゆく兵士もそうだ。戦う指示を出していた將軍でさえ、演技者のもつ気分からは、自分たちは負けることはできないという強い脅迫観念に踊らされた、空虚な権力に頼る弱い人間に見えた。

5人の演技者は言葉をていねいに語り、それなりの技量を示したがす

べてが同じテンポ、同じ重さで語られてゆき、霊として残り訴えたかったことが見えてこない。互いの語りは絡み合わないもので、いつそう難しい。たしかに明確な個性はなく、一般化された存在であるが無人格ではなく、だれか、という立場を与えられている。この劇をどのように語るべきか。初演出に厳しい課題だが、さらにつきつめる必要がある。

(8月6日昼 谷町劇場)

急に訪れる身近な者の死によって、人は悲しみ戸惑う。残された者は、死者に対してし残したことを思い出しては悔やみ、それを完遂して互いに平安を得たいと願う。

劇団未来『夫婦レコード』

中島淳彦／作 牧 達郎／演出

会葬者に謝辞を述べる中村康夫(西尾臣示)と娘たちの姿が始まる。妻・民子の急死に動転し、泣き崩れ

る康夫。暗転。葬儀の後片づけに落ち着かない家となる。気の抜けた康夫。離婚した長女、

京子(三原和枝)は、母親になにか相談していたらしい。次女・優子(前田都貴子)の結婚相手・健一郎(島芳道)は芽のでないミュージシャンで、康夫に遠慮がある。三女・洋子(近江博子)は同僚教師の岡田(宮崎智司)とまもなく結婚予定。四女・君子(中面慶子)は引きこもり気味。五女・美子(肉戸恵美)は気楽な女子大生。それぞれが自分の事情を抱え、母親と結びついていた。家族間のパイプ役がいなくなった今、娘たちの悩みはそれぞれに返される。なぜか民子は「王選手の本ムラン記録」ノートを綿密につけていた。そこに自分たちの知らない母親がいる。そして田宮という見知らぬ男が焼香にあらわれる。

生活が落ち着いたら結婚式を挙げようと民子と約束していた康夫。一度きりの浮気のお詫びに贈ったワーグナーの「結婚行進曲」にのって民子と腕を組んでいるかのように康夫は庭を行進する。二階の窓から娘たちが紙吹雪を降らせる。葬儀で始まった芝居は、目頭が熱くなる「結婚式」で幕を閉じた。

(6月25日夜 プラネットホール)

いしただろう。だれか(主として母親だ)を間において、お互いがなにをしているかを知る。家族といつてもやはり、個人の集まりであることに気づいたとき、新たな関係づくりが必要になってくる。

不器用で照れ屋で、どこかロマンチックな康夫を、西尾が自分そのままのように見せる。家長として威厳を保つより、妻という支えを失っておたついている様子が強く出てくるのが、彼らしい。三原は、やや自分中心だが、男女間の問題で揺れる不安定感を漂わせる。前田、近江の演技からは、自分たちがしつかりしなければと気をはっている妹たちの様子が伝わってくる。その夫たちの、距離感がかめず、神妙でいながらずれているおかしさが、舞台をホッとさせる。君子がかかる音楽は、康夫が民子に贈ったレコードと約束を思い出させ、末っ子の無邪気さを見

家族だからなんでもわかりあっている、ということはありません。ある年齢になって以来、父親や兄弟姉妹と話し合うということをごくらく

「フェスティバルにて…世代を超える」

演劇評論家 今泉 おさむ

大阪の2つの演劇祭。参加劇団にとっては例年、その年のメイシとなる公演になるはずだが、今回はいずれも「劇団スタジオ」もしくは「準じる劇場」での公演である。それだけ、歴史ある劇団であっても、演劇公演を行う環境が難しくなったというべきなのか。つらい時代である。だが、各々の劇団、しなやかにしたたかにがんばっている、とみえた。

劇団大阪『闇に咲く花〜愛敬稲荷神社物語〜』

井上ひさし／作 熊本 一／演出

「昭和庶民伝・三部作」その二。第二次世界大戦太平洋戦争。神社は護国の象徴として、国民を戦争に駆り出す役目を果たした。その過去を押し拭いたまま、「神社本庁」は全国の神社を再び傘下に置いたため

に、再組織の動きをすではじめていることが、中で触れられている。氏神様への崑敬の念。これは庶民のなかでは、容易になくなるものではない。

その、敗戦後間もなくの夏。神田

の愛敬稲荷神社。現在の若者たちには、とうてい考えもおよばない食糧難の日々。いまは参る人のほとんどない神社では、神主の牛木公麿が、近所の戦争未亡人たち5人を集め、縁日のお面作りや闇米の買出しなどでやっとなつないでいる。見るからに好人物そうな公麿。彼が戦争未亡人の夫たちを、戦中どのような言葉で送り出していったのか。その反省は、劇中の彼の言葉からは一切聞かれない。その時々体制に安易に順応してしまう。それが私たち、日本人庶民の特性なのであるか。とみれば、作者は、庶民たちは被害者の立場だけではない、といっているのであろうか。

過ぎ去りし幼き時代の思い出。自分にとつての『青い風の街角』とは、どこであったろうか、それを思い返す気持ちになる。現在のような単身赴任など思いも及ばぬ時代、思えば転転とよく動き、転校が嫌だったことを思い起こす。この舞台は、現在からわずか40年前の頃を描いている。とすると、最近の時代の進化はさまざまいと改めて思う。

大阪近郊の下町に生きる人々の群像劇。細い路地の奥の、板塀に囲まれた一角の長屋。朝夕、文字通りの

が行き届いている。ただ、台詞はなく、劇中では目立たないようできて、重要なポイントである、この戦争で犠牲となった戦友のため、9999曲奏であることを志した、ギター弾き

劇団コロロ『青い風の街かどで』

坂口 勉／作 藤井せごう／演出

井戸端会議。それこそ、各家の米櫃こめびの米の量も知り合つて暮らしていた時代。人の情の中で助け合いながら日々暮らしている隣人たち。

高橋綾乃は定時制高校生。母が5・6年前に亡くなり、小学生と中学生の弟たちの面倒をみながら、雄しく生きぬいている。ところが、工員の父が、勤め先の事務所の女性・悦子と再婚するという。弟たちは無邪気に新しい母を喜ぶが、綾乃は割り切ることができない。思春期の少女の揺れ動く心情を中心に置いて、

長屋のがさつだが心温かい人々が周りを取り巻く。それらの人々が、大家のオヤジさんをはじめ、うまく配置されている。そして、定時制高校の働きながら学ぶ仲間たちが、継母と衝突して、家を飛び出した綾乃を心から心配する。

日本人の大部分が未だ「中流意識」を持たなかつたあの頃、「定時制」の存在価値は、現状と比較すると微妙な言い方にもなるが、こういった真摯しんしんな若者たちが多かつたところが、思い出される。舞台構成として一言つけくわえれば、長屋の他の人々の生活に、もう少し突っ込みがほしい。そして、この一家に絡まるような、比較するようなエピソードがほしい。でないと、取り巻く周辺は、どうしても「スケッチ」のまま終わってしまうことになる。だが作者の初戯曲としては、爽やかなデビューである。



神社の捨て子だった、一人息子。健太郎は将来を嘱望された野球選手、剛球投手。戦死の公報があつたが、ひょっこり帰還した。喜ぶ公磨とところが彼には、戦地ゲームで、キヤッチボールの相手をさせた現地人の若者の額を直撃させる行為で虐待したという、BC級戦犯の容疑がか

かり、GHQの特務が現れる。

思いもかけぬ容疑に、彼は突然、記憶喪失に陥る。このままでは廃人になってしまいかねない彼を、親友である精神科医の稲垣は必死に記憶を呼び起こそうとする。だが、記憶が戻ればGHQに連行されてしまう。この波乱を含みながら、舞台は進行していく。買出しとそれを取り締まる経済警察との知恵比べ、おみくじの効用などなど、笑いの中で、公磨と5人の戦争未亡人たちの掛け合いは、現実の苦しさをふと忘れさせる。

戦争未亡人たちは、ともすれば集団に埋没してしまいがちだが、各々きつちり、その異なりを鮮明に演じている。集団としてのアンサンブルも、個の個性がはつきり演じられてこそできあがるものである。しばらくぶりの舞台復帰である上田啓輔あべ健太郎が、そのやや訥々とした台詞

まわしが、役にうまく生かされている。齊藤誠二公磨も、持ち味ではない、ひょうひょうとした趣をよくだしている。笑いとサスペンスの同時並行。記憶を取り戻させ、山中にかくまおうとした稲垣の意図は、GHQが一枚上手、盗聴を仕掛けられ、健太郎は連行され、現地裁判の結果、処刑される。BC級戦犯は、現地人と仲が良かった者ほど名前が覚えられ、単にそれをだされた結果、処刑された者も多いらしい。人間の生と死、矛盾とかなづけられる問題ではないのだが。

スタジオ公演の狭い空間で、いかに建て込んだ舞台を見せられるか。劇団は昨年、永井愛『日暮町風土記』で実績がある。今回はスタジオ入り口に鳥居を構え、舞台全面を本殿にしつらえている(安田幸二あんだフ賞・大道具)。今回も見事である。本殿の装飾、細かな小道具にも神経

この舞台の劇評を書くのは難しい。作者は、その後の旺盛な執筆と、その内容で、戦後の新劇を代表する劇作家の一人と評価されている。だが、この作品は（戦後史）を描く四部作の最初、58年の発表。未だ（職場演劇）中心の活動だった当時の力作である。時は労働組合運動の高揚時期、そして、職場演劇の華やかな時代である。ならば、どうしても、その時代の視点で描かれているのは当然である。これを現在、上演するとなると、視点をどこに定めるのか、当時から現在までの、国民の、労働運動の価値観の変転をどう加味するかで大きく異なってくる。

舞台は、九州の軍需化学工場（三

関西芸術座『反応工程』

宮本 研／作 門田 裕／演出

井財閥）。石炭を原料として、染料・薬品・爆薬に製品化される（反応工程）の第一現場である。45年8月5日から10日までとエピソードに当たる翌年の3月の、四幕の舞台。戦争末期ともなると、軍需工場も完全な人手不足。工員も、見習工、徴用工たちを加え、動員学徒たちが多く働いている。

その敗戦間際の実態。中心となる人物は動員学徒たちの班長・田宮。純粋な心を持った青年。これを戦後60年の現在から、顧みて、どう当時に迫っていけるのか。働く若者たち集団の高揚した心をどう創りだせていけるのかである。この舞台を観て、当時をなぞらえているととるかどう

かは、観客の年代とも関わってくる。すなわち当時の状況に対して、どれほどの知識を持ち合わせているかによって異なってくる。

日本の教育は良くも悪くも『現代史』＝昭和の歴史をほとんど教えていない。それを指摘する、あるTV番組で、文部大臣経験者が「教員組合はマルクス・レーニン主義だから、現代史には触れない」ということは、現状として、文部省との暗黙の了解なのだ」という珍説を披露していた。戦争当時の国民たちの、ニュースから閉ざされた世界、情報から閉鎖された状況。これは、生まれたときからTVのある世の中に育った世代には、想像できるだろうか。

とはいえ、政府が『本土決戦』と叫ばれ、本土の制空権を奪われ、敗色濃厚となっていることは、無理に目隠しを外すまいとしている者以外には、分かってきている



(撮影 森ロミツル)

いまでは幼なじみで、定時制仲間
の雄一と結婚している綾乃が、継母
の悦子と、父親の墓参りに訪れる場
から、幕が開く。2人はちよつとし
たことで角突きあうが、現在ではわ
だかまりもすっかりなくなり、実の
親子よりも、親子らしい。その静か
ら、一転して動に転じる、過去への
振り返り方が、舞台転換のスピーデ
イさも加えて、うまくいつている。
そして、凝ってはいないが、美術
（石田昌也）がいい。ざわついた中
での、賑やかな長屋の住人たち。そ
れは、スタジオ公演だからこそ、
観客が同位置の視線から見られる親
近感を生みだせる利点があった。三
方からの客席は、出演者たちも、観
客をさして意識せずに、その場の
雰囲気に入れる利点を生み出してい
る。その相乗作用がうまくいつてい
る。

悪い意味ではないが、劇団の、こ

れまでのやや肩肘張った内容とは異
なり、人の心の細やかさで動かされ
ていく個々の心情、その人情の機微
に触れるこのような舞台も、劇団レ
パートリーの中には必要ではないだ
ろうか。セットを設置して、繰り返
し練習できる、『スタジオ公演』の
利点があまく生かされていると、観
た。

植田令＝綾乃が、未だ演技に固さ
があるが、役柄としてはうまく生か
されている。浜野みどり＝悦子は、
子ども3人の中に飛び込んでくる、
おとなしそだが、芯の強い女性を
演じて、綾乃との対決にきらりと光
るものを出した。長屋の人々では、
世話焼きのおばちゃん中村奈美子の
真下政美が目立つ。それと、綾乃の
夫となる中村雄一の浅難拓が、最近
の舞台と同様、いい味を出している。
大阪新劇フェスティバル・参加。

(9月9日昼・劇団スタジオ)

欧米では、犯した罪が軽い場合、労働で被告の罪を償わせる『判決』があるようである。2年前に観た『扉を開けて、ミスター・グリーン』も、青年が一人暮らしの老人宅を訪問せざるを得なくなり、否応なしに世代間の意識の異なりを痛感しながら、次第に理解し合っていくと言う、大枠ではこの舞台と似たような設定であった。

ここはドイツの、とある「老人ホーム」の一室。仲間のバイク窃盗の罪を肩代わりしたため、部屋の古びた壁のペンキ塗りの労働を割り当てられた、16歳の少年ヨーヨーが訪れる。黙って仕事をすることに慣れていない、そのうえ、このような赤の

劇団潮流『ボクサー魂』

ルッツ・ヒュプナー／作 小森香折／翻訳
平田一紀／演出

他人の老人と接するのは初めてに近い、この年頃の少年は、饒舌に1人でしゃべりまくる。そのうち、車椅子のまま表情さえも動かさなかつた老人が、ふと言葉を漏らす。それ



は、2人が言葉を交わすキツカケとなり、少年は老人の過去を知ることになる。
現在は老いさらばえているが、彼は、一世を風靡したチャンピオンボクサー、レッド・レオだった。世間の中に居たら、決して交流のあるはずがなかった2人。ヨーヨーには、好きな少女がいる。だが、どうきつかけを作っていないか分からない。レオは、老人ホームを脱出し、友人のいる南フランスへ行ってしまったいと切望している。そして、2人は徐々に互いの希望を助け合うことになる。過去の栄光は忘れ去られ、老人ホームに閉じ込められ、余生を過ごすしかない、老ボクサー・レオと、街の少年ヨーヨーとの交流、舞台上では、ベテランと新人とのぶつかり合い。うまくいけば、興味深い舞台となりそうである。
車椅子のレオと、ペンキを塗りな

はずではなからうか。『学生たちは純粹に国のために尽くそうとした』とはどうなのだろうか。田宮が、当時の禁書を読んだら出入りする控え室の机の上に放置し、ロッカーに無造作に放り込んであるものだろうか。この戦中に、『学生は、真実を追究する権利がある』という大義名分が、国家権力をうわまわる絶対権利でありうるものだろうか。そこに、労働運動の高揚した、作者の描く『時代の価値観』の影響を感じてしまう。

登場人物をはっきりと識別して描いていく。それが、当時の職場演劇の方向であることの影響を感じてしまふ。したがって、例として、監督教官・清原は悪者にならざるをえなくなる。監督教官の立場は、そんなに単純なものではない。まして、表面上でも、動員学徒たちが信頼しているならば、多少の見苦しさはあるうとも、学生たちによかれという気

持ちは全否定されるものではない。田宮の叫びは格好よい。だが、たとえ純粹の正義であろうとも、はたして当時このように『言えた』ののだろうかと、どうしても疑問を感じてしまう。

多少の助けを必要としたが、戦争をまったく知らない若者たちで立ち上げたこの舞台。その時々、場を生きようとする、青春の息吹は舞台から感じられた。「撃ちてし止まむ」の精神を無為と放擲するのはやさしい。だが、そこで精一杯生き、矛盾にも立ち向かっていった若者たちがいる。この描写は、必要である。

個の力ではどうしようもない世の中の流れ、それを抵抗者と迎合者に二分して描くのはやさしい。戯曲そのものが書かれた時代を反映して、現在から見ると、やや単一化と見えしてしまう。だからそれは、クリアする何らかの手立てがやはり必要であ

る。戯曲としては、さすがに、各々の人物はよく描き分けられている。そして、敗色濃厚を察知して、戦後の平和産業への変換を密かに準備しようとする、企業というもの、のしたたかさ。加えて、後の『三池闘争』を暗示させる、大企業における、戦後慌ただしく作られた労働組合の成り立ちと脆弱な基盤など、時代を見る眼は鋭い。

こういった構成に、出演者たちはよく応えている。これら若手に混じると、亀井賢二責任工荒井には、存在感がある。そしてエピソード、現場を訪れた田宮が、なかなかいいだせないが姿を求めたい、相愛の荒井正枝が、12日に事務所を襲った直撃弾で死んだことを伝える台詞で幕切れとなると、戦争の虚しさが如実に迫ってくる。大阪新劇フェスティバル・参加。

(9月2日昼・劇団スタジオ)

がらのヨーヨー。静と動との対比の中で進められていく舞台。パターンとしては定式ではあるが、そこでどう2人が組み合っていくかが、見どころとなる。装置としては、上手に外をうかがえる窓、その奥に戸棚が一つ。真ん中にはレオの持ち物が詰まっているのである。ダンボール箱がいくつか積まれている。下手奥が戸口、周囲の壁は黒幕で、部屋全体が客席に向かい、三角形に開かれている。舞台は簡素で、こじんまりとしている。だが、カベに塗られていくペンキ、その完成度と舞台の進展は大きく関連している。ならば、実際に塗ってほしい、と思ってしまう。上を見ると、天蓋であろうか、ブルーをあしらった菱形のものが吊られている。これは、南フランスの空を象徴しているのだろうか、だとすれば、さほど効果はみえない。

レオに、「動」の動きがもつとほ

しい。世の中を諦めてしまった老人が、最後の希望を勝ち得るために心を奮い立たせる動きが、眼にも見せてほしい。幕開きにシャドウボクシングをするレオ、それが目立たない。ボクサーとしての片鱗、ボクサー魂の発露、それが夢でもいい、やはり眼にもみせてほしい。

藤本栄治は、「この作品をこれからも演じ続けてみたい」と言ったと聞く。だから、演技プランとして、『ボクサー魂』を台詞の中に込めようと意図したようである。舞台の最初のたたずまい、台詞を発するまでの動きには、それが少しは感じ取れる。だが、ヨーヨーが登場し、彼とどう関わりあうのか。この老人ホームを脱出するためには、滅多にない、もうないかも知れない、欠かせないチャンスである。衰えた頭で、思案する計算。そして、それを超え、ヨーヨーと、人間個人同士として、気を

許しあうまでになる変化がまだ見えない。

人は、自分を認められたい、という欲望がある。ただの老人から、栄光あるボクサーだったことを認めてくれたヨーヨー。その喜びを押し隠す表情と台詞。まずはそれに「動」がほしい。ここでは、その先を性急に求めすぎたのではないだろうか。ヨーヨー（Wキャスト・仲里玲央）は突っ込みの演技が主体である。彼は劇団では、もう中堅に位置する舞台の場数を踏んでいる。そのためか、演技に安定を求めすぎている。もっと、荒っぽい元気がほしい。舞台全体として、落ち着きがありすぎる。ボクシングの実技指導を入れたにしている、それが生かされていない。もっと、ぎらつくものがほしい。舞台の安定感、その先でいい。大阪新劇フェスティバル・参加。

（9月17日昼・一心寺シアター倶楽）

「六十年目の夏」

——舞台に描かれた世界をみる

ことし2005年の夏は、戦後60年、被爆60年という節目の年に当たる夏でもあった。「戦争」の時代を考えることによって、「戦争」とはどのような状況であったのか、「敗戦」の意味はどのようなものであったのか、そして、戦後が引き継いだ歴史の重み、「平和」の意義を確認することににもなる。演劇の世界でも、さまざまな表現のなかで、「六十年目の夏」が検証された。

◆演劇人の勇氣と姿勢

演劇人の共通する思いのひとつとしてであったのは、「あの戦争でなにがあったのかを語り継ぐこと、事実を事実として真正面から受け止め

る勇氣と姿勢が、次世代に『平和』を手渡せる道なのだと思う。いま。節目の今年、平和の尊さ、命の重さを訴える動きが多くあるでしょう。我々演劇人は、舞台から感動を客席に届けるのが仕事です」（劇団東演・横川功）「community（劇団ATOEEN）」ということばであった。ここには、真摯な思いがこめられていると受け止めることができる。

この夏にみた舞台を整理してみると次のようになった。これはあくまで個人としての観劇できたものであり、上演されたすべてではないことはいうまでもない。

東京ギンガ堂「沈黙の海峡」（品川能正）脚本・演出）、オファイフス・

演劇ライター 鈴木 太郎

サエ「広島島の母たち」（山本真理子）
 原作、露川牙）構成・演出）、トム・プロジェクト「ダモイ」（辺見じゅん）原作、ふたくちつよし）
 作・演出）独歩プロデュース「象」（別役実）作、伊藤勝昭）演出）、伊藤巴子企画「紙屋悦子の青春」（松田正隆）作、松波喬介）演出）、移動演劇桜隊原爆忌の会「朗読 桜隊2005」（台本構成）山口みる）、青年座「明日」（井上光晴）原作、小松幹生）脚色、鈴木完一郎）演出）、木山事務所「壁の中の妖精」（福田善之）作・演出）、燐光群「だるまさんがころんだ」（坂手洋二）作・演出）、東演「朗読劇 月光の夏」（毛利恒行）原作・脚本、鈴木完一

郎(演出)、俳優座「朗読 戦争とは…2005」(内田透(構成・演出)、関西芸術座「少年H」(妹尾河童(原作)、堀江安夫(脚色)、鈴木完一郎(演出)、前進座「今日われ生きてあり」(神坂次郎(原作)、田島栄(脚色)、十島英明(演出)、若宮優子プロデュース「激動」(朱宮理恵(原作)、國井正廣(演出)、文学座「戯曲 赤い月」(なかにし礼(作、鶴山仁(演出)、東京芸術座「地球の上に朝が来る」(島田九輔(脚本、印南貞人(演出))。

ここには、たしかに演劇人がもつ重要な役割である「勇氣と姿勢」がこめられていたことを感じ取れるし、「舞台からの感動」を受け取ることができた。舞台からみえてきたものは、「戦争」という主題に向き合う姿勢の多様さであり、さまざまな特性である。日本の戦時下における青春、特攻隊員たちの悲劇に象徴

される非人間性、東京大空襲や広島・長崎の原爆の惨状、侵略戦争であったからこそ起きた朝鮮半島や旧満州での悲劇やシベリアでの抑留生活、さらに今日につづく地球上の戦争——等々、それは、なによりも真摯に生きようとするものの胸に熱いものを感じさせたのである。

◆現代を生きる人間として

なかでも、注目されたのは「六十年目の夏——長崎、知覧、神戸」という企画である。青年座「明日——一九四五年八月八日・長崎」、東演「朗読劇 月光の夏」、関西芸術座「少年H」の3本が8月15日を中心とした1週間、東京の紀伊国屋ホールで公演したことである。さらに、「シンポジウム「六十年目の夏、今、そして未来…」(15日午後3時から)を開催した。パネラーとして妹背河童(舞台美術家・エッセイスト)、

毛利恒之(作家・脚本家)、日色ともゑ(女優)、郡山総一郎(写真家)の4氏を迎えた。鈴木完一郎(演出家)の司会によるトークは時宜にかなった示唆に富むものであったことも記しておきたい。

さきに引用した横川功はこの企画の制作統括の任にあった。演出はすべて鈴木完一郎(青年座)である。その意欲的な取り組みはなみなみならぬものがあつたし、同時3本を演出するということは、再演であつたにしても、時間的なことや体力的なことを考えても相当な重荷であつたはずであるが、そこまで、彼を行動に奮い立たせた思いものとはいつたいどこにあるのだろうか。けいこ場で取材したときの熱い思いとことばは印象的であつた。

「3年前に『月光の夏』と『少年H』を同時期に演出していたとき、新幹線のなかで思いついた企画」といい、

「明日」も加えれば、原爆、特攻、空襲という三つのテーマになる。このテーマは市井の人間が肌で感じた戦争であつたと思う。戦争というところでもないもの前で人間としての生き方に焦点をあわせたととき、戦争とは生きることを問いかける哲学的なものがあると感じた。現代に生きる人間として、声をあげることが大事であつて、声をあげるにあつては哲学的に生きる根本のところから話をする必要がある。演劇的な切り口で人間が生きているところから戦争を考えたい」と意欲をみせていた(「農民」8月1日の記事による)。

◆ことばと音楽の一体性

ここで、3本の舞台を簡単にふれてみることにする。

「明日」は、井上光晴の原作を小松幹生が脚色した作品。青年座で89年に初演、91年、92年に再演してい

る。原爆が投下された町を取材した作家が焼け跡に白いシャツが干してあるのを見て想を得て、原爆投下の前日の出来事にしほつて書かれたもの。長崎の三浦泰一郎ツィ夫妻(福田信昭・山本与志恵)の次女ヤエ(高



「明日」写真左から 佐藤祐四、井上夏葉、岩崎ひろし、豊田茂、高橋幸子 撮影=眞野芳喜

橋幸子)と中川庄司(豊田茂)の婚礼が三浦家でおこなわれようとしているところからはじまる。一方、姉のツル子(小暮智美)は臨月を迎えて、初めての子の誕生を待っている。まさに市井に生きる人びとの日常生活を描くことよつて、次の瞬間に展開された原爆投下による悲劇の大きさを暗示したのである。三浦家をとりにまく人物として登場した田中耕二、岩崎ひろし、野々村のんたちの好演で興行きのある仕上がりを見せてくれた。ヴィオリン、チェロ、ピアノによる生演奏も効果的であつた。

「月光の夏」は毛利恒之の原作。脚本。佐賀県鳥栖市の小学校にある古いグランドピアノが舞台になつている。そのピアノに忘れがたい思いをもつ吉岡公子は当時の小学校音楽教師であつた。太平洋戦争の末期、音楽学校出身の特攻隊員二人が今生

「激動」



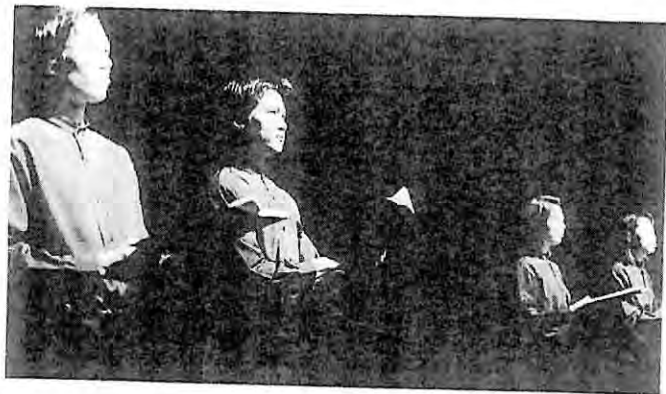
であったという事実を描いた作品である。そのなかで「満州」を時代背景にした2つの舞台が印象的であった。若宮優子プロデュースの「激動」と文学座の「戯曲 赤い月」である。「激動」は作家・朱宮理恵が描い

「戯曲 赤い月」



たフィクションの物語であった。しかし、満州に渡った日本人の生きていく厳しき、人間の尊厳さえも踏みじられていく哀しさを、江口春恵という主役をおして見事に形象化していた。春恵を演じた若宮優子は

生と死という人間の限界に挑みながらも女らしい可憐さを残した演技をみせていた。下北沢の駅前劇場という小さな空間をいかした演出も評価できる。「戯曲 赤い月」は、作家・なかにし礼が母親をモデルにした実話小説が元になっている。それだけに、事実を虚構のなかでいかに事実としてみせてくれるか、という楽しみがあった。舞台は「満州」からの引揚船の船底で始まり、同じ場面で終わる。時代を遡って回想していく仕組みであった。それは「女の一生」を思わせる展開であった。森田波子と勇太郎が結婚して満州に渡り、その地での生き方が鮮烈に描かれていく。平淑恵と石田圭祐が安定した演技力をみせていたが、関東軍の若き秘密諜報員・氷室啓介を演じた長谷川博己の勢いのある熱演に好感をもった。



劇団東演 ピアノソナタ「月光」による朗読劇「月光の夏」
(原作・脚本 毛利恒之、演出 鈴木完一郎)

撮影者 蔵原輝人

の別れにベートーヴェンのピアノソナタ「月光」を弾き、そして出撃していったのである。東演では舞台劇としても長期にわたって上演してきたが、3年前に「朗読劇」として4人構成の舞台につくりあげた。そして、ピアノストにより「月光」の全曲を弾くことで、舞台上に重厚さを持たせている。朗読者の組み合わせもいくつかできている。今回も新鋭中堅、ベテランの3組が登場していた。それぞれに持ち味を発揮していたが、新鋭たち(南保大樹ほか)の直情さに新鮮さを感じた。

「少年H」は妹尾河童の原作、堀江安夫の脚色。3年前に初演、その後も学校公演などで上演を重ね、ついに、東京初進出となった。妹尾肇こと少年H(梶山文哉)は、神戸で洋服仕立ての父・盛夫(門田裕)、熱心なキリスト教徒の母・敏子(鴻池央子)と妹の好子(村嶋由佳子)

の4人家族。そんな家族にも、戦争色が強まり、やがて神戸も空襲され、焼け野原になってしまう。原作は戦後も描かれた大長編であったが、舞台では戦前でまとめられている。初演を大阪でみていたが、そのときは不完全燃焼のような印象をもったが、今回の上演ではクロスの動きやせりふ術の違和感ももつことなく、舞台の熱い思いを受け取ることができた。梶山文哉の演技にも少年のもつ素直さをみせていた。

鈴木完一郎演出に共通していたのは、人間の存在感とことばの意味性であり、音楽との一体感であった。それぞれの作品の主題に即したその演出方法には破綻がなかったと思う。

◆「満州」を描いた2つの力作

もうひとつ視点として注目させられたのは、あの「戦争」が侵略戦争

詩「状況・2005」

時代は変わった
という話があります

状況が変わった
という噂があります

時とともに
思い出が生まれ

時代とともに
記憶がうすれます

人々が変わった
という噂を耳にします

何も変わっちゃいないさ
という吐息がもれてきます

考えあぐねていた ぼくらは
後梅に舌打ちしながら
数年後

平和な墓場の中で
出くわすことのないように
ぼくらは いま

時代をつかっているのかも知れません

このままじゃすまないさ
というつぶやきが聞かれます

手をこまねいていた わたし達が
羞恥心にさいなまれながら
数十年後

虹色の墓場の中で
再会することのないように
わたし達は いま

新しい物語を
準備しているのかも知れません

「懇願」

来客である父親と、対応している男親。
二人の前には、お茶がでていた。

父親 まあ、そういう訳でございますので、あれですね、お互いに子供の親としてですね、理解してやるしかないんじゃないでしょうかね。

男親 わたしは、反対ですね、そんなみつともない、まったく……。

父親 お気持ちには分かりますが、起きたこととは仕方がないんですから、そのところを曲げてですね……。

男親 あなたは、息子さんだから、そんな呑気なことを言っているんですよ。うちは娘ですよ、娘の腹は、日に日に大きくなっていくんですよ。

父親 ですから、お宅の方に「異存がなければ、出来るだけ早くいい日を選んでですね、形だけでも急いで結婚式を」とうして……。

男親 異存がない？ 馬鹿々々しい、お、ありますよ。(「近所の物笑いの種にな

るのは、まだ我慢できるにしても、親戚一同に顔向け出来やしない。第一、「先祖にだって申し開きが立たないじゃありませんかッ。」

父親 そんな、大袈裟な……。

男親 何ですかッ。
父親 いえッ。何で言うんですか、あの、今は昔と違うんですから、好き合っていけば当然アレをする、そうすれば子供も生まれる、自然と言えば自然じゃないんでしょか。芸能界でも大はやりみたいですね。

男親 言っておきますがね、うちは由緒正しい家柄なんだから、河原乞食か役者か知らんけど、そんな者と一緒にされるのは真つ平なんだ。第一そんな稼ぎがあるんですか、あんたこの息子さんに。顔だって、ちんころがクシャミしたような、ブルドックが屁こいだよいうな面アしやがって、まあ……。

父親 黙って聞いておれば、いい気になって、何ですかその言い草はッ。あんたこの娘さんだって、狐か狸だ、それが悪けれりやおかちめんのお多福、ちたアましなところがあるかと思いや、

胸長の超短足、この子にしてこの親あり、鬼瓦潰したような親の面アみて、貧血起こしてでんぐりがえるところだよ……。

男親 何だとッ！……。(と、思わず手が出そうになるのだが、そこは我慢に我慢。でお茶に手を出す。来客にも勧めぬわけにはいかぬ) どうぞ。ハハハ……。

父親 ……。

男親 どうぞ。ハハ……。わたしは、ちょっと気が短いものですから、つい……。

父親 ……。(お茶を呑んだ、一口。と、みるみるうちに、顔が歪んだ、鬼瓦ブルドックである。真つ赤な顔をして、しかし我慢した) に、に、苦いッ……。

男親 いやあ、家内は、お茶を入れるのが好きでね、それがまたうまいんですわ。それだけが取り柄といっちゃなんですが、人間何か取り柄があるもんですわ、ハハ……。

父親 ウウ……。苦い……。いささかオーバーだが、体が硬直したような身振り)

男親 どうしたんですか？
父親 盛られた……、ど、ど、毒を……。
男親 毒……？

父親 わ、わ、わたしはね……、若い二人が二途になって、お、親から見れば、いい、幾らか物足りない面はあるにしても、真面目に将来を考えて一緒にいたいって言うんなら、少々のことは目ををつむって、辛抱しなければならんだらうと、お、お、思ったから、こ、こ、こうして……。それを、あなたは、お茶に毒まで入れて……。わ、わたしを……。

男親 何を阿呆なことを言ってるんですかッ、人聞きの悪い。いくら何だって許しませんよッ……。 (お茶を一口) ウウ……。 (顔が赤くなった、歪んだ、曲がった、振れた。ブルドックである) に、に、に、……。 うまいッ。フウッ……。

父親 一体、何を入れてくれたんですか？
男親 オーイ！ オーイ！ (妻は出掛け
ており、出て来ない)

父親 奥さんは、わたしら二人の断末魔を見るにしのびなくて、逃げて行ったに違いないんだ……。

男親 黙りなさいッ。わたしと妻の三十年はね、言っちゃ悪いが、人も羨むおしどりと夫婦陰になり日なたになり夫婦

婦随、今だつてひとつの布団になかよく睦まじく、妻が風邪をひけばわたしも一積、わたしが下痢すれば妻も下痢……。

父親 止めなさいよ、誰が聴いてるんですか、そんな薄汚いのろけを、阿呆なさい。傷害致死未遂ですからね、これは。

男親 あんたこの息子は、婦女暴行罪分かっているんですか。家内はね、あんたに目を覚まして欲しい、て思ったからなんですよ。

父親 何ですって……。
男親 祭日になったら、隣近所が「日の丸」をたてるという申し合わせをしたのに、あんたは、屁理屈こねて、その申し合わせを無視しているという。どういう訳です？

父親 関係がないでしょう。
男親 人並み世間並みというのが、あるじゃないですか。人助け世助けというのなら、いくら突飛でもようござんしょう。でもね、あなたと此の先付き合つていくとすりゃ、ほどほどそこそこつて具合にいきたいと思つてからですよ。

父親 いまはグローバルな時代ですよ、世

界がひとつになろう、なんて時代に国旗だ「日の丸」だ、なんて尻の穴が小さ過ぎる、肝っ玉が縮こまつてる、て思わないんですか。

男親 わたしらはね、大きな争いもなく、少しぐらいの波風がたつことがあったにしても、平穏な日々を送ればいいんです。少々の手落ちがあつても、その保障をしてやるのが、親の務めつてもんでしようが。

父親 だから、地球規模で、インターナショナルな視点で、世の中見ておかないと……。世界は一寸先が闇ですよ。(聞かれないように……) 何言つてんだ、俺は……。

男親 (聞かれないように……) 自治会長
のメンツ丸潰れじゃないか、糞つたれ
め……。

父親 何です？
男親 いや、あれだ……。要するに、娘は
やれん、ということですか。お引き取
り願ひましょう。

父親 え……？
男親 「日の丸」も掲げられんような家
には、娘を嫁がせるわけにはいかん、と

いっことです。

父親 そんな馬鹿な……。お腹の子はどうするんです？

男親 あんたの知つたことじゃないッ。う

……。 (思わず、お茶を一口……、歪んだ)

父親 そんな意固地にならないでさ……。

あんなの親父さんだつて、「日の丸」を背負つて戦死したんでしよう。

男親 帰つてもらいましようか。

電話が鳴った。男親が受話器を取り、短いやり取りをして切った。

男親 駆落ち……。南の国。

父親 エッ……？

男親 みたいなもんだな……。二人だけで結婚式をやる、なんて……。しかも俺の親父の戦死した島で……。あんなの息子は婦女誘拐罪だ……。

父親 誰からです？

男親 家内からですよ。俺に内緒にしてやがった……。俺は離婚する……。

父親 え……？

男親 この毒入りのお茶、俺にも飲ませるつもり……。だったのか、畜生め……。

父親 ハハ……。止めなさいよ、そんなそのくらのことで、軽はずみな、ハハ……。

男親 何がおかしいッ、笑うなッ、あんたは誘拐犯の親御なんだよ……。

二人は苦虫を噛むようにして、お茶を飲んでた。
音楽があり、よく聴くと「海ゆかば」に聞こえていた。

「署名」

署名簿を持った神崎に、幸子が応対していた。後に幸子の息子弘三が現れる。

神崎 (携帯電話で話して……) ハイ、え？ どこにいる？ て、署名集めだよ、方々。何もやっちゃいけないよ、……当たり前じゃないか、分かつたよ。(電話を終え……) えーと……、何の話でし

たかね……。あ、そうだ、だから、憲法改正の要請を、地方議会から議決し、徐々に積み上げていって、国会のレバールまでもつていくというのが、やはり自然と言いますか、国民の総意や熱意の表れ、ということになるじゃないですか。何の役にもたたないように見えるけど、実は、土台固めと言いますか、基礎固めと言いますが、署名というものは力強い拠り所になるんですよ。できたら、息子さんにも。

幸子 弘三はちよつとまで……。誰に頼まれたんですか。

神崎 誰に……。お国の為ですよ。

幸子 お国……。て、わたし達のことでしょう？

神崎 わたしらの暮らしが分相応にやれるようになったのは、やはり国の力があつてのことですからね。

幸子 いまの儘じゃ、不都合なんですか。

神崎 それが、どうも国際的にみて具合が悪い、肩身が狭い、発言力が弱い、事あるごとに引け目を感じているから、じゃないんですかね。

幸子 誰がです？

神崎 そりや、総理大臣とか外務大臣、防衛庁長官とか、でしょうな。

幸子 あなた、いつから、そんな偉い人達の腰巾着になったんですか。

神崎 幸子さん、わたしはね、ひたすら国のためを思っています、邪しな考えはありません。誤解しないで下さい。

幸子 市会議員に取り入って、娘さんの就職、うまいこと世話してもらいたいからじゃないんですか。

神崎 幸子さん……。言っていることと悪いことがありますよ。わたしは、そんな下心はありません。

幸子 新しくできた健康ランドに、わたしをしつこく誘っているのは、あなたに下心があるからでしょう。

神崎 そんな……、それとこれとは……、一緒にしないで下さいよ、人間性の悪い。あなたは、ご主人を亡くして一人で息子さんを育て上げた、うまい具合に就職もできた、あなたの粉砕身振りやご苦労に、ほとほと感服しています。その労をねぎらい、その苦労話のひとつも聞いてあげたい、できることなら、その器量にあやかりたい、

それだけです。

幸子 それなら、別に健康ランドに一泊しなくても、お食事に誘ってくれるだけでもいいんじゃないですか。

神崎 そりや、え、いいですよ。だけど、あれじゃいいですか、つもの話つてもんは、人目をばばかり、夜のとばりに包まれて、指しつ指されつっぱいやりながら、てことがあつてこそ、心が癒される、てもんじゃないですか。

幸子 わたし、あなたに癒して欲しい、なんて思っていないもの。

神崎 あのですね……。

幸子 あなたに労をねぎらつてもらおう理由がないもん。

神崎 善意ですよ、人間には、見返りなんか期待しないで、その人に尽くしたいって、無償の気持ちで、時には沸いてくるものなんです。

幸子 嘘でしょう。あなたは、わたしと……、睦み合いたい、て思ってるんだよね。癒されたいのは、あなた。顔に書いてあるもの。

神崎 そんな、あられないこと……、言わないで下さい。はつきり言わせても

らいますけど、あなたは年を重ねながら、ますます奇麗になって……、あんな大きな息子さんがいるとは、とても思えない、しつとりとした色気があつて……。

幸子 ……。そんな……。

神崎 こほれそうな色香が、男を虜にしてしまつんです……。

幸子 いやだあ……、止めて下さい……。

神崎 あなたはそれに気付いていない、だから余計に魅力的なんです。

幸子 (聞こえないように……) 変だわ、わたし……、どきどきしてる……。

神崎 いい年して、あなたに誘う自分が恥ずかしい、とは思いますが、だけど……。

幸子 そ、そんなことはありませんよ……。

神崎 え……。

幸子 いえッ、そうですよ、恥ずかしい、と思いません、わたしは……。

神崎 は……。

幸子 どうぞ、どうぞ続けて下さい……。

神崎 どうぞ……？ あ、何の話だったかな……。

幸子 ……。

神崎 ……。

幸子 ……。

神崎 ……。

幸子 先程の電話、奥さんから……。

神崎 えッ……？ え、まあ……、薄々感づいているのかも知れない……。

幸子 何を……、何ていうか……、ぼくとあなたの関係……。

幸子 えッ……、何も関係ないじゃないですかッ。

神崎 そう、関係があれば……、ぼくだって、それなりに……。いえッ、どうも、こうゆうことしてるのが、お先様担いで分不相応にびよんびよん飛び跳ねてるように見えるらしくて、女房は毛嫌いしてらんです。ぼくの不徳の致す処ではあるんですが……、ぼくをそばにも寄せ付けないんです。

幸子 それで、どうして欲しいの……？

神崎 え……。あ、ですから、その市議会で憲法改正要請の決議をさせるための署名を……、これ言いましたね。

幸子の息子の弘三が、署名簿を持って現われた。

神崎 ……。やあ……。

幸子 ……。また、居たの……？

弘三 うん。こんにちは。

神崎 (これまでのこと、聞かれたかも知れない、と誤解した) いやあ……、ぼくは、決してあれですよ、お母さんを……、いやあ、敬服しますから、決してそんな邪しな、淫らな……、気持ちで……、じゃありませんよ……。

弘三 は……？

神崎 いやあ、ですから……、無心の気持ちで、色々お誘いしてるんですが、時々誤解をされてるようで、あれですね……。

弘三 何をおっしゃりたいんですか。

神崎 ですから、何と申しますか……、謹厳実直な方でして……。

弘三 母は出無精なもんですから、どんな誘い出して下さい。ぼくも一応社会人になりましたし、少し自由にさせてあげたいので。

幸子 ……。余計なこと言わないの。神崎 ……、そうですね、それは嬉しいですね、有り難いですな……。

幸子 ……。また、居たの……？

弘三 うん。こんにちは。

神崎 (これまでのこと、聞かれたかも知れない、と誤解した) いやあ……、ぼくは、決してあれですよ、お母さんを……、いやあ、敬服しますから、決してそんな邪しな、淫らな……、気持ちで……、じゃありませんよ……。

弘三 は……？

神崎 いやあ、ですから……、無心の気持ちで、色々お誘いしてるんですが、時々誤解をされてるようで、あれですね……。

弘三 何をおっしゃりたいんですか。

神崎 ですから、何と申しますか……、謹厳実直な方でして……。

弘三 母は出無精なもんですから、どんな誘い出して下さい。ぼくも一応社会人になりましたし、少し自由にさせてあげたいので。

幸子 ……。余計なこと言わないの。神崎 ……、そうですね、それは嬉しいですね、有り難いですな……。

いで、生きてきたのかな、なんて思いま
すよ。今度オープンした健康ランドに
でも行って、夜のはりに包まれて、いっ
ぱいやりながら。いいと思いませんか、
気持ちも癒されるでしょうし……。ど
うですかね？

神崎 ほくは、憲法改正反対に反対なんだ
よ。

弘三 え……。改悪に賛成なんですか。
神崎 何故、君と健康ランドに行かなきゃ
ならんのだいッ。

弘三 何を、怒ってるんですか。

神崎 ほくは、君に癒して欲しい、なんて
思っていないもの。

弘三 じっくり議論するには、自分にも惑
わされなくて、雑念を排して、と思う
からですよ。実は……。ほく、彼女に
ふられた処で、ちよつと落ち込んでい
るからかな……。

神崎 癒されたいのは、君の方じゃないか。
顔に書いてあるわ。

弘三 ふざけないで下さい。国際協調だ
国際貢献だなんて、自衛隊が出掛けな
くても、他にやること、いっぱいあるじゃ
ないですか。

神崎 いまの憲法と現実のおかれた状況
は、ねじくれ過ぎてるんだよ。それを
正すのは、今がちょうどいい機会なん
だよ。

弘三 改悪して、自衛隊の海外派兵の歯止
めがかからなくなつたら、アジアの人
達はどう考えると思えますか。これか
らは、アジアの連中と仲良くやるしか
ないじゃありませんか。

神崎 ODAで、彼らにくら援助してき
たと思う。丁寧に説明していけば、了
解してくれるはずだよ。辛抱して説得
していけば、必ず分かってくれるよ。

弘三 本当は、憲法なんて、無くなりやい
いんですよ。

神崎 ……。

弘三 国境が無くなれば、憲法なんて要ら
ないんだから。

神崎 何を言ってるんだッ、現実を無視す
るのは、君ら若者の特権かも知れんが、
度を越せば、単なる阿呆だ。

弘三 憲法9条は、世界の未来をうたつて
いますよ。それを理解しようとしな
いのは、単なる石頭です。

神崎 何だと……。まあ、いい。どつち

が勝つかだ……。ほくが、今日来たのは、
憲法改正の署名をしてもらう為なんだ
よ。

弘三 えッ……？

神崎 フフ……。それなりの信念があつて
のことなんだよ。

弘三 なーんだ、お袋を口説きに来たん
じゃなかったのか……。

神崎 何だつて……？

弘三 お袋、そんなに馬鹿じゃないけどね
……。

神崎の携帯電話の、メール着信音がなつ
た。

神崎 (読んだ……) 畜生……。出ていっ
た……。

弘三 ……。

神崎 こんなこと(署名) やつてる場合か
……。

弘三 逃げられた……。んだ、奥さんに
……。ハハ……。ハハ……。

神崎 何かおかしいッ、人の不幸を笑う
なッ……。

お茶を持って来た幸子は、盆からお茶
を落としそうになった。
音楽があり、よく聴くと「軍艦マーチ」
に聞こえていた。

「離別」

団地の、小さなダイニングルーム。で
はあるが、場所は舞台の進行にしたがつ
て自由になる。耕作と千秋。千秋は
お手玉をしていた。
靴音がした。彼らの部屋の前で立ち止
まった。暫くして去って行った。

千秋 ……、誰かしら……。

耕作 ……、うん、間違えたのかな

千秋 これ(お手玉)、授業で使つてみよ

うと思つてるの。これ、結構難しいわね。
耕作 冗談だろう……。

千秋 あなたは冗談で話していたの？

耕作 何を……。

千秋 「あの歌」を歌うようになったら、
わたし達は別れる時……。

耕作 ……。

千秋 あなたとわたしが結ばれた時、あな
たが言い出したわ。わたしは冗談みた
いに聞いていた、屈託がなかった。

耕作 そうかも知れない……。

千秋 わたし、やつぱり反射神経にぶい
かな……。

耕作 まさか、とは思つていたんだらうな
……。

千秋 あなたが、あの女性と親しくしてい
たのも、冗談だと思つていた……。二
人つきりで美術館に行つたり旅行した
り……。あれ、本気だったのよね。

耕作 それは、すんだ話じゃないか……。
結婚した当初、ほくの家の墓には、絶
対入らない、なんて……。君はほくの
家族を快く思つていなかった。でも今
はそんなこと考えもしてなかった風に、
ほくの両親と仲睦まじくやつている。

千秋 ……。

耕作 行く末どうするか、ほくは真面目に
考えていた。

千秋 そんなこと、言つてないと思うけど
……。

耕作 君は、教師という職業が、自分には
向いてなかったと言つて……。君の友
人達からも不信感をもたれていた。ほ
くは、ほくの友人に、君の適当な仕事
の紹介を、あちこち頼んで……。でも
今は、ほくよりむしろ積極的に旺盛だ。
ほくは悩んだ……。

千秋 それは……。わたしだつて……。わ
たしが、あの男性とお芝居観にいつた
りお食事したりのお愛ないお付き合い。
見識や見聞を広めるためにあつていい
こと、あなたの懐の深さ、本物だと思つ
ていた……。

耕作 蒸し返してるね……。

千秋 わたしは、いつも取り違えてばかり
いたような気がする……。

耕作 (耕作は、千秋を抱き締めようとし
て、躊躇した。が抱き締めた……。) 仕
様がないう、適応能力がお互い共通し
てるなんて、あり得ないもの……。

千秋 (……が、応じなかった) 離して。
そんな、つまらない言い方しないで
……。あなた、あの人に唆されたの？

耕作 冗談じゃないよッ。

耕作が反対方向を向くと、そこに園田教育委員が居た。
つまり耕作の数週間前に戻る。

園田 お前は、「あの歌」を唄わなくていい。起立することもない。

耕作 何が言いたいんだ。

園田 いや、言いくるめるつもりじゃないんだが。教育委員である俺が言うのは、俺の命取りになる、なんてことくらいは承知の上でだが……。時代になびく奴が多過ぎる、ことなかれ主義が多過ぎるんだ。教育界に緊張感がなくなつたらどうする、ものごとを深く考える教師がいなくなつたらどうする。今回は、起立しない者は処分するなんて、いきまいてるが、そんなことはさせやしないよ。

耕作 大層なこと言ってるな……。お前とソリの合わない教育委員が、議員連中を取り込んで、お前を目の敵にしてるって噂、俺は耳にしたことがある。

園田 そうか、知っていたのか……。あ

いつらの言いなりにさせていたら、どうなる。俺達は飾り物になつてしまふ。あいつらの、やることなすこと、徹底的にたたき潰さなければならんのだよ。

耕作 俺は、くだらない政治家の争いの玩具にはなりたくない。

園田 どうするんだ？

耕作 考えるさ、自分の態度は。

園田 だから忠告してるんだよ、友情だよ。

耕作 情けないな、「あの歌」が、どんな運命を経て今にあるか……。

園田 そんな飯鬼っぽいことを……。いまどき、そんな几帳面に行動してる奴なんて居やあしねえんだから。情けないこと言うなよ。

耕作 俺達には、目の前の生活も将来の生き方にも、かかわつてるんだよ。

園田 それも大事だろうが、その場をどう

やつてしのでいくか、建前はともかく、みんなその場しのぎで一生懸命じゃないのか。

耕作 忠告は承つておくよ。

園田 うん、間違えるなよ。

耕作 折角だけど、お前のその場しのぎのお役には、たてないかも知れない。

園田 何だと……。

耕作が振り返り、元の場 即ち耕作と千秋の場に戻つた。

千秋 あなたは、あの方の忠告を、裏切つたつてわけ？

耕作 あんな忠告に、我慢ができると思つたか。

千秋 わたしは、わたしの考えで「あの歌」を唄わなかった、だから起立もしなかった。そして、そのことを出席者にも訴えた。あなたは、あの方を裏切るために起立して「あの歌」を唄つた……。だつたら、あなたの考えは？

耕作 押し付けがましい、あいつはいつだつてそうなんだ……。

千秋 取り返しがつくと思つてるの？

耕作 「あの歌」を唄うとか唄わないとか、たいした問題じゃない。

千秋 男の友情つて、お互いを少しづつおとしめていくものなの？

耕作 海でも見に行きたいな……。灯台のある岬がいいな……。

千秋 「あの歌」を唄うことを強制される

のが、どうしてたいした問題じゃないの？

耕作 人間つて、何かつまらないなあ、て思わないか。こまごましたこと言い争つて、その人の人生にとつて砂粒ほどのことに角をたてて……。いつまでもたつても殺し合いを止めないで……。

千秋 そうね、「あの歌」の過去の忌まわしさを洗い落とせと思つている、その記憶をながしろうにしようとしてる、その疎ましさに反対したい、自由でいたい、そんな眼差しで人生を送りたい……。素晴らしいものもつている、とは思わない？

耕作 どうしたんだい？

千秋 別れましょう、わたし達。

耕作 ……。

千秋 あなたは、何ひとつ答えてくれなかつたわ……。

耕作 ……。

千秋 いいのよ、それは。わたしが考えていけばいいことだから。

耕作 事もなげに言うんだね……。

千秋 「免なさい、離婚届けの用紙、貰つてきてあるの。」

耕作 え……？

千秋 お互いを、あげつらうことだけは止めたいの。

耕作 折り合いをつけながらやってきたんだから、これからだつて、折り合つていけるぞ。

千秋 「あの歌」については、折り合いがつけられないの。

耕作 どうして？

千秋 大勢の人達が死んでいったから。そりゃ、わたしの父もだけど……。

ドアが、何度かノックされた。

耕作 どなたですか。

声 警察の者です。お忙しい処すみません。

耕作 ……。

千秋 ……。

耕作が、対応のために席を立つた。そして引き返して来た。

耕作 君に、用事だつて……。

千秋 何？……。

耕作 「あの歌」を唄うのを、卒業式で妨

害した、その事情を聴きたいつて。

千秋 妨害じゃないわ。「あの歌」は唄つても唄わなくても、その人の自由、それを知らせるためによ……。

声 もしもし、もしもし、すみません……。

千秋は、ドアに向けて、お手を投げつけていた。

音楽があり、よく聴くと「君が代」に聞こえてきた。

芳地 隆介氏の住所

〒168-0063

東京都杉並区和泉1-34-23 3305

TEL&FAX

03-33325127 82

憲法9条改悪を許すな「戦後60年」

憲法9条を守る運動と直結

証言による朗読劇

『ハテルマ・ハテルマ』の八重山公演報告

省 栗原

個人会員の活動報告で恐縮。8月19日と20日、私の作・演出「証言による朗読劇『ハテルマ・ハテルマ』」を現地沖縄県八重山郡竹富町波照間島と西表島で公演した。

この作品は昨年暮、和歌山市内公演を皮切りに、すでに4回（観客1200人）公演した。波照間島公演は総勢22人（ハテルマ・ハテルマを読む会）。経費は計350万円を越えたが、カンパ60万円以外すべて自費だった。

「読む会」のメンバーは、劇団活動をやっている人もいるが、学校の先生、主婦、役場の職員、僧侶、フリーター、町会議員、歌手などの寄り合い所帯で、ただ朗読が好きで集った、要するにごく普通のおじさん、おばさんたちだ。それが、あの美しい八重山諸島で60年前に起こった「もう一つの沖縄戦（石原昌家沖縄国際大学教授）」「戦争マラリア事件」を描いた、重い、暗い内容の作品をどうして身銭を切ってまで沖縄公演に行き、どうして『ハテルマ・ハテルマ』をできる限り多くの人に観てもらいたいと願っているのか？ 私はそのことをお伝えしたいが、これは情報BOX報告であり、2点だけに止める。

(1) 波照間島の人口は現在550人である。60年前はその3倍だったが、戦争マラリアで552人（現在の島民総数に当たる人たち）が死んだ。

17人家族で16人が死に1人だけ生きのこった大泊ミツフさんは今年83歳になる。ミツフさんと同じようにマラリアで一家全滅したり1人か2人だけ生きのこった家が全島で250家族中33家族もある。1日に2人死んだ家も珍しくない。

死者を葬る場所も、葬りに行く人もなかった。波照間は「南の果のウルマ（珊瑚礁）の島」という意味で、20cmも掘ると固い珊瑚の岩にぶつかり土葬できない。やむなく海岸の砂が吹きたまった浜に死体をかきつけて運んだ。だ

が全島民罹病という状態だから、高熱が治った瞬間を利用して、病人が死者を担い、1kmから2km近い坂道を昭和20年8月、9月、10月…の炎天下黙々と運んだ。死者を葬りに行った人が死者を運んだばかりのモッココの上で息絶え、周りの病人がその死体を再び浜に運んで埋めた。この世の地獄だった。

その地獄から生還した人たちと、旧盆であの世から戻った550人の死者たちの霊と、島の小中学生やそんな歴史があったことすら知らない若者たちが見つめるなかでの公演だった。波照間中学校体育館は約250人の観客が、じつと唇を噛みしめ、食い入るように1時間40分の舞台を凝視しつづけた。それは、観る。というより60年前の地獄に引き戻され、必死に耐えている人たちだった。ある演者は、目の前で大泊ミツフさん

がまじろぎもせず、涙と流れる涙を折ふしぎゅうつとぬぐい、舞台をにらむように観ている視線に耐え切れず、絶句しそうになる自分と必死に闘っていた。

私は、かねて「戦争を語り継ぐ」ことはコンパッション(Compassion 共苦)ですと言いつつ続けた。作中の死者と演者が苦しみをともにし、観客も演者を通じ苦しみに身を刺される。私自身、こんなやり切れない公演はこれまで知らない。

終わって数日後、ミツフさんから電話があった。「私のはあの舞台をみて、胸のつかえがすーっととれました。もう何も言うことないさア。あうりがとう」私は不覚にも返事の言葉がなかった。「読む会」のみんなと和歌山へ戻って打ち上げをやったが、公演の熱い衝撃から当分逃れられそうもない様子だった。

(2) もう一点。今年私に、各地の「9条の会」や平和学習会から「戦争マラリア事件」について話をしに来いと言ってくるところが増えた。

来月も「9条の会結成総会」に行く予定だ。肉弾戦や空襲ではなく、マラリアという予想もしなかった病気で、八重山では4千人近い島民が死んだ。老人、主婦、子どもたちそして牛や馬まで…それが戦争である。

劇団銅鑼 記念企画

ハンナのかばん(おはなし会) — 悲しみを希望に変えて—

7月10日(午後2時)・銅鑼アトリエで。おはなしは、石岡史子さん(NPO法人ヒロコースト教育資料センター代表) 小学生以上の子どもを対象に家族で参加。70人。

「これは実際に起こったことである。だから再び起こりうることである。これが私が言わなければならないことの核心である」

ベルリンに7月に開館したユダヤ人ホロコースト資料館の入口に掲げられた詩人の言葉である。過去の侵略戦争は今日に直結し、未来につながっている。当分死ねない、と思う。

(2004.9.2)

秋田県・鹿角市

（高木豊平さん 個人読者）
「九条の会」を結成。「演劇を楽しむ会」のメンバーで戦後体験の文章を朗読。

（名古屋）「劇団名芸」

★7月31日、稽古場周辺の方々とともに、平和を語る小集会。その場で「平針一丁目9条の会」を立ち上

げました。
★8月7日、「グローバル・ピース・コンサート」で、400人のお客さんに劇団員中村透子（広島出身）の「生ましめんかな」他の詩朗読を聞いてもらいました。

★10月30日、被爆・戦後60年企画「ピースワールド60・あいち」を企画制作中、地元合唱団や舞踊家と公募参加朗読者などにより、「いのちをかくて」（構成／栗木英章、演出／久保田明・前川達次郎）を上演。（会場・名古屋市公会堂大ホール他。メイン企画として、浅井基文氏（広島平和研究所所長）と斉藤とも子さん（女優・社会福祉士）のピーストークもあり）

★憲法九条を守ろう

05県民のつどい
11月3日 名古屋市公会堂大ホール
基調講演／奥平康弘氏（「九条の会」呼びかけ人）

語り継ぐ つて…

青年劇場 福原美佳

「青年劇場の俳優たちによる朗読 平和へのメッセージ」というタイトルではじめた劇団の有志による朗読会、3年目となる今年もたくさんの方の力を借りて上演することができました。

戦争体験者による「語り継ぐ」運動も年々生存者が少なくなり、「あなたたちお願いな」と、その1人からほんと肩を叩かれた言い出しっぺさんの声かけではじまったこの取り組み、毎年、語り継ぐとはなにかを自問しながら挑んでいます。

劇団の大先輩であり戦争体験者でもある西沢由郎さんに上演指導と全体の構成をお願いし、出演者が10分ほどの作品をそれぞれ朗読します。西沢方式は本を持たず動き



をつけながら語る朗読劇…つまり覚えます。旅公演やら劇団の仕事やら、バイト、子育て、それぞれ事情の違うメンバーがその合間をぬって稽古します。チラシ、チケット、台本作り、稽古場の確保まで全部自分たちでやるので結構たいへんです。でも、だれよりたいへんなのが指導の西沢さん、ご自分の旅の合間の帰京中に10人ほどの出演者の稽

古をみなければならないのですから。

最初の年、私はいきなりガツンと頭を殴られました。私が出たことになった沖繩戦の体験記の作者から著作権の許可をとろうとしたところ「私の話は書いてあるものがすべて、別の人の解釈で読んだり演じたりしてほしくない」と断わられてしまったのです。ショックでした。薄っぺらな

使命感に燃えていた私、語り継ぐことの責任の重さを教えられた出来事です。

戦後60年の今年、郵政騒ぎの総選挙が終わり、この選ばれた人たちが日本の行く末が決まる改憲論議がされると思うとぞっとします。私たちにできること、「微力だけれど、無力じゃない」、この思いで来年も語り継ぐという表現に挑みたいと思っています。

西会議ゼミナール

恒例の「熱闘10分間芝居」は

「二〇〇五年—憲法九条を守ろう」を熱演!

とき・8月27日(28日) ところ・神戸タワーサイドホテル

今年の「西会議ゼミナール」は、戦後60年にちなんで、本誌118号掲載の「二〇〇五年—憲法九条を守ろう」を上演。(詳細は、別項西会議総会・ゼミナール報告)

(東会議総会報告)

今日の危機の時代にこそ 地域の人々と固く結びついた演劇を

山形市蔵王温泉・8月20日(21日) 47人出席。

20日午後3時開始。開会のあいさつを兼ねて、こばやしひろし議長から、問題提起I「どこへ行けば、私たち」として、「……私たちはほとんどん方向を失いつつあります。日本の資本主義もグローバル化できる企業を除き方向が見えません。そこに生きる若者に私たちは何を訴えたいのか、今こそともに考えてもらいたい、と思います。……」と訴えていました。

次に、問題提起II「各劇団の活動報告のまとめ」を中野健議長から報告された。

そして、城谷護事務所長から、①魅力ある創造を、②観客と劇団員を増やすために、

③平和憲法を守り抜く活動

を、④地域の人々と結びついた企画や上演を、⑤自治体への働きかけを、⑥松山での全日本演劇フェスの成功を、⑦「演劇会議誌の充実と普及を、⑧韓国・馬山との交流、⑨NADAとの交流を、⑩会計報告と予算、⑪役員改選、の提案があり、討論した。(境野)

興味をひかれた「たけぶえ」報告

私は、今回初めて全り演劇会議の総会に参加させていただきました。そのなかで、とくに印象に残った意見について書かせていただきます。

今回の総会では、もちろん戦争責任や9条の問題、アジアのなかでの日本の存在や交

流などについて印象的な話し合いがありました。しかし私は「地域に根ざした演劇活動」という問題意識に強く興味を惹かれました。

劇団たけぶえの柴野氏の発言より

——高度成長期には、娯楽が少なく、地元の劇団が東京などの人気作品を持ってきて上演することに意義があった。しかし現在は東京に芝居を見に行くことも容易になり、また地方公演の機会も以前と比べ多くなっている。そのようななか、東京などの人気劇団の作品をやる意味は薄れ、無くなってきたのではないか。

では、地元劇団の意義は何か? 一つには、地域に結びついた作品をやることである。共感してくれる観客も得やすく、集客も手売り以外に頼ることができる。しかし、そのようないわゆる「いいお

客さん」に甘えていては劇団の発展は見込めない。

方言がなくなりつつある今、芝居は「民謡」のようにどこに行っても自分の土地を表現できるような立場を守る必要があるのではないか?

私の私見も入っているかもしれませんが、以上のような発言であったと思います。それを聞いて私は、地域の劇団は全国一律の人気商品売る、いわば「コンビニ」ではなく、見た目は少し悪くても地の物を売る「八百屋さん」であるべきなのだ、また、各ブロックは商店街のような協力関係なのだと感じました。

もちろん、古い取り組みを守るだけでは劇団としても地域としても発展を望むことは難しい、それは各劇団の共通意識であると思います。軒並み減少している観客と団員をみればその切実さは明らかで

す。しかし発言のなかにもあったように、演劇に対する興味というのには潜在的には大きいと私も実感しています。それを掘り起こすことができるかどうか、その試金石として松山で開催される全リ演フェスティバルに注目しま

(西会議総会報告)

コンパクトで質の高い総会

8月26日・27日、西会議は神戸で総会を開催した。一口で言えば、今回の総会はコンパクトで質の高い総会であった。四国と中国地区からの参加が少なかったのは残念であったが……。

今回の総会の充実の原因は、各劇団の報告は「劇団報告」(ほとんどすべての劇団が提出した)を読んでもらうことです。問題提起を特色のある4つの報告に時間を

す。身内だけのお祭りにならない、地元の人だれでも立ち寄りたくなるものになるかどうか、例えば路上パフォーマンスなど劇場に入る前から演劇を感じられるものを期待したいです。

(劇団名芸 佐藤智洋)

とり、そのなかで提起された問題を中心に討議を展開したからだろう。

その1
[関西諸劇団の舞台]

藤沢議長が精力的に各劇団公演を観劇してまわったなかから10本くらいの芝居について報告した。

その核になったのは、演技の質についての問題であった。ナチュラリズムと表現行

為の関係について鋭い提起がなされた。

その2 「第2回八雲国際演劇祭のこと」

園山土筆の国際演劇祭(2004年11月3〜7日開催)の報告である。

劇団あしぶえ、八雲村の行政、地域住民そしてボランティアスタッフを中心に、さまざまな文化と歴史の違いのある世界の劇団とティスカッションを重ね、オーストラリア、リトアニア、スペインなど5劇団が参加し、ベルギーなどの4劇団が特別参加した。その質の高さも評価すべきだが、ボランティアの数も99年276人、01年314人、04年609人と積みあげていつている。彼女の「観客をどうつくるか?」などアートマネージメントの報告など一同瞠目して聞いた。

その3 「父と暮せば」の上演報告」

これは一人の演劇人が自分の夢の上演に立ち向かった記録である。その人の名は木田昌秀、高校時代、役者をしてきた彼は読売テレビに入社、主として美術部で仕事をしていたので、所属劇団息吹では美術や演出を担当してきた。その彼が定年後「もう一度役者をやりたい」と思った。そのことを劇団大阪の女優、岡部紀子に話すともやりたいたいということになった。

それから1年半、2人は上演のめどもなく月1回勉強会を重ねた。そして劇団未来の森本景文に演出を依頼した。森本はその情熱とエネルギーに打たれた。読売テレビの美術部OBを中心に43人ものスタッフボランティアが参加した。当然、いい舞台上がった。演出森本の報告である。

その4 「教育現場から見た日本の今と私」

現役の中学の英語の教師で、毎年新しい作品を書き続ける楠本幸男の報告である。教育の現場は管理体制の強化と、90年前後に生まれた中学生たちの、未来への夢の喪失と閉塞の時代が生々しく報告された。

以上の報告を軸にして、「行政へ提案する地域劇団へ」観客を参加者にしよう」「インターネット社会への対応」それぞれ違う人間が十分に話し合っ、次のステップへ踏み出す劇団運営」などが話し合われた。役員については、次期も継続を決定。

来年の全日本演劇フェスティバルは松山開催なので、西会議も地元として積極的に参加しようと話合っ総会を終わった。(文責 猿渡公一)

新会員紹介

2005年9月、お2人の個人会員が全リ演に入会されました。(敬称略)

●秋山昇

〒321-11500

栃木県上都賀郡足尾町神子内

1861-1

TEL 0288-93-3909

●新田満

〒029-15512

岩手県和賀郡西和賀町川尻

40-157-7

TEL 0197-82-3040

これにより、全リ演の会員は次のようになります。

団体会員

東会議 35集団

西会議 25集団

合計60集団

個人会員

東会議 10人

西会議 11人

合計21人

劇団山形創立40周年

記念パーティーに70人

山形市を中心に活動しているアマチュア演劇集団の「劇団山形」(松井光義代表・25人)が6月25日、山形市のホテルメトロポリタン山形で創立40周年記念パーティーを開きました。

劇団創立は1965年。

翌年、旗揚げの「檻樓の歌」

公演を行い、これまで通算

68回の公演を重ねていま

す。この間、東日本リアリ

ズム演劇会議への加盟、病

院看護婦の労働条件改善闘

争を描いた「白衣の告発」

公演で観客2100人動

員、市内東青田に独自の稽

古場建設、「吹雪」公演で

県民芸術祭優秀賞受賞、去

年11月の「想い出のサンフ

ランシスコ」公演で県民芸

術祭準大賞受賞に輝いてい

ます。

団員やOB、友誼団体代

表など約70人が参加して開

かれたパーティーで松井代

表は「演進有志が集まり、働

く者の生活のなかから明る

い未来を」と「三本柱の理

念」で劇団を立ち上げ、今

日まで多くの観客に励ま

れて舞台づくりを続けてき

た」と感慨深く語り、今後

の抱負をのべました。

城谷護全リ演事務局長や

田中哲県芸文会議前会長の

祝辞のあと、劇団創設メン

バーの阿部秀而・山形演劇

鑑賞会会長の発声で全員乾

盃。「やまがたを読む」と

題して松坂俊夫著「やまが

た 文学のある風景」か

ら6人の団員が朗読。来賓

などのスピーチが続きまし

た。

(だいこん座・高橋)



2005年 全り演 関東ブロック サマーセミナー

関東ブロック・夏セミナー 井上ひさしコントを 35人が熱演

7月30～31日にかけて、高尾の森・わくわくビレッジでサマーセミナーを行った。30日午後12時から受付。参加者が揃ったところで無作為に5つのグループ(6人1組)をつくり、井上ひさし笑劇集から1グループ2作品をこれまた、無作為に選び、31日の午後1時から発表する。

初めての人、相手役のキャラクターなど、わからないことも多い即席の劇団。体育館に全員集合、各即席劇団の稽古が始まる。

お互い、他劇団の稽古が良く見えてしまう。自然と負けず生えてくる。熱気があふれる、暑さも加わり、汗が流れる、6時の夕食まで、猛稽古。

夕食後、稽古はいったんお休み。7時から野外に飛び出し、キャンプファイヤーを囲んで「ミニ・平和コンサート」。大熊啓氏(うたごえ協議会)の歌と合唱。憲法9条を守る闘いへの響きとなりおおいに盛り上がった。そして、深夜までテントの中で酒を飲み、交流会。明日にどんなことがあろうとも、深夜2時まで酒を飲む者はいた。

さて、31日の朝、早い者は午前5時起き、セリフを覚えるのに余念がない。また、稽古をはじめめるグループもある。朝食がすむと、全員の稽古開始。11時近くになると、余裕のグループと昼食ぎりぎりまで稽古をするグループもあった。発表会は笑いまた笑いで盛り上がった。

井上ひさし氏が「てんぷくトリオコント2」(さわ出版)の序文で。

「……(てんぷくトリオ)のおもしろさは『対立』にあります。(てんぷくトリオ)のどんな短いコントのなかにも必ず、最低一つか二つ対立が隠されています。対立のあるところにドラマがある。……つまり一言で申し上げれば、台本のなかから、まずこの『対立』を洗い出し、対立から『演技』や『くすぐり』を計算してゆくことが何よりも大切ではないかと思えます」

私たちは、この課題にどれだけ迫ることができたか。16時間近い稽古では不十分であるろうが、これからの私たちの芝居にも、このコント競演は役に立つであろう。

(境野修次)



奥羽ブロックゼミ

観て、飲んで、語って交流 湯田町で開催

9月3日～4日、湯田町銀河ホールの第13回地域演劇祭にあわせて、奥羽ブロックゼミを開催。

5劇団21人の参加。初日、秋田「能代小劇場」の「鬼の面」金子洋文/作、伊藤洋文/演出、「岩手ぶどう座」の「めくらぶんど」川村光夫/作・演出を観劇したのち、川村光夫氏による「演劇講座・劇の形を考える」に参加。夜、こばやし議長の「どこへ行けば、私たち」の問題提起を受け、あとは一目散に交流会会場へ。

八畳間の部屋にこばやし議長と銀河ホールの新田満氏を交えての23人、ギューギュー詰めの大交流会。翌日のブ

ロック会議の議題でもあった「奥羽ブロック担当の新運営委員」を、飲んだ勢いで全員一致、劇団未来半島の代表、仁木宏君に決定。さらに、新田満氏がその場で全り演に個人加盟を表明。おおいに盛り上がる。

翌日、午前には、奥羽ブロック会議を開き、各集団の活動報告とこれからの活動予定を報告しあい交流する。さまざま困難を抱えながらも、創造活動を停止することなく状況を切り開いていこうと確認しあう。午後、劇団はぐるまの「夜空の下に降る花は」いずみ凜/作、汲田正子/演出を観劇。

久しぶりのブロックゼミ。やはりゼミは必要と痛感。次のゼミをどうするか、今から計画を立てようとはしているのだが……。

(中野)



中部ブロックゼミ

明治27年建立 百年劇場

「明治座」で交流を深めよう

8月27、28日 中津川市加子母(旧加子母村2月合併)明治座へ、8劇団55人が集まり、中部ブロックゼミを開催した。

27日 18:50開会

- ・劇団演集「ユリイヌ」
- ・劇団すがお 朗読「父よ母よ」
- ・ゲスト出演 一人語り
- 「おはじき」(いちかわあつき 中津川市在住)
- ・交流会(夜明け劇団員の加子母別邸「越後屋」)
- ・宿泊(「越後屋」と近くの民宿)

- 28日 9:00 明治座見学
- ・劇団名芸「遺骨箱」
- ・劇団名古屋「フルムーン」
- ・劇団夜明け 朗読劇「仁王立」
- ・反省会
- 11:40閉会

以上の日程で実施。参加費は民宿宿泊者7000円、「越後屋」宿泊者3800円。

参加者の感想

今回の中部ブロックゼミは、会場・宿(交流会場)ともに今までにないすばらしい環境のなかで開催された。緑多い加子母、明治時代に建てられた歌舞伎小屋であぐらをかいて芝居を観る。さらに同じ明治の頃に建てられ、リフォームされた「劇団夜明け」劇団員の別邸「越後屋」で佃畑裏を囲みながら語り合う。実に贅沢な、また土地と人の温かみを感じさせるゼミで、またとない経験をする事ができた。

しかし、環境にまさる中身のあるゼミになつたであろうか。今回は各劇団がショート作品を持ち寄って披露しようという近年にない形で開催された。その試みはともお

もしろいものだったが、その中身は良く言えば持ち運びできる作品、悪く言えば身内だから披露できる作品が大半であった。

そのなかで「劇団演集」はブロックゼミのためだけに40分ほどの作品を作りあげてきた。久しぶりに演出された狩野氏は、仕事のため、終演後帰られてしまったが、なぜそのような意欲をもたれたのか伺いたかった。

もし今回のゼミに一般のお客さんが入ったとき、見せる事ができたであろうか。

「全リ演なんてこんなものか」と思われても文句はいえないと思う。

同じブロックの仲間であっても、競い合い高めあう関係を作るゼミを、つぎは期待したい。

(劇団夜明け 鈴木弘文
劇団名芸 佐藤智洋)



西会議ゼミ

即興ワークショップ

とんでもない人生

ゼミナールの即興ワークショップは第1、2回の絹川友梨氏から今回は今井敦氏が講師となった。今井氏は1957年生まれ。劇団スーパーカンパニーに所属。ミュージカルなどで活躍中だ。即興演劇のワークショップをきっかけに、参加者全員で物語を作っていくというパフォーマンスを考案した。

前回の絹川氏の「即興」講座では参加者の心が次第に解放されていき、でたらめの思いつきによって思いがけない不条理な空間がうまれるのがおもしろかった。即興劇の方法は役者はもちろん、劇作家が発想を豊かにするトレーニングとしても有効だ。

さて、今回の講座には20人ばかりが参加。まずはゲーム

でお互いのコミュニケーションをつくっていく。そして即興劇。最終的には「ボエム」と2種類の即興劇が2日目に発表された。劇のテーマは、最初の文字を決める。次にその文字で始まる言葉を、みんなが輪になってそれぞれ発音する。パラパラの言葉がくりかえされるうちに一つの言葉になつていく、というふうに決める。たとえば、「ち」で始まる言葉を言ううちに全員が「地球」で終わるというように。

2日目の発表では「雲」というテーマが決まった。まず「ボエム」、参加者が作る即興の詩である。それぞれがぐるぐる回りながら、雲からイメージする言葉を発していく。みんなが終わりと思つたところでおわる。なんにも打ち合わせなくとも落ちつくべきところへ落ちついていくものだ。

即興劇の発表、まずは「主役」という即興劇。参加者のなかから若者座のユッキー(ニックネーム)が選ばれ、主役に。テーマは「ボエム」のときに選んだ「雲」。ユッキーに対して参加者が次から次へと場面を提案し、セリフを投げかけていく。主役はその運命をすべて受け入れなければならぬ。私は「雲を盗んだのは君か」とでたらめのセリフを投げかけた。主役には次から次へとんでもない場面が脈絡なく出現し、見ていておもしろい。私の場合、セリフをいくつか頭ひにかき書いてしまう。だからひよっとしたら純粹の即興とはいえないのかもしれない。ひととおりの終わつたところでユッキーはそれまでに繰り広げられた自分の人生をモノログで回顧する。ユッキーに次々と不可解なことが襲いかかり、本当にとんでもない人

生だった。

次の即興劇は「ドミノ」。テーマはやはり「雲」。ひとりが即興で演じるころへ、次の一人が登場し、思いつきの場面やセリフを投げかければならない。しばらく会話が繰り返られるとまた次の人が登場。ドミノのようにどんどん人が交代し場面が変わっていく。最後には、最初に登場した人がしめくくる。劇団あしぶえの有田さんは苦勞人に見える。相手役がやりやすいように、ていねいにセリフや場面を投げかけてあげる。即興劇はやる人間の性格がよく分かる。考えるまもなく言葉を発するから当然のことかもしれない。私は慎重に自分を隠したつもりだが、ひよっとしたら、自分の性格の断片をいくつかさらけだしていたかもしれない。

(楠幸男)

全日本リテリズム演劇会議 住所録

東 会 議

ブロック	劇 団 名	〒	住 所	電 話	F A X
北海道	劇団さつぽろ	063-0053	札幌市西区宮の沢3条4-14-8	011-663-6259	011-663-8198
	ドラマシアターピロ	067-0074	江別市高砂町 37-90 安念智康方	011-384-4011	011-384-4012
	劇団弘演	036-8275	弘前市城西 3-14-10	0172-35-4670	同左
	劇団支木	030-0822	青森市中央 2丁目 4-6	0177-77-4677	同左
奥	黒石演劇研究会	036-0305	黒石市乙徳兵衛町 51 加賀谷方	0172-52-4097	同左
	劇団やませ	031-0804	八戸市青葉 2-2-13	0178-44-8893	0178-43-8236
	劇団未来半島	035-0053	むつ市緑町 26-2(丸丸二物産内 仁木方	0175-22-2048	0175-23-4875
	劇団山形	990-2423	山形市東青田町 5丁目 8-5	0236-32-4105	
東北	劇団だいごん座	997-0832	鶴岡市青柳町 43-32 たんぽぽ保育園内	0235-24-1688	
	仙台小劇場	980-0011	仙台市太白区長町 1-9-29 高松ビル 3-C	022-746-3485	同左
	劇団群馬中芸	371-0101	群馬県勢多郡富土見村赤城山大河原 626-498	027-288-2700	027-288-2792
	劇団埼玉	362-0032	上尾市日の出町 4-508-1	048-777-4430	同左
関	劇団久喜座	346-0003	久喜市中央 1-3-13 江原方	0480-21-0664	
	青年劇場	160-0022	東京都新宿区新宿 2-9-20 間川ビル 4F	03-3352-6922	03-3352-9418
	劇団銅鑼	174-0064	東京都板橋区中台 1-1-4	03-3937-1101	03-3937-1103
	東京芸術座	177-0042	東京都練馬区下石神井 4-19-11	03-3997-4341	03-3904-0151
東	劇団展望	166-0004	東京都杉並区阿佐谷南 3-3-32	03-3393-2739	
	劇団石るつ	134-0088	東京都江戸川区西葛西 3-15-8-701 いとうエリコ方	03-3804-0507	
	演劇集団土くれ	120-0003	東京都足立区東和 5丁目 12-7-103 石塚方	03-3629-3286	同左
	劇団ひの	191-0012	東京都日野市日野 403-3	0425-84-3436	同左

ブロック	劇 団 名	〒	住 所	電 話	F A X
関東	京浜協同劇団	212-0052	川崎市幸区古市場 2-109	044-511-4951	044-533-6694
	劇団若生樹	220-0046	横浜市西区西戸部町 2-192-14 濱田方	045-242-3584	
山	劇団やまなみ	400-0867	甲府市青沼 1-8-5 梅津方	0552-33-9556	同左
	劇団静芸	420-0872	静岡市昭府町 1丁目 10-37	054-273-0604	
	劇団からつかぜ	431-0201	浜松市篠原町 21505	0534-49-0937	同左
	劇団火の鳥	420-0941	静岡市松富 3-60-30-3 泉地守方	054-273-0718	
静	岡崎演劇集団	444-2123	岡崎市鶴田南町 8-11	0564-28-3363	同左
	劇団名芸	468-0011	名古屋市太白区平針 1丁目 1808 (急ぎ、小包類は 457-0016名古屋南区沙田町 11-8(栗木))	052-803-2922	同左
	名古屋演劇集団	451-0016	名古屋市西区庄内通 4-16-3	052-524-5975	同左
	劇団名古屋	456-0018	名古屋市熱田区新尾頭町 2-2-19	052-682-6014	
中	劇団上野市民劇場	518-0873	上野市丸の内 共同ビル 3F	0595-23-5252	0595-24-6444
	劇団すかお	511-0943	桑名市森忠睦美丘 1058	0594-31-4210	同左
	劇団夜明け	508-0001	中津川市中津川 869-71	0573-65-4937	同左
	劇団はぐるま	500-8882	岐阜市西野町 1-11	058-265-1852	058-262-1652
部	劇団たけぶえ	915-0857	武生市西四郎丸町 2-2	0778-23-0147	0778-23-4095

西 会 議

大阪	関西芸術座	557-0042	大阪市西成区岸ノ里東 2-10-2	06-6661-2112	06-6661-2060
	劇団潮流	557-0034	大阪市西成区松 1-6-17 橋ノターザール内	06-6658-2315	06-6666-4121
	劇団未来	536-0007	大阪市城東区成育 1-4-23	06-6939-5777	同左
	劇団きつがわ	551-0031	大阪市大正区泉尾 4-2-7	06-6551-3481	同左

プロダクション	劇団名	〒	住 所	電 話	F A X
大 阪	劇団大阪	542-0012	大阪市中央区谷町 7-1-39 新谷町第 2 ビル 103	06-6768-9957	同左
	劇団コーロ	546-0024	大阪市東住吉区公園南矢田 2-4-7	06-6695-6401	06-6695-6405
	人形劇団クラルテ	559-0015	大阪市住之江区南加賀屋 3-1-7	06-6685-5601	06-6686-3461
京 都	大阪府職劇研	540-0008	大阪市中央区大手前 2-1-22 府職会館府職労書記局内	06-6941-4541	同左
	劇団息吹	578-0913	東大阪市中野 224-14 かわち勤労会館内	0729-644441	同左
和歌山	劇団京芸	612-8279	京都市伏見区納所北城廻 31-18	050-3385-3822	075-631-2609
	人間座	606-0865	京都市左京区下鴨東高木町 11	075-721-4763	同左
神 戸	演劇集団和歌山	641-0022	和歌山市和歌浦南 1-1-14	0734-45-4537	同左
	劇団四紀念	650-0022	神戸市中央区元町通 2-9-1612	078-392-2421	078-392-2422
	劇団どろ	652-0803	神戸市兵庫区大開通 7-4-7 谷垣ビル 4F	078-731-0710	同左
	神戸職演連	650-0011	神戸市中央区下山手通 9-9-7 西藤ビル	078-351-6969	同左
	劇団かすがい	661-0022	尼崎市尾浜町 1-31-12	06-6428-7292	同左
中 国	神戸ドラマ館ボレロ	650-0011	神戸市中央区下山手通 9-9-7 西藤ビル 2F	078-361-9870	同左
	劇団月旺会	730-0851	広島市中区榎町 4-27 岩井方	082-234-9656	同左
	劇団若者座	755-0003	宇部市則貞 3-12-5	083-641-2842	083-644-2124
	劇団演劇街	753-0056	山口市湯田温泉 6-3-28 柳沢方	0839-20-2739	同左
	劇団あしおえ	690-2105	高根県松江市八雲町平原 481-1 しいの実シアター	0852-54-2400	0852-54-2411
四 国	劇団こじか座	790-0821	松山市木屋町 4-35-1 酒井方	0899-24-3415	同左
	福岡現代劇場	810-0022	福岡市中央区薬院 1-6-5-410	092-751-7982	092-831-1696
	劇団生活舞台	815-0083	福岡市南区高宮 1-4-12-505 松尾方	092-531-1166	
	劇団道化	818-0125	太宰府市五条 1-10-1 斎藤ビル 2F	092-922-9738	092-922-9812

個人加盟

氏 名	〒	住 所	電 話	F A X
秋山 昇	321-1500	栃木郡上都賀郡足尾町神子内	0288-93-3909	同左
飯島けい子	438-0201	静岡県磐田郡竜洋町中島 1120-27	0538-66-7536	同左
石上 慎	090-0801	北海道北見市春光町 5-5-2	0157-61-4659	同左
大橋 喜一	211-0006	川崎市中原区丸子通 2-682-604	044-733-0627	
岡田 和義	176-0003	東京都練馬区羽沢 2-12-8	03-3991-1723	
川島 柳一	270-2251	千葉県松戸市金ヶ作 57-57	0473-84-6207	同左
こうじ谷 一郎	924-0805	松任市若宮町 2-4	0762-75-2755	
桜井 裕子	921-8157	金沢市山科 3-6-10 早川方	0762-44-2802	
島田 たろう	476-0002	愛知県東海市名和町中首羅 8-71	052-609-4554	
薪田 満	029-5512	岩手県和賀郡西和賀町川尻 40-157-7	0197-82-3040	同左
油上恵子	197-0012	東京都福生市加美平 2-2-13-305	042-530-3825	同左
よしだ はじめ	178-0061	東京都練馬区大泉学園町 7-15-30	03-3924-6107	同左
阿部 好一	565-0851	吹田市千里山西 3-30-16	06-6385-3330	
東川 宗彦	581-0865	八尾市服部川 9-48	0729-41-0554	
栗原 省	643-0111	和歌山県有田郡吉備町庄 684-32	0737-52-5963	0737-52-6099
小松 徹	662-0947	西宮市宮前町 8-8 ネオハイッ宮前町 401	0798-36-8341	
田中 實	581-0081	八尾市南本町 2-6-32	0729-99-9437	同左
藤原 重孝	753-0041	山口市東山 2-9-10	0839-22-0393	
星野 明彦	854-0021	諫早市仲沖町 14-20 ハイカール仲沖 I-103	0957-21-1253	同左
又川 邦義	673-0883	明石市中崎 2-4-1-1310	078-913-6629	
松永 英樹	753-0067	山口市赤妻町 1-67	0839-22-6071	
中村 ジョー	810-0004	福岡市中央区渡辺通 5-24-3201 末安ビル 劇団テアトルハカチ内	092-737-7685	

西 会 議

友好劇団

劇団名	〒	住 所	電 話	F A X
アートステージくしろ	085-0816	釧路市貝塚 1-6-19 加藤たけはる方	0154-42-8009	
劇団新芸	047-0261	小樽市鏡函町 3-23-162 鹿角優一方	0134-27-3746	
劇団新劇場	007-0871	札幌市東区伏古 11 条 2-396-47	011-784-9908	
劇団河童	090-0036	北見市幸町 8-3-4 扇谷国男方	0157-25-8348	同左
劇団湖(うみ)	068-2161	三笠市本郷町 578-9 加藤元方	0126-72-3044	同左
劇団ペルソナ	062-0934	札幌市豊平区平岸 4 条 12-8-4 秋元博行方	011-811-9036	
函館創芸	041-0844	函館市川原町 2-5 長谷川潔方	0138-53-7520	
劇団海鳴り	094-0006	紋別市潮見町 2-3-40 我孫子正好方	01582-3-3238	
劇団うみねこ	047-0042	小樽市未広町 1-10 吉川勝彦方	0134-32-0607	
劇団波	045-0031	北海道岩内郡共和町梨野舞納 駒形勝博方	0135-62-3797	
劇団にれ	047-0263	小樽市美晴町 10-14 柴山良宏方	0134-62-4507	
劇団シアターII	060-0005	札幌市中央区北 5 条西 27-3-5-503	011-643-8238	
札幌ろうあ劇団舞夢	063-0802	札幌市西区 2 軒 2 条 6 丁目 身体障害者福祉センター聴覚障害者協会	011-642-8010	
劇団風の子北海道	001-0033	札幌市北区北 33 条 11 丁目	011-726-3619	
劇団川	067-0056	江別市美原 1695 春日基方	011-384-6064	
劇団鳶群別	048-2335	北海道余市郡仁木町銀山 3-163 関孝心方	0135-33-5257	
劇団なよろ	096-0065	名寄市大橋 90-1 教員住宅 21 松岡義和方	01654-3-1049	
釧路演劇集団	085-0026	釧路市寿町 2-5-13 中山友征方	0154-23-6551	
繁次郎劇団	043-0052	北海道檜山郡江差町字茂尻町 71 江差町文科会館内	01395-2-5115	01395-2-5594
演劇集団末踏	121-0816	東京都足立区梅島 1-9-1	03-3880-0034	

劇 団 名	〒	住 所	電 話	F A X
演劇サークル麦の会	133-0051	東京都江戸川区北小岩 7-3-20	03-3659-8704	同左
川崎演劇塾	214-0005	川崎市多摩区寺尾台 2-8-1-12-504	044-951-9819	
劇団津演	514-0027	津市大門 31-28 仏教会館内 岸武雄方	0592-26-1089	
ドラマサークル演劇研究所	420-0948	静岡市秋山町 2-1715	054-271-0177	
劇団はにわ	462-0831	名古屋市北区城東町 485 サンパーク志賀本通 402 号 香川このみ方	052-981-5482	同左
演劇集団瞬(とき)	602-0000	京都市上京区芦山寺通千本東入ル北玄蕃町 51-7 山脇方	075-414-8624	
人形劇団京芸	611-0022	宇治市白川鍋倉山 35-20	0774-21-4080	
劇団自立の会	620-0016	大津市比叡平 2-35-5	077-529-8057	同左
シアター生駒	630-0222	生駒市巻分町 67-17 岡昌美方	0743-77-0103	
演劇集団あり	683-0037	米子市昭和町 3-2 宮倉方	0859-33-6592	同左
劇団阿波つ子	770-0023	徳島市佐古三番町 8-17 船越智子方	0886-23-5670	
岡山職場演劇集団	719-1144	総社市富原 480-3 岩木方	08669-2-4325	
座・わだち	572-0045	復屋川市東神田町 22-21 安田幸二方	072-828-1349	
演劇サークルトラム	753-0041	山口市東山 2-9-10 藤原方	0839-22-0393	
劇団テアトルハカタ	810-0004	福岡市中央区渡辺通 5-24-3-201 未安ビル	092-737-7685	092-737-7689

演劇団体	〒	住所	電話	FAX
こばやしひろし	501-0104	岐阜市寺田882 円成寺	0582-51-0490	0582-52-3694
後藤 陽吉	184-0014	小金井市貫井南町 5-12-13	042-381-1590	同左
中野 健	038-0022	青森市浪館前田 85-23	0177-81-8542	同左
藤沢 薫	615-8152	京都市西京区椋原内垣外町 25-1-A403	075-391-5039	同左
猿渡 公一	814-0033	福岡市早良区有田 2-2-9	092-831-1696	同左
熊本 一	630-0135	生駒市南田原 1230-60 (西会談事務局を兼務)	0743-78-2558	同左
岡田 武司	675-0104	加古川市平岡町土山 953-8	078-944-5013	同左
城谷 護	212-0051	川崎市幸区東古市場 9-21 (事務局長)	044-544-3737	同左
浅野 真理子	500-8882	岐阜市西野町 1-11 劇団はぐるま内	058-265-1852	058-262-1652
熊本 一	630-0135	生駒市南田原 1230-60 (事務局次長)	0743-78-2558	同左
清原 正次	570-0079	守口市金下町 1-12-13 (西会談事務局次長)	06-6993-3113	同左
後藤 陽吉	184-0014	小金井市貫井南町 5-12-13	042-381-1590	同左
境野 修次	272-0136	千葉県市川市新浜 1-23-5-103	047-356-7217	同左
郡司 勇	179-0072	東京都練馬区光が丘 2-10-3-505	03-3976-9035	同左
よしだ はじめ	178-0061	東京都練馬区大泉学園町 7-15-30	03-3924-6107	同左
栗原 省	643-0111	和歌山県有田郡吉備町庄 684-32	0737-52-5963	0737-52-6099
楠本 幸男	640-8391	和歌山市加納 271-14	0734-73-7589	同左
田坪 文一	536-0014	大阪市城東区鳴野西 5-1-1-214	06-6963-0120	同左

編集後記

☆10月17日、小泉首相は5度目の靖国神社参拝をした。「軍国主義の最悪の伝統に奉じる拳」(米紙NY・タイムズ)「中国と韓国の怒りを引き起こしている」(英紙フィナンシャル・タイムズ)など、内外からきびしい批判が出ている。

☆靖国神社は、過去の日本の侵略戦争を「自存自衛」の正しい戦争だったと正当化することを目的にした特殊な神社だ。

☆「憲法9条改悪を許すな」シリーズ。各劇団の活動をさらに広く、知らせていきたい。引き続き企画を練ってほしい。

☆巻頭言(城谷護事務局長)で痛感することは、劇団の活力になり、学ぶことのできる「演劇会議」誌に、なお一層、していかなければならない。読者もじりじり

と減少しているが、各劇団も維持に努力はしている(劇団名古屋は5部も増誌)。もつと魅力ある、学べる「演劇会議」にしなければ。

☆100頁という制約はあるが内容の充実が必要だ。そこで、意見・企画など提案してください。劇団通信は500字を限度に、工夫をこらした活動報告を送ってください。(境野)

【原稿の送付について】
次号(3月号)の締切は1月20日です。

戯曲などは作品ができたときにすぐ送ってください。また、劇評なども各劇団で依頼して上演が終わり次第送ってください。

- ①戯曲は、境野修次または、栗原省へ。
 - ②劇団通信および舞台写真は、(株)シイム内、石田章へ
 - ③それ以外の原稿は、必ず、東会談は境野修次、西会談は栗原省に送ること。
- ※原稿は、メールまたはフロッピーを送っていただければ効果もよく助かります(その場合は念のため原稿のコピーもあわせてお送りください)。

後藤 陽吉
〒184-0014
小金井市貫井南町 5-12-13
TEL&FAX 0423-81-1590

栗原 省
〒643-0111 和歌山県
有田郡吉備町庄 684-32
TEL 0737-52-5963
FAX 0737-52-6099

境野 修次
〒272-0136
市川市新浜 1-23-5-103
TEL&FAX 047-356-7217

(株)シイム
〒547-0027
大阪市平野区喜連5-1-45
TEL 06-6707-3833
FAX 06-6799-3833
E-mail
shiimu @ lime.ocn.ne.jp

演劇会議 119号 2005年11月5日発行 定価 700円(送料240円)

編集長 後藤陽吉
編集委員 境野修次 よしだはじめ 郡司 勇 栗原 省 楠本幸男 田坪文一
発行所 〒212-0052 神奈川県川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団
TEL/044-511-4951 FAX/044-533-6694

誌代振込先(郵便振替)口座番号 00200-4-78639
全日本リズム演劇会議事務局(〒212-0052 神奈川県川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団・城谷護)